TS竜人は平和に暮らしたかっただけなのにいつの間にか天下統一をしなければならなくなりました

雅媛

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気づいたら中世ド田舎に転生していました。

農業がつらすぎてスローライフとは程遠いですが、仲の良い家族に囲まれてソコソコ幸せに過ごしていました。このまま適当に人生が終わると思っていたのですが……

迫る暗殺に討伐隊、他国の軍隊に魔王まで。

とにかく命を狙われすぎてしんどすぎる、そんな人生を生きる、ＴＳ転生者である私のお話です。

主人公イメージ

ＴｒｉｎＡｒｔ加筆修正

目次

第一章　男爵領の平和な日々と突然訪れる困難

1　田舎で農業はスローライフではない ―― 1
2　これでも一応貴族令嬢です ―― 11
3　突然の暗殺者来襲 ―― 20
4　苦戦 ―― 29
5　知らなかったこと ―― 40
6　嵐の前触れ ―― 51
7　開戦準備 ―― 59
8　前哨戦 ―― 67
9　戦の始まり ―― 77
10　決闘 ―― 89

第二章　皇女と辺境伯

1　戦のあとの後片付け ―― 100
2　辺境伯領までの道中 ―― 109
3　交渉の始まり ―― 118
4　話し合い ―― 128
5　最終交渉 ―― 138
6　辺境伯のお仕事 ―― 148
7　辺境伯就任式準備 ―― 160
8　辺境伯就任式 ―― 169
9　辺境伯の日常 ―― 178
10　戦の風が吹き始める ―― 188

第三章　お兄様公爵とうちのお義兄さま

1　前線　198
2　夜襲　207
3　本隊　220
4　公爵　231
5　決闘　242
6　戦後　252
7　内政　261
8　技術　272

第一章　男爵領の平和な日々と突然訪れる困難

1　田舎で農業はスローライフではない

みなさんこんにちは、はじめまして

突然ですが、社畜おじさんから過労死して、異世界で美少女になりました。

転生先は剣と魔法の世界と言われるような、技術は中世レベルな一方、魔法がある世界です。

そんな世界に、美少女、しかも竜人と言われるレア種族で転生しました。

銀髪碧眼とか言う厨二心くすぐる属性を完全に備えた美少女です。

竜人ゆえに、頭から銀色の角は生えているし、蝙蝠の羽が背中から生えているし、お尻からはトカゲのしっぽが生えていますが……　それらがついていても前世目線で見ても普通に美少女ですし、周りからも外見は結構褒められますから今の世界の水準でも美少女で間違いないでしょう。

身長は低く１４０ｃｍに届かないぐらいの低身長ですが、まだローティーンにもかかわらず巨乳で安産型のエロボディですよ。こちらでは成人と言われる年齢とはいえ、前世と違って二次性徴始まれば成人扱いですから、さらにまだ成長の可能性があるといえ

ます。もうヤバいですね。身長も伸びてほしいですが……　ここ最近全然身長が伸びていないので、そこは正直あまり期待できなさそうなのだけが残念です。

人種のおかげか何なのかはわかりませんが、身体能力も圧倒的に高いのも良いところです。純人と言われる前世で言う普通の人に比べると、圧倒的なパワーです。今の年齢で大の大人より余裕で力がある、と言えばそのすごさはわかるでしょう。まあ、前世と違って鍛えるとすごい勢いで身体能力伸びますから、単純な鍛錬のおかげもありそうですが……

もちろん欠点がないわけではないですが、それはおいおい話していきましょう。

さて、そんな美少女に転生したら皆さんはどうするでしょうか？

イケメンを侍らす？

大冒険に向かう？

国で重要な地位を目指す？

それとも田舎でスローライフをする？

いろいろ考えはあると思います。

ボクは物心ついたころから、田舎で暮らして今は毎日農業をして暮らしています。

物心つく前はもっと大きな町にいたようですが、色々あってシングルマザーになった

母が今住んでいるド田舎の村に引っ越してきて、義父と結婚し、今はそこに住んでいます。

田舎で農業と言うとスローライフだ、と思われる方もいるかもしれませんが、正直に言いましょう。

農業舐めんなよ

農業は無茶苦茶大変なのです。前世はあれだけ機械化されていても大変そうでしたが、今世では技術は中世レベルですから機械なんかありません。全部人力です。魔法は全く役に立ちません。

いや、普段の生活には非常に役に立つんですよ。火種を簡単に作れますし、水とかも結構簡単に生み出せますから生活には重要な役割を果たしています。ですが、農作業には役に立ちません。

土魔法でボコボコしていくよりも手で耕した方がよっぽど早いのです。

なんにしろ、広い畑を人力で丁寧に耕す必要があります。

鍬を振り上げ、振り下ろす。これだけでも非常に大変な作業です。

しかもちゃんと耕さない、耕すことから手を抜くと収穫量は駄々下がりします。

当然ですが、その回数も半端ないです。

一人が1年間食べるために必要なだけの農地の広さ知ってますか？

1万平方メートル、１００ｍ×１００ｍの農地が必要なんですよ。ウチの世帯は母と義理の父、義理の兄の４人家族ですから、それがかける４です。

それを人力で耕すんですから途方に暮れるレベルです。

ここで上げた面積は、最低限必要な畑の広さであり、実際うちが持ってる畑はこの倍以上の広さがあります。

種植えの季節が近づくと、朝から晩まで耕して、それが終われば朝から晩まで種植えして、それが終われば朝から晩まで雑草を取って……

死ぬほど苦労して毎年食料を生産するわけですよ。

しかも農家の仕事はこれだけではありません。

害獣が出れば狩りに行きますし、毎日の燃料のために柴刈りなんかもしますし、やることが、やることが多いのです……

だれだスローライフとか言ったやつ。

出てこい。この農業地獄を味わわせてやる。

◇　◆　◇　◆　◇

「うおおおおお」

他人に文句を言ってもしょうがないので今日もいつものように必死に畑を耕します。今はまだ肌寒い冬の終わりです。ですがこのころから耕さないと、種まきに間に合いません。

幸い、誕生日プレゼントに行商人から買ってもらった鉄の鍬は非常に使いやすく、今までの木製のモノに比べると効率が倍以上なのは助かります。義父は、誕生日プレゼントなんだし、と人形やら綺麗な服やらを勧めてきましたが……　前世の知識に引きずられているのか、そう言ったものに全く興味がないんですよね……

何にしろ、新しい鉄製鍬のおかげで、数日でうちの畑は全部耕すことができるでしょう。

ちなみに魔法はありますが、農作業には基本役に立ちません。

日常生活には火種を作ったり、水を生成したりと役に立つ部分も多いのですが、この広い畑を耕すのは魔法では明らかに出力不足です。土魔法でボコっとすると一応耕せるのですが、ボクの魔法では鍬を振り下ろす1回分ぐらいの面積しかできませんし……

それなら鍬を振ったほうが圧倒的に早いです。

もっと魔法の勉強とかしたいですが、こんなド田舎ではどうしても限界がありました。本で独学ですからね。

そんな、今ボクがつかえるレベルのショボ魔法でも、日常生活では役に立っています。村の人にも教えたら喜ばれました。

「アーシェ、頑張るのもいいけど、嫁入り前の娘がそんな肌を出しちゃいけないよ」

「大丈夫ですよお義兄さま」

そんなこんなで、乙女力が０どころかマイナスになるような声を上げながら全力で畑を耕していると、ボクの声を聞きつけたのでしょう、義兄が家の方から出てきて、声をかけてきます。

義兄は比較的平凡な顔と、農業と武術で鍛えられた筋肉を持っています。身長もボクより頭一つ以上大きいです。とはいえ真面目な性格から村ではまあまあモテている方ぐらいですね。

外見はそれくらいの平凡な感じですが、妹であるボクに対しては心配性で駄々甘なシスコンです。

町とかに買い出しに行くと、お土産は自分用のモノなんてまったくなく、ボク向けの

お菓子やら本やら、ボクの欲しいものしか買ってきません。正直我儘を言えばどんなことでも聞いてくれそうなぐらい甘いです。

そんな義兄がボクを見ると自分の着ていた上着をボクに渡そうとしてきます。

言いたいことはよくわかります。なんせ現状ほとんど下着だけの姿ですからね。一応胸を隠すための布を胸に巻いて、紐パンと言われるような下履きを着ていますが……

あとは靴だけだから正直痴女みたいな格好だという自覚はあります。

だけど、普通の服を着ると暑くてしょうがないのです。

竜人という種族のデメリットというか、圧倒的な身体能力の副作用なのかわかりませんが、運動するととにかく体が火照ります。暑くてしょうがないのです。

そんな特性のせいで、雪が積もるような時期でも薄い服一枚で全く問題ないという利点もあるのですが、基本的には普通に服を着ると暑くてしょうがないという欠点の方が目につきます。今日みたいなまだ肌寒い季節でも動けばすぐにあったかくなり、人力暖房になれるぐらいです。

だから動く時は大事なところだけ隠す、ほとんど痴女みたいな格好にならざるを得ないのです。

とはいえ年齢が二桁を超え、色々出るところは出ている美少女がそんな格好をしていれば心配性で優しい義兄としては心配でならないのもわかります。

前までは、まだ子供だったからそこまでうるさく言われ……　いや、義兄には結構最初からうるさく言われていたな……

「ほら、私の上着貸すから羽織りなさい」
「はーい」

しぶしぶ義兄から渡された上着を羽織ります。
サイズ差がすごいため上着を借りると結構ぶかぶかです。前を閉じれば、太腿丈ぐらいになりますし、まあちゃんと隠れているといえるでしょう。

「すんすん……　お兄さまの匂いがする」
「すまない、着ていた奴だから」
「いやじゃないですよ、いい匂いです」

袖を顔に当ててなんとなく匂いを嗅ぎます。
毎日清潔にしているとはいえ義兄の上着は汗の匂いがしました。おそらくさっきまで剣の素振りでもしてたのでしょう。

とはいえ嫌な匂いではありません。嗅ぎなれた、安心できる匂いです。
暑いなぁ、と思いながらも、義兄の心配を受け入れ、ボクは上着をはためかしながら再度鍬を振いはじめます。

「無理に頑張らなくてもいいんだよ」
「やりたいからやってるんです」

正直仕事以外やることは少ないですし、家一番の大飯ぐらいのボクとしては、自分の食い扶持分ぐらいは頑張りたいのです。
身体能力が高いせいか、おなかが非常に空いて義兄や義父よりもよく食べてしまうのです。燃費の悪さも竜人の欠点ですね。
二人ともいっぱい食べるボクをかわいいとは言ってくれますが、さすがに食べるだけでは悪すぎるので頑張って働かないといけないでしょう。
ボクが作業を辞めないのを察した義兄は、自分の鍬を持って畑を耕し始めました。

「鍛錬はいいのですか？」
「鍬を振るうのも鍛錬になるし、終わったら二人で打ち合いした方が効率的そうだから

大丈夫だよ」

「わかりました、終わったら打ち合いにお付き合いします」

適当に雑談をしながら、ボクは義兄と一緒に鍬を振るうのでした。

2　これでも一応貴族令嬢です

ボクの家庭は、ちょっと複雑です。

母と、義父と義兄の４人家族ですが、義父と義兄とは血がつながっていません。

もともと都会の方に住んでいた母はボクの小さいころに今いる村までボクを連れて移住してきた、と聞いています。実の父親は移住直前に亡くなったとか。

この辺り、まだボクの物心つく前だから全く覚えてないんですよね。

赤ん坊のころから記憶がある転生者の話も前世では見たことありましたが、残念ながらボクの場合はそんなことは全くないようです。

何にしろ、今住んでいる村に来て、母は義父と結婚しました。

なので物心ついたころから父親というと義父ですし、兄と言ったら義兄です。

そんな関係ですから、義父も義兄も血がつながってないわけですが、二人ともボクには駄々甘です。

そういう意味では結構幸せな生活をさせていただいているわけです。農業辛いですが。

そんな義父ですが、実は男爵様で貴族だったりします。

貴族というとすごそうですが、領地である男爵領は村一つで、住民は２００人もいません。

ぶっちゃけて言えば村長さんですね。村長さんというと弱そうですが、男爵様というと強そうに聞こえるのは何なのでしょう。

ですから私も男爵令嬢というれっきとした貴族だったりします。

まあ、毎日畑を耕して、時には熊やら猪やらを狩る、なんて貴族とはかけ離れた生活をしていますが。

正直、貨幣経済が発達していませんから、租税と言っても麦であり、うちでも死ぬほど取れますから貰ってもしょうがないんですよね……

村のみんなも一生懸命農業していますから、基本食料は結構余り気味です。バリエーションが少ないせいで、ボクが肉を狩ってくると毎回お祭り騒ぎですがせいぜいそのレベルであり、餓死とかそういったことはボクがこの村に来てから一度もありません。

貴族令嬢とは、もっとおしとやかに生きる生き物ではないのだろうかと思うこともあります。

もっとも、刺繍してお茶を飲んで過ごすとかボクにはとても無理無理カタツムリな生活ですので、今の方がいいのでしょう。

過去を語らないので正確なところはわかりませんが推定結構いいところの貴族出身

だろう母も、毎日楽しそうに仕事しているのを見ると、貴族と言ってもこんなものなのかな、と思ったりしてしまいます。

純人である母はボクほど身体能力が高いわけではないので、やっているのは基本薬草を取ってきてお医者さんのまねごとですが、医者がいないこの村では非常に重宝されています。

さて、そんな男爵家なウチですが、他の村人と大きく違うところが一つあります。

貴族というのは自分の領を守るため戦わないといけません。なので男爵軍が結成されているんですね。

メンバーは、義父がリーダーで、隊員として義兄とボク、以上です。

これで軍という度胸がすごいと思います。総勢３人。前世で言う小隊どころか分隊にも足りていません。

まあ村人がだいたい２００人ですから３人もいれば上出来なのかもしれません。

前世日本の戦国時代末期には１万石当たり１５０人程度の兵士が準備できたそうです。

１万石を住民１万人と大体同義と考えれば、１．５％です。２００人の村なら３人で割合的にも正しいわけです。

そんな少数で精鋭でもない間に合わせの男爵軍ですが、暴力機関の所属である以上、武術の修行が必要なわけです。

修行と行っても教えるのは義父で、素振りをしたり、試合といった、あまり変わり映えのしないことばかりです。

今日は畑を耕したので素振りを飛ばして早速義兄と試合することになりました。

お互いいつもの木刀をもって、向かい合って構えます。

ボクの木刀は１ｍを優に超える長いもので、義兄の木刀は義父と同じ１ｍ弱の長さのモノです。パワーがあるボクは普段から大きな剣をぶんまわしているので、それに合った長さの木刀を使っています。

ボクの方は大上段に構え、義兄の方は八双と言われる、野球のバットのような構えを取ります。

「じゃあ行きますよ」

「……」

兄の返事を待たずに、ボクは思いっきり木刀を振り下ろしました。

ドゴォ!!　と地面を抉る一撃を、義兄は冷静に一歩下がって躱します。

ボクはそのまま、切り返して木刀を振り上げました。
下から跳ね上がる木刀を義兄はまた躱します。

「せやっ!!」
「……」
「とりゃっ!!」
「……」

横なぎ、袈裟懸け、突き、そしてまた上段から唐竹割り、と、ボクはどんどんと攻めますが、義兄は冷静にかわしていきます。
初めて試合をした時は、受け止めようとした義兄の木刀をへし折って脳天をぶん殴って大騒ぎになりましたが、今では冷静に見切られてしまうのが少し悔しいところです。

「どっっっせい!!」
「っ!!」

再度きり上げた時、躱し損ねた義兄はボクの木刀を自分の木刀で受け止めました。

そのままボクが全力で振り上げると、義兄の木刀は天高く吹き飛んでいきました。

「よし、そんなところだろう。アーシェはまた速くなっているな。いいぞ」

「えへへ」

「クリスもよく見ていたのは良かったが、最後のをうまく受け流せれば満点だったな」

「あれは厳しいよ、父さん」

試合を見ていた義父がボク達の試合の内容について講評を始めます。

純粋な身体能力ならボクも義兄もすでに義父を超えていると思いますが、技術的には義父の方が圧倒的ですので、教わることが多いです。

男爵家に伝わる剣術ということですが、田舎で細々と伝わっている技術とは思えないぐらい多彩な技があります。

「じゃあ今からアーシェの剣を受け流すから、見て学べよ。アーシェ、かかってこい」

「それでは早速」

いつもの大上段から、全力で木刀を振り下ろします。

そのまま横に構えていた義父の木刀に当たると……
ぬるり、という感触とともにボクの振り下ろした木刀が義父から逸れ、真横の地面を砕きます。
木刀同士がぶつかる感覚でもなく、かといって、互いがこすれる感覚でもなく、蛸か何かの表面を撫でたかのようなぬるり、という感覚で木刀が逸れました。
木刀の勢いを技術で逸らされてしまいます。このやり方は、ボクも教えてもらったのですが、余りあっていないようで、全くうまく使えません。

「えいっ！　えいっ!!」
「やはりアーシェの一撃は重いな」

最初のように受け流されてすっころぶ、なんてことはなくなりましたが、それでも体勢を崩さないようにするのは結構大変です。このまま続ければ、結局ボクの方が不利でしょう。
なので……

「こっこっ!!」

「くっ!?」

受け流されそうな剣筋を途中で強引に方向を変えます。
技術も何もない、純粋な力技ですが、そのおかげでガチッ、と木刀同士が垂直に当たります。

「ふんっ!!」

もっとも、このまま鍔迫り合いに持ち込んでもまた流されるなりしてしまうでしょう。
なので接触した瞬間、ほんのわずかだけ木刀を引き、その見えない距離に全集中力をつぎ込んで再度木刀を義父の木刀にぶち当てました。
バンっという音を立てて、お互いの木刀がはじけとびます。

「……ここまでにしよう。教えた技は上手く使えているようだね」
「こっちの方がボクには向いていそうです」
「向き不向きはあるからね。得意を伸ばすか、苦手を克服するかはアーシェに任せるよ」

今木刀を砕いた技は地の技と呼ばれる、義父に教えてもらった技の応用です。

気、と呼ばれる魔力の運用法の一つであり、肉体や物体を強化する技術です。いまのは、短い距離、短い時間に気をすべて注ぎ込みたたきつけるという、本当に力技ですが、一度触れてしまえばいくらでも使えそうなのでなかなか便利そうです。木刀が粉砕するとは思いませんでしたが。

ちなみに義父が使っていたのは水の技と呼ばれるものであり、気によって勢いを操る技術ということですが、正直いまだによくわかりません。

あと、義兄がボクの剣を躱していたのは風の技と言われるもので、また違う技術です。こちらもよくわからない部分が多い技術なのですが……

この三種類の技を状況に合わせて使い分けるのが男爵家に伝わる剣術です。ボクには正直手に余ります。

相性のいい力技でとにかく制圧前進するという、脳筋スタイルしかできないのが非常にもどかしいところです。

何にしろ、今日はこれで終わりでしょう。お辞儀をして、ボクの試合は終わりました。

3　突然の暗殺者来襲

農業して、剣術の訓練をして、の繰り返しで日々がいつも通り過ぎていきます。
必死に耕した畑の種植えも終わり、今の畑は緑のじゅうたんで埋め尽くされていてとても美しい時期になりました。
もう少し経つと雑草取りの仕事がありますが、今はまだ不要ですから比較的余裕があります。
のんびりしてもいいのですが、母の要望もあったので薬草採りを手伝いがてら、狩りをすることにしました。

「アーシェちゃんと一緒で楽しいわ～」
「転ばないでくださいよ、お母様」

いつも通りふわふわしている母は、お弁当と薬草採取用のナイフを持っていてとてもご機嫌です。
若干足元がおろそかなので転ばないかが少し心配ですが、まあなれたけものみちで

しょうから大丈夫と信じましょう。

そんな母の格好ですが、ふわふわのレースが付いた白いドレスっぽいワンピースに、長手袋というご令嬢スタイルです。帽子をかぶって日傘まで持っているので、ご令嬢の外出と言われたらこんな格好だろうな、という姿です。

今歩いているのがピクニックコースなら完璧ですが、残念ながら薬草採りのために山に踏み入ってる状況なんですけどね……　腰に下げている物々しい大きさの分厚い武骨なナイフがひどく浮いています。

「アーシェちゃんとのお出かけ、久しぶりだからおめかししちゃった♪」

「似合ってますよ、お母様」

ただのピクニック用ドレスではなく、ちゃんと魔法でエンチャント（効果付与）されたものだと思いますが……

母の村でのお仕事は薬師ではありますが、おそらく本業は魔女になるのだと思います。銀髪ふわふわ系美女ですから、魔女という印象とはかけ離れていますが、魔法が得意なようでよくいろいろな品に魔法でエンチャント（効果付与）をかけたりしています。母のエンチャント（効果付与）のせいで、まな板ごと真っ二つにするぐらいキレ味が良くなった包丁には

驚かされた記憶があります。
今の服も強化されていて、おそらく革製品程度には頑丈になっているのでしょう。
外見のふわふわっぷりに目をつぶれば、露出は全くないので、山に入るための姿にはなっているのは確かです。

「アーシェちゃんもかわいいわよ」
「お母様が用意してくれた服ですからね。でも似合っているなら嬉しいです」

正直ボクは服なんて全く興味がありません。
なので、暑くない服、という以上の判断基準を持っていないわけで、そのせいでいつも裸ギリギリの格好をして義兄にちゃんと服を着ろと叱られています。
そんなボクを見て、母は叱ったりはしませんが、代わりに結構服を作って着るようにねだってくるわけです。
母の作る服は、色々乙女なので、メンタル的に厳しいものが多いのですが、それでも最低1回は袖を通すようにしています。
今日着ている服も、そんな母の新作です。
ただ、可愛いといえるかは正直疑問なデザインです。

白いワンピースにリボンがついているというそれだけ見れば可愛らしいデザインに聞こえますが、ノーストラップでデコルテどころか胸の北半球まで丸見えですし、スカートも股下０ｃｍですから、少しでも動くとパンツが見えるという素敵な露出っぷりです。ボクが暑がりなことに合わせてくれたのだと思いますが……

そんな危ういワンピースと、付け襟、腕は長手袋、脚はガーターベルトで固定されたロングソックスという何とも言えない組み合わせです。

母曰く、姫騎士をイメージしたとのことですが、こんな破廉恥な姫も騎士もいないよ、とボクは思います。そもそも姫騎士ってなんだ。姫が騎士とかおかしいでしょう。

まあセクシーさだけはかなりのもので、義兄に見せたら真っ赤になって「かわいいよ」と言いながらそっぽ向いていました。

義兄も私のチョイスだと露出が多いと叱れるのでしょうが、母チョイスなので何も言えなかったようです。

当然胸元も肩も太腿も露出していますが、ボクに限って言えば、森での活動程度ならば露出も特に問題はありません。

竜人の肌はかなり丈夫で、枝をひっかけた程度では傷がつきません。

そんな丈夫な肌にもかかわらず、触るとぷにぷになのだからどんな原理なのでしょう。我が身ながら不思議です。

そんな不思議は置いておいて、ボクの方の荷物は薬を入れる背負籠と、腰に下げた剣です。

剣と言っても片手で扱える程度の短いショートソードです。もともと家にあった、さび付いたロングソードを削って研いで使えるようにしたものです。錆を落としたら長さが半分ぐらいになってしまったため、刀身は分厚いですが、長さは持ち手合わせても７０ｃｍぐらいしかありません。

主な用途は邪魔な枝を切ったりする、鉈みたいな役割のモノです。

鉈でもいいのでしょうが、万が一熊とかが出た場合に戦えるようにとこちらを持ってきています。

あと、鞘がカッコいいんですよね。鞘は母が作ってくれたものなんですが、色とりどりの糸で飾り付けられていて、非常に見た目が良いのです。

そういうこともあり、大体外出の際はこの武器としては中途半端なショートソード持ち歩いています。

「でーと♪　でーと♪　アーシェちゃんとデート♪」

「デートならお義父さまとしてください。そして早く娘離れしてください」

母は楽しそうに歩いていますが、ボクは周りの気配を探りながら進みます。
春も結構暖かくなってきましたから、熊が出ても襲ってくることはないと思いますが、場合によっては危ないですし、こちらに驚いた猪が突進してくるとこれも結構危険です。
なので一応ある程度は警戒しながら進んでいたのですが……

「お母さま」
「？　どうしたの？」

ボクが急に止まったので、後ろをついてきていたお母様も止まります。
何故止まったかと言えば、生き物の気配を感じたためです。
数は3。前方に固まっています。
鹿や猪の親子か、とも思いましたが、それにしては大きさが3つとも同じぐらいです。
それに……

「金属音がします」
「……」

母も警戒をし始めます。
金属音がするということは、十中八九ぐらい、人だということです。
しかも、それなりに武装した人間の可能性が高いということが予想されます。
一般人はそんな金属製品身に着けていませんからね。
これがこの辺りの薬草採取などを目指す冒険者なら安心ですが、そのような可能性はまずないでしょう。
なんせ、ボク達の村は辺境過ぎますし、そもそもこの辺りを探索するならうちの村に滞在をしているはずです。
村に近寄っていない以上、山賊あたりが妥当かと思いますが……　さて、どうしましょうか。
逃げるべきかと考えていましたが、悩んでいたのが失敗だったようです。向こうもこちらに気づいて、近寄ってきました。
木々の合間から現れた人たちは、薄汚れた鎧とロングソードを持った完全武装の人たちでした。
雰囲気が殺気立っていて、とても友好的には思えません。

「どうやって標的に接触するか悩んでいたが、わざわざ来てもらえるなんてついてるな」
「標的？」
「そうだ、お前らが邪魔で消してほしいっていうやつらがいっぱいいるんだよ。聖女イヴリン殿下、そして皇女アーシェロット殿下」
「……」

何を言っているかさっぱりわかりません。確かに母はイヴリンで、私がアーシェロットですが、名前以外身に覚えがないものばかりです。なんだ聖女って。なんだ皇女って。

まあ母の神々しい美しさを考えれば、百歩譲って聖女も似合うかもしれません。

でもボクに皇女は無理でしょ。男爵令嬢だって無理っぽいのに。村の人から貴族だと思われてないのは確実です。

まあそのおかげでよく果物とか分けてもらっていますし、貴族になんかなりたくもないんですが。

ただ、こいつらの勘違いは置いておきましても、命を狙われているのは間違いないでしょう。

ボクは剣を抜いて右手に持ち、左手には鞘をもって構えます。1対1ならまだしも、

1対3ではかなり厳しいです。向こうが持っているのは威力の高いロングソードで、リーチの差があるのも厳しいです。

ですが、これ以上ないものねだりをしてもどうしようもありません。最低でも逃げる隙を作るため、ボクは身構えるのでした。

4　苦戦

ボク達を狙った暗殺者たちが、剣を抜いて近寄ってきます。
ニヤニヤと下種な笑みを浮かべており、勝利を確信しているのでしょう。
こちらは女二人ですし、もしかしたら殺す以外のこと、具体的にはレイプなども考えているのかもしれません。
何にしろ全くもって不利な状況です。
三対一という数の差がまず厳しいです。母は、戦力として数えるのは難しいでしょう。母がどこまで戦闘用の魔法を使えるかはわかりませんが、魔法は発動までに時間がかかりますから、発動する前に攻撃を受けてしまうでしょう。
ですので、ボクがどうにかしないといけないのですが、人数不利に加え、間合いの広さの差も厳しいです。
なんせ相手は成人男性であり、ボクより体格が圧倒的に良いです。３人とも身長は１７０ｃｍを超えているでしょう。それだけで腕のリーチに差があるのに、武器もこちらはショートソード、相手は両手持ちのロングソードです。
間合いが何十ｃｍと相手の方が長いわけで、これもまた圧倒的に不利な状況です。

「お母さま……」
「ウェントゥス……　フレマト……」

お母様に逃げるように言おうと思って声を掛けましたが、すでに魔法の呪文を詠唱し始めていました。
確かに逃げるのは難しいのはわかっています。森に相手が慣れていなければ万が一、というレベルでしょう。だから母は戦うことを選び、相手が油断している隙に準備を進めて相手にたきつけようと考えているのでしょう。
ですが戦闘用魔法の準備は時間がかかります。相手に大きな影響力を与える魔法を使うためのマナは膨大な量になり、体内にある魔力だけではとても足りません。そのため、マナを周囲から集める必要がありそれが準備時間として必要になります。
ボクも正確なことは知りませんが、下手すると数分かかるとか聞いたことがあります。
それなら僕がするべきことは一つだけです。
こちらの動きに気づいていない三人を観察し続けます。
少しずつ近づいてくる彼らが、あと三歩ぐらいの距離まで近づいた瞬間、ボクは一番

前にいた男に襲い掛かります。

「でりゃあああああ!!!!」

「っ!?」

大上段から振り下ろすボクの一撃を慌てて受け止めた男に、一瞬ののち、さらに力をかけて思いっきり吹き飛ばします。

無力化するなら相手の剣を壊してしまうのが一番だとは思いますが、こちらの研ぎ直した中途半端な剣と向こうのロングソードでは向こうのロングソードの方が丈夫でしょう。試合で父にやったウェポンブレイクをやったとしても、おそらく相打ちになって双方の武器が壊れるだけとおもわれます。下手するとこちらの剣だけ壊れるかもしれません。そうすると、鞘を入れてもボクが壊せる武器は2つ。相手は3人なので、1人どうしようもなくなってしまいます。

なので、一瞬に力を籠めるのではなく、大きく振り回して受け止めた相手を吹き飛ばしました。油断していたのでしょう、男は木々の向こうまで飛んでいきました。吹き飛んだ時のダメージも考えればすぐには戻ってこれないと思われます。

そのまま流れるようにもう一人ぐらい吹き飛ばそうかと考えたのですが……

「この野郎!!」
「くらえっ!!」
「野郎じゃないです!!!」

残念ながら残った二人は驚いて硬直したりすることなく、すぐに襲い掛かってきました。喧嘩慣れしているのか、それとも殺し合いになれているのか、どちらにしてもろくでもない相手なのは疑いがありません。
右手の剣と、左手の鞘でそれぞれの一撃を防ぎます。

「ぐっ……」

相手が大人の男性とはいえ、力には自信がありますから、力負けはしません。
ですが、鞘の方は明らかに不利でした。
利き手ではない上に、鞘自体が太いため、上手く握れないのです。
直撃は防ぎましたが、そのまま鞘を押しのけてた一撃がボクの左二の腕を切りつけます。慌てて振り払いましたが、ざっくりと切られた腕が熱く痛みはじめました。

「三人に勝てる訳ないだろ。おとなしく諦めればかわいがってやるよ」
「……もうすでに二人ですけどね」
「減らず口を!!」

下種でロリコンなことを言う男に思わず反論すると、一人が怒りで切りかかってきました。
最初と違い、同時の攻撃ではないので、右手の剣で受け止め、弾き飛ばします。
最初のように大きく弾き飛ばすのを狙ったのですが、上手くいきませんでした。左手の傷が思ったよりも深いようで、痛みでバランスが崩れているのだと頭の中の冷静な部分が判断しました。
「この野郎!!」
「だからやろうじゃないって……　っ!!」

もう一人が慌てて切りかかってきたのを躱したつもりでしたが、振り下ろした剣先がボクの右太ももをとらえました。丈夫な皮膚と言っても剣には十分なほど丈夫でない

ようで、大きな切り傷ができます。
脚まで潰されたら戦うのが難しくなります。幸い骨まで届かず、肌を切られただけですが、血は出ていますし、集中を削ぐには十分な傷です。
相手もそれに気づいたのでしょう。慎重にボクの方へと距離を詰めてきます。
もはやこれまでか、と思った瞬間、風が吹きました。
ドゴッ!!!
不可視の鉄槌が男たちを吹き飛ばしました。

「うちの娘に何してくれてるのよ!!」

激怒した母が、髪をたなびかせながら魔法を連発しています。
風弾が男たちを滅多打ちにして、同時に足元から伸びた植物を利用した拘束魔法が復帰しようとフラフラ戻ってきた男含め、三人とも拘束します。
そのまま雷が落ちれば戦闘終了です。本当に一瞬でした。
準備ができた魔導士は強いという話は聞いていましたが、ここまでかと思うレベルの強さです。

あまりの圧倒的な光景にあっけにとられてしまいました。

「アーシェちゃん！　血が出てるわ！　大変!!」

一通り賊を叩きのめした母は、慌ててボクに駆け寄ってきます。

傷口に慌てて薬草を貼り付けはじめます。

「傷が残らないようにするから、お母さん頑張るから!!」

「残っても気にはしませんが……」

「クレス君なら気にしないと思うけどそれはそれ、これはこれよ!!」

「なんでお兄様の名前が出てくるんですか……」

いやわからなくはないですけどね。傷が付いたらお嫁に行くときに問題になりかねないという話だと思います。

で、うちの村ぐらい小さい村だと、相手が誰とか、これくらいの年齢になると大体予想ができてくるわけです。年齢的に相手も限られますからね。

で、ボクの相手はというと義兄ぐらいしかいないですし、義兄の相手の最有力候補も

ボクなのはなんとなく察しています。そういう意味で義兄は気にしないという発言が出てきたのでしょう。

義兄のことは大好きですが、恋愛関係というと少し悩みます。

なんせ、前世の記憶を引きずっているせいでそういう目で見る相手は基本女性なんですよね。

義兄はマッチョな男らしい男性ですから、恋愛という意味では好みからすさまじく外れています。

義兄の方はどうなんでしょうね。ボクが煽ると結構反応してくれるので、外見は好みなんだと思いますが……

とはいえ結婚が必須となればやはり相手は義兄しかいないでしょう。

いきなり知らない男あてられても困りますし、イケメンとか見ても爆発しろという感想しか思い浮かびません。ましてやキスとか子作りとか、気持ち悪すぎて絶対無理です。

義兄が相手だとすると……　きついですが我慢ぐらいは出来そうな気もします。

結婚しないという選択肢もありますが、子供欲しいなぁという漠然とした思いもあるので……

そんなことをむにゃむにゃと考えていたら、母の治療は終わりました。

薬草を貼って、布で巻くという応急処置です。
固定されていて動きにくいですが、動けないほどでもありません。

「じゃあボクが村まで戻って大人を呼んできます」
「駄目よ、二人で戻りましょう」
「でも、そうすると逃げられちゃうかもしれませんよ」

ここに誰かひとり残って見張らないと、目を覚ました男たちが逃げてしまうかもしれませんし、もしかしたらまだ隠れていた人がいて襲ってきたりするかもしれません。
準備状態の母ならそういったことにも対応できるでしょうし、ボクが人を呼んでくるのがベストだと思うのですが……

「戻るまでに誰かが待ち伏せしていたら、今のアーシェちゃんじゃどうにもできないわ。二人で戻るのが安全よ」
「ああ、そう言う可能性もあるんですね」
「こいつらが逃げてしまうかもしれないけど、アーシェちゃんの命の方がずっとずっと大事なの。だから二人で戻るのよ」

襲撃犯の身柄と、ボクの安全、結局どちらを重視するか、という話だったようです。
で、母は迷いもなくボクを取ると。
そういう意味だと気づくとなんかとても嬉しくなってしまいます。
母はボクを抱え、臨戦状態のまま山を下りていきます。
フカフカな母に抱えられ、こんなことがあったにもかかわらずボクはご機嫌になってしまいます。

最終的にボクと母は無事村に戻れましたが、父が襲撃現場に戻ったときには襲撃犯たちは装備だけ残して皆いなくなっていたそうです。

「ああいうとき、報告者が一人以上どこかに隠れていたはずだからね。しょうがないわよ」
「じゃあボク一人帰っても良かったのでは？」
「そうしたら報告者はアーシェちゃんを狙ったかもしれないわね」
「……　どうしてボクは狙われたんですか？　皇女ってなんですか？」

今日の一番の疑問はここです。田舎娘を暗殺する必要なんてありません。あれだけの装備と人員を準備するだけで手間もバカにならないはずですから。

その理由をきっと義父と母は知っているはずです。

「あの人たちが帰ってきたら、ちゃんと説明するからね」

「……わかりました」

平和な生活が終わろうとしていました。

5　知らなかったこと

ボクと母が襲われた日の夜に家族会議が開かれました。
暗殺騒ぎについての説明を義父が明日皆の前でしないといけないので、その準備も兼ねています。
机を囲んでそれぞれの様子を窺った感じとして、義父と母は事情を察しているようですが、義兄はわかっていないようです。
ボクだけ事情を知らないとかだとボッチになるので寂しかったですが、義兄も仲間だったので少し安心しています。
義父と母が並んで机の向こうに座り、ボクは義兄の膝の上に座らされます。
怪我をしたと聞いて、義兄のシスコンが爆発していて、とても逃げられない状況です。
結局怪我は表面的な切り傷だけですし、母の治療のおかげですぐに治りそうなのですが……　義兄は聞いてくれません。
帰ってからずっとお姫様抱っこでしたし、夕食はあーんで食べさせられました。右手は怪我してないから食事に問題ないのに……
まあ義兄のシスコンは昔からなので置いておきましょう。両親も多少呆れてますが

気にしていませんし。

「で、どこから聞いたらいいでしょうか。まずはなんで暗殺事件なんか起きたか、ですかね」

「そうね、かなり長くなるだろうけど、聞いてちょうだい」

そう言って母が話しだしました。

「まず、アーシェちゃんの父親は、帝国の皇子だったの」

「帝国？」

ボクは首をかしげます。

前世知識の帝国というものは知っていますが、こちらでは全く聞いたことがない単語でした。

「王の中の王である、皇帝が世界を支配する、というのが建前としてあるのよ。そんな皇帝の血族が今も残っていて、皇帝の血を引くものは皇子、皇女と言われるわけ」

「じゃあボクも皇女ということですか」
「そう言うことね。ただ、歴史が始まったときからあるといわれる血筋だけど、大陸全土を支配していたなんてとても昔のことで、今では古都と呼ばれる大陸の中心部の狭い領地しか持っていない、権威だけの一族ね」
「偉いのか偉くないのかわからないレベルですね……」

古代超帝国の末裔、と言われればすごそうには聞こえるが、よくよく聞けばあくまですごそうに聞こえるだけです。もちろん建前と権威をうまく使えばいろいろできそうですが、下手に動くと大変なことになりそうです。
裏付けとなる実力がないわけですから、暴発した連中に暗殺されたり討伐されたり……　などということが起こりえるわけです。

「帝国がすごくて没落しているのはわかりましたが、その血を引いているとなんで暗殺されそうになるんです?」

血筋はわかりましたが、次の疑問はこれです。
権威のためには由来も大事でしょうが、それ以外にも大事なことはいっぱいあるはず

です。
血筋があっても、それ以外山猿レベルのボクはとても権威として利用できる存在とは思えません。
わざわざ相手の本拠地に乗り込んでまで殺そうとする理由がボクにはわかりませんでした。
そんな疑問に義父が答えます。

「おそらくそれは、アーシェが竜人だからだろう」
「竜人だと何かあるんですか?」
「帝国の初代は竜皇帝、竜人だったんだ。そして、帝国の節目節目の時に、竜人の皇帝が現れる。だから、帝国は竜人の皇族を重視してるんだ」
「めんどくさいですね。竜人だからって特にすごいわけではないと思いますよ」

確かに、竜人は純人と比べれば優れている点は多い。
身体能力は高いし、体も丈夫です。だが優れているのはせいぜいそういったフィジカル面での有利しかありません。
それも極端に高いわけでもないです。大人のフル装備の兵士3人と戦って勝てるほ

どではないわけです。これがもっと大規模な戦いになれば、個人の能力など簡単に埋もれてしまいます。

そんなニュアンスを込めて唇を尖らせると、義父は苦笑しました。

「人は過去に囚われ、夢を見るんだよ。アーシェではなくて歴代の偉大な皇帝を見ているのさ。それで、ポッと出の人間においしいポジションをかっさらわれては大変だと暗殺者を送ってきたんだろう」

「単なる迷惑ですね……」

こんなことがなければ、ボクはきっとこの村で一生を終えていたと思う。

別に贅沢がしたいわけではないし、大変なことは多いがそれなりに幸せだったからだ。

だが、こんなことが起きれば、もう何もしないわけにはいかない。

上位者がにらみを利かせているわけではないこんな世の中じゃ、舐められたら終わりなのだ。

何もしないなんて選択を取れば、このままいいようにやられ続けかねない。だからこそ、こちらからも動く必要があるし、相手もさらに過激な動きをするかもしれない。失

敗したことは、暗殺者たちを始末した見張りから伝わっているだろうし……

「あとお母様の聖女って何ですか？」

「帝国国教のフィリア教の地位の一つよ。女性聖職者の結構高い冠位ね。だからアーシェちゃんは皇子と聖女の娘っていうこと。帝国の方で何が起きているかわからないけど、聖女になりたい人でも出たせいで私も邪魔になったんでしょうね」

なんというか、ごちゃごちゃしてわかりにくいな、と思います。

結局分かったのは、ボクが由緒正しい血筋だということぐらいで、そのせいで狙われているのだろう、という話です。

「で、誰が指示したかが一番重要ですが……」

「今のところはわからないわね。だけど、すぐに向こうも動き始めるからわかると思うわ」

「じゃあ情報収集が大事ですね」

現場にもいろいろ残っていたと聞いています。

そういったものから相手を特定するのは難しくないでしょうし、それが出来なくても相手側がまた仕掛けてくるだろうことは容易に想像できます。ここでへたれてやめるぐらいなら、最初からしていないでしょうし、ここでやめたら外部にはわからなくても内部から弱腰と非難されかねません。なので、相手が動き始めたことを見つけるための情報収集が必要不可欠です。

「そのあたりは私の方で動くから、アーシェは安静にしていなさい」

「はーい」

義父がそういうなら、少しゆっくりしよう。幸い畑の方もあまり手がかからない時期だし。

ついでに剣や魔法の勉強ももう少ししようと決意します。3人に勝てるぐらいにはなりたいところですし。

「じゃあお話終わりましたし、お義兄さま、一緒に寝ましょ」

「ちょっとアーシェ、いやそれはちょっと……」

「ということでお母さまはお義父さまと仲良く寝てください。おやすみなさい」

「あらあら、母親離れかしら、寂しいわ」
「それはお義父さまに慰めてもらってくださいな」

なんとなく話は分かったので、もう寝ることにします。
普段はボクは母と一緒に寝ています。あのフカフカおっぱいに埋もれて寝るのは最高に気持ちいいのです。
ですが、こんな命がけなことがあった以上、母も慰めてもらったほうがいいと思うのです。そういうことができるのは、うちでは義父だけでしょう。
だから二人の邪魔にならないように、でも一人で寝るのは寂しいですから義兄を連れて出てきたところです。
二人でイチャイチャしてもらって、弟か妹が出来ればいいな、とか思いながら、ボクは義兄の部屋に転がり込みました。

◇　◆　◇　◆　◇

「男と二人きりにもうちょっと危機感を持ちなさい」
「大丈夫ですよ、お義兄さまですし」

「私も男なんだけどなぁ」
「お母さまも命の危機だったんですから、お義父さまに甘える必要がありますし、そうするとボクはお義兄さまに甘えたいのですよ」

正直、初めての命のやり取りのストレスはとんでもないレベルでした。
なんとなく頭はボーっとしていますし、体は緊張が解けなくて火照りっぱなしですし、ここで一人になったら自分がどうなってしまうか本当にわかりません。
でも母も同じ状況だと思うと頼りがたく、遠慮なく義兄に甘える選択をしたボクはそう間違っているとは思いません。
何にしろ疲れているのは間違いないので、義兄のベッドに飛び乗ります。男性の匂いが染みついていて臭いですね。でもなれた匂いで落ち着きます。

「はー、くっさ」
「人のベッドを勝手に占領してその言い草……」
「ほら、お義兄さまも一緒に寝ましょ。あーしぇ、さびしいの」
「今更取り繕っても気持ち悪いだけですよ」
「でもかわいい妹でしょ？」

「まったく、男相手なんだからもっと警戒しなさい」
「大丈夫ですよ」

近づいてきた義兄の手を取り引くと、義兄はそのままボクの上にのしかかってきました。

「わかってますから、おっぱいでも揉みます？」
「アーシェ？」
「大丈夫ですよ、お義兄様にならなにされても」

義兄がボクに対してそれなりの感情を抱いているのは察しています。
理性的な義兄ですから、手を出してこない可能性の方が高いと思いますが、まあ、出されてもいいかなと思う程度にはボクも義兄が好きなわけでして。
命のやり取りの後は滾ると聞いていますし、今の状態がどこまで発情状態なのか、未通女なボクにはわかりませんが正直結構持て余している感覚があります。で、そう言うことするなら、相手は義兄一択だなーと頭のどこかで思ってるんですよ。
だから正直、信頼半分、手を出してほしい気持ち半分ぐらいです。大丈夫というのは、

手を出さないでしょう、という意味ではなく、手を出してもいいという意味だと、義兄にもやっと伝わったのではないでしょうか。

この前まで我慢できる、ぐらいのレベルだったのがかなりちょろいな、と自分でも思います。

ギュっと抱き着いて、尻尾を義兄の腰に巻き付けます。雄臭い匂いが鼻に直撃して、くらくらしてしまいます。これはやばいですね。

おでこを義兄の胸にぐりぐりしていると、義兄はボクの頭を撫で始めました。

「そう言うのは、もうちょっと大きくなったらな」

「むー　まあいいです。母にもまだ早いって言われてましたし。でもおっぱい揉んでもいいですよ」

「それはやめとくよ」

確かに少しでも始めると我慢できなくなりそうですし、義兄の方が冷静なようです。

暫く義兄に抱き着いていると、眠気が強くなっていきます。ボクはそのまま、義兄に抱き着いたまま、夢の世界へと旅立ったのでした。

6　嵐の前触れ

暗殺騒ぎの後、村は普段通りに戻りました。

犯人が分かればお礼参りも考えるのでしょうが、現状何もわからないのだから対応しようがありません。

もっとも、日中は、うちは一家４人で基本動くようになりましたし、夜はボクは義兄と寝ることになりました。母と義父は励んでいるとおもわれ、弟か妹のできるのも近いでしょう。

近隣の村に知り合いがいる人に頼んで、互いに連絡を取り合い、俄かに近隣同士の活動が活発になりましたが、今のところ情報はあまり集まっていません。

怪我人３人を抱えて移動していることを考えれば、目撃情報があっていいと思うのですが……

ひとまず毎日剣術の訓練に励み、外出している村の人の畑を確認したり、義兄を揶揄ったりして過ごすしかできないもどかしい日々を送っております。

本当は自分で情報収集したいですが、最有力ターゲットであるボクがその辺フラフラ

したら危ないですからね……

村の中なら人目がありますから、外部の人間が入ってきてもすぐにわかりますし。

そんな日々が1週間ちょっと続いたでしょうか。

唐突に馴染みの行商の方が村を訪れました。

「こんな時期に来るのなんて珍しいですね」

「ちょっといろいろ話を小耳にはさんだものでして」

猫耳をピコピコさせている獣人の女性の名前はニキータさん。

毎年うちの村に行商に来てくれる馴染みの方ですが、普段は毎年秋の収穫が終わった頃にいらっしゃいます。

村で売れるものは、ボクが取った熊の皮や母の作った薬草もありますが、メインは余った穀物であり、次が余剰の穀物を使って作った自家製の安酒です。

これらは収穫期が終わった直後が一番量があるので、大体秋に買い付けに来て、代わりに村で得ることが難しいもの、大体金属製品を売ってくれる、というのが通常です。

いつもと違う時期に、しかも普段なら牛が引く荷車と一緒に村にいらっしゃる彼女が今回は身一つで村に来たという所に、いろいろ情報を持ってきているのでは、と推測し

てしまいます。

「立ち話も何ですし、うちに来ませんか」
「ではお邪魔します」

長い話になるかもしれないと、ボクは彼女を家に連れて帰りました。

「辺境伯が軍を集めていると」
「はい、目標はおそらくこの村だと思われます」

ニキータさんが持ってきた情報は、かなり衝撃的なものでした。
近隣の辺境伯が軍を集めているというものです。
この辺りは最近になって（と言っても歴史的な話であり１００年近く前になりますが）開拓された場所なので、村が幾つもあるだけで、纏め役になるような上位貴族、公爵や辺境伯といった貴族はいません。

村を治める村長格の男爵たちが、お互い話し合いながら暮らしている地域です。村の間が広いのでも揉め事はそう起きませんし、起きたら男爵の中でも顔が広い人が仲裁することが多いです。義父もトラブルが起きると結構駆り出されるので、そういった顔役の一人だったりします。

ですが、大陸中央に近づけば当然辺境伯や公爵といった上位貴族はいるわけで、ニキータさんの挙げた辺境伯は、うちの村から一番近い町を治める上位貴族でした。

近いといっても徒歩数日かかる距離ですけどね……　途中にいくつか村がありますし。

「私が町を出るときにはもう軍を集め始めていました。数はわかりませんが、あそこの辺境伯なら５００ぐらいは用意できるでしょう」

「かなり困ったことになったね」

話を聞いた義父が困り顔をしています。

推測の部分も多い話ですが、わざわざニキータさんがうちの村まで持ってきた情報です。正しいと考えた方がいいでしょう。

理由まではわかりませんが、暗殺に失敗したのですぐに戦で殺しに来ようと思ってい

るぐらいにはボクは狙われているようです。
　といっても集め始めたばかりみたいですし、辺境伯軍の出陣は通常1月弱、早く見ても半月程度先になるでしょう。各地に散らばっている村の貴族たちから兵士たちを集めるのはそれくらい時間がかかります。召集の通知が到着するだけでも数日から1週間、それから召集を受けた貴族が自分の村の兵士に装備を準備させて出発するだけでも1週間、到着するまでに1週間、なんてことがざらです。
　つまりそれだけ時間的には余裕があるということです。

「軍の予想進路の道中の村にも連絡して、対応しないといけないね」
「できればうちの村の近くまで軍を引き込みたいですが……」

　軍というのは大飯ぐらいです。
　動かし、戦わせるにはそれだけの食糧が必要です。
　人間1日ぐらい食事を抜いても死ぬことはないですが、戦闘となれば最大レベルの運動をさせるわけですから、1日食事を抜くだけでも結構致命的に能力が落ちるという問題があります。
　そんな食糧調達ですが、兵士本人が持参する食料はせいぜい2，3日分であり、とて

も行軍に必要な食糧には足りません。なので、基本は現地調達になります。つまり、道中の村から武力を背景に強制的に出させるわけです。

自分の村と主従関係などがある上位貴族なんかからの命令ならば、渋々ながらトラブルなく応じるでしょうが、そう言う関係でなければ食糧を出せ、なんて強盗以外の何物でもありません。

当然トラブルになりますし、場合によっては現地の村との間で戦争になります。

軍隊のほうから荷駄隊を本拠地から出して補給する手もありますが、手間もかかりますから現地調達が基本になるでしょう。

そうすると、うちの村以上に道中の村は被害を受けるでしょう。特に隣の村なんかは戦いが始まれば占拠されるでしょうから、ボロボロになるのは目に見えています。

かといって、うち以外どの村も大体１００人前後の小さな村ばかりです。住民の中には子供もそれなりの割合いますから、５００の軍隊と正面から戦うには厳しいものがあるでしょう。

そういったことを考えれば、この地域の男爵を集め、辺境伯領との境で戦って勝つのが一番被害が少なくなります。ですが、農繁期のこの時期に村人を遠方まで移動させるのはどの村でも難しいでしょう。

戦争に勝つという目的だけならば、うちの村の近くまで引き込んで、補給を圧迫しな

がら戦うのが一番です。
辺境伯領までの道中を焦土戦略出来ればまず負けないでしょう。
ですがこの方法は、隣の村含めた近所の村は大きな被害を受けてしまいます。
背に腹は代えられない状況とはいえ、あまりとりたくない選択ではあります。

「ひとまず周りの村々の代表と話さないわけにはいかないだろう。アーシェ、準備してくれ」
「はーい。お土産はお酒でいいかな」
「それが一番喜ばれるだろうしな」

既に戦争は迫っている状態であり、どうやって戦いを避けるか、ではなくどう戦うか、を考える必要があります。そのため義父は周囲の村の代表を集めるつもりのようです。
周りも不穏な雰囲気を感じているでしょうから集まるまでそう時間はかからないでしょう。
おもてなしの御馳走を用意するために本当は熊狩りにでも行きたいところですが、現状それもできないのがもどかしいです。
ひとまずあるだけの酒を用意し、皆が集まるのを待つことにしましょう。

「ニキータさんも泊っていきますか？」
「そうですね、この辺りの村は私のお得意様ばかりですし、ご挨拶だけさせていただければと」
「ニキータさんは何か、おもてなしのための珍しいものとか持ってきていませんか？対価はお支払いしますから」
「塩と砂糖程度しかありませんが……　でもこれから物入りでしょう？」
「どうせ買うならニキータさんからぐらいしか伝手がないですし、パーッと使っちゃいますよ」

町に行けばそれなりに取引先はありますが、現状一番近い町が敵の本拠地であり行けないことを考えれば、買うのは行商人であるニキータさんからしかないわけで、ならばさっさと換金できるものは換金してしまうに限るでしょう。
美味しいものを食べて機嫌がよくなることはあっても悪印象は抱かないと思いますし。
幸い交換用の熊の皮はまだ残っているはずですし、ボクはニキータさんの持つ嗜好品を購入することを決めるのでした。

7　開戦準備

1週間もすると、周辺の男爵の人たちがうちの村に集まりました。

一人で来る人もおり、家族全員で来る人もおり、村の人間を連れて集団で来る人もおり、一気に村の人口が1．5倍ぐらいになりました。

現状、貴族の方々は、最近作った集会所に寝泊まりしてもらっています。家族ごとの個室で、粗末なベッドしかありませんが、貴族と言っても農村の農家に毛が生えたぐらいですから、今のところ苦情は出ていません。

大人たちには酒を、子供達にはお菓子を配っているからかもしれませんが。

1週間の間に情報収集に出ていた人も戻ってきたり、村に集まった周辺の男爵さんたちが集めてきた情報もあり、かなり状況がつかめてきました。

辺境伯の軍の目標はやはりうちの村で、名目は『皇女を騙る者を征伐する』ということです。いや、皇女なんて言うこと、この前の暗殺騒ぎで初めて知ったんだけどなぁ……

軍の出発は大体あと半月ほどということは、行商人のニキータさん経由で物資の集積

具合から予想されています。
進撃路は不明ですが、わざわざ遠回りする必要もないでしょうから、一番近い道を進撃してくるでしょう。
その場合、途中にある村は3つ。
そこから来た人たちはみな顔色が悪く、村の人間を連れてきたのも基本その3つの村の人たちでした。
避難してきた村の人たちは、ほとんどはうちの村にいる親族の家に滞在しています。
村の間でも交流があるため、他の村に血縁関係がある人も多く、そう言った人たちが村に来ているわけです。おそらく、進路外に避難先がある人はそっちに行っているのでしょう。
何にしろ、集まった男爵さんたちに、うちの義父と義兄、そしてボクが混ざり、会議は始まりました。
「で、そっちにいる皇女殿下の首をもっていけば、終わるんじゃないのかね」
会議参加者で一番年長に見えるおじいさんが、開始早々そんなジャブじみた発言を始めます。

その発言に息を呑んだのは会議の手伝いのために部屋を行き来していたうちの村の人たちです。これでもボクは村の中ではアイドル的な立場として一目置かれています。熊肉を配り続けた成果ですね。

この辺りでお肉なんて基本狩ってきた獲物でしか得られませんから、お肉を配るボクは村のアイドルなのです。ですから、何も知らず、唯うちの村の子供の首を持っていく、なんて聞いた村の人たちは騒然とし始めるのは当然でした。

ただ、このご老人の発言はおそらく今回のことに巻き込まれたという気持ちから生まれた皮肉でしょう。うちの村に来てまでそんなアホなことするほど男爵たちはアホではないと信じたいところです。

ただ、幾人かなんとなく追従する雰囲気を出しているのが結構気になりますが。

ひとまずボクが主導権を握って発言した方がいい気がしますので、水を向けられたボクが立ち上がります。

「そんなことできないでしょう？　冗談はやめてください、おじいちゃん」

「ふむ、どうしてできないか、この老人に説明していただけないかね、皇女殿下」

「理由は2点あります。折れることによるデメリットが大きすぎるのが1点、折れても辺境伯軍はこの村や周りの村を占拠するまで止まらないだろうことが1点ですね」

「どういうことだい？」
「デメリットに関しては簡単です。攻められそうになったから折れる、という前例を作れば、辺境伯は未来永劫、軍事力を背景に私たちを脅してくるでしょうね。そうなってしまえば、このあたりの村の力はどんどん削られ、最後は奴隷になるしかないでしょう」

上位の者が公平に監督しているわけでもないこんな辺境の地で、最後にモノを言うのは武力です。そして、武力による恫喝に応じてしまえば、相手はまた恫喝してくるでしょう。そうして少しずつ要求をのまされていった先に待ち受けているのは奴隷化です。

途中で戦うとしても、その時点でかなり力を奪われているでしょう。だったら最初の一番余裕があるときに戦ったほうがましです。

こんなことはここにいる皆さんならわかっているはずです。

にもかかわらずこんなかわいい幼女の首を差し出したらどうだなんて本人の目の前で言ってくるあたり、このご老人、趣味が悪いですね。

中身が本物の幼女だったら下手すると泣いてますよ。まあ、なんとなく食えない雰囲気を持ったおじいちゃんですし、ボクのことを試しているのかもしれませんが。

「後者の方はもっと簡単ですよ。軍を動かしている以上費用がかかっています。なので終わった後、ある程度報酬を出さないと収まりがつきませんよ。で、その報酬の元となるのは、こちらの村々でしょうね。うちの村だけでは飛び地になるうえ、参加人数的にうちの村では報酬にとても足りないでしょうし」

軍の費用は、一部食糧などは軍を集めた辺境伯が負担するでしょうが、人件費や武器含め基本自腹です。それでもなぜ参加するかと言われれば、結果次第でもらえる褒美が目的です。

直接分割する予定なのか、代官でも置いて上納分を受け取る予定なのかはわかりませんが、攻める先を切り取って褒美の原資を用意する必要があります。

だから、大義名分のボクの首を持っていっても終わることはないでしょう。ここで終わらせてしまえば辺境伯は報酬を出せないでしょうし、そうなればすでに用意している貴族たちの負担は貴族たちが全部負担になりますから、反感はすさまじいことになります。

おそらく偽皇族をかくまっていたとかそういった大義名分に差し替えて討伐は継続するでしょう。

「そうじゃな。さらに言えば、お嬢さんみたいな若い子にはわからないだろうがあともう一つ重大な理由がある、辺境伯に下るくらいなら死んだほうがましだ、ということだ」
「？　そんなに辺境伯が嫌いなんですか？」
「儂ぐらいの年寄りになるとみんなそうだ。なんせ、開拓を始めた頃、辺境伯の連中は傘下に入れてほしいという儂らを拒否し、逆に嫌がらせまでしてきたからな」

ご老人の発言に、年を取った男爵の数人が頷きます。
現在はそこまで直接的な嫌がらせを受けていた記憶はないですが、昔はひどかったのかもしれません。今度村のおじいちゃんおばあちゃんに話を聞いてみましょう。
何にしろ、ご老人方の反辺境伯の雰囲気が強いので戦う方向で話はまとまりそうです。
様子見しようという雰囲気の人たちもいますが……　まあしょうがないでしょう。

「で、皇女殿下。戦うとしてもどう戦えばいいかな。勇ましいことを言うのは簡単だろう？」
「案は二つあります。一つは最初の村に入る前にみんなで戦う方法、もう一つはうちの村まで引き付けてから戦う方法です。個人的には後者の方が安全ですが、道中の村の人

たちには皆逃げてもらう必要があります」
「ふむ……」
「道中の村から食料をすべて持ち出してもらえば、軍はすぐに飢えるでしょう。また、道中地理に詳しい方と弓の使い方になれている方に協力していただいて、嫌がらせのように矢を射かけます。そんなことをすれば村にたどり着くころには軍の人たちは疲労困憊。そう難しくなく勝てるでしょうね」

一種の焦土戦術と嫌がらせ戦術の組み合わせである。
確実に効果があるが、道中の村の同意が得られるかは未知数であった。

「道中の村の方が避難する先としてこの集会所を開放しますし、終わり次第、うちの村の余剰食糧を差し上げます。ですがうちの村としてできるのはこれくらいですね」

一応懐柔策として予備の食糧を放出することは義父から許可を得ている。だが、村が下手すると無茶苦茶になることを考えればとても足りないだろう。
なのでなかなかこの提案は受け入れられないか、と思ったのだが……

「なるほど、皇女殿下の施しもあるならそれで行こう。皆もそれでいいかな？」

最初のおじいさんがそんな感じでまるっとまとめてしまった。

本当に大丈夫なのだろうかと思うが、避難する村含めて目立った反論がなかったので、まあいいのだろう。

その後も、村に受け入れるのが何人までかといったことや、周りの村に行った人への援助の話をしたりと、決めることは非常に多かったが、おおむねボクの案が通った。いいのか。小賢しいことを言っているがまだローティーンだぞ。

とはいえ通ったなら通ったで、勝ち筋は見えてくる。

ひとまず村の人たちに決戦に向けた武器集めをお願いすることからボクの仕事は始まった。

きっとこの2週間、非常に忙しい時間となることだろう。

8　前哨戦

辺境伯軍が出発したのは、予定通り会議から半月後でした。

当初５００程度ではないかと思われていましたが、どうにか色々集めたのか、総勢１０００程度という、かなり大所帯になっていたと聞いています。

軍の移動というのは普通の一人旅と比べれば圧倒的に遅いものです。

各自が自分のペースで移動したら、足の速い遅いでバラバラになってしまいます。なので、一番遅い人に合わせて同じペースで移動するため移動速度自体がまず遅かったりします。

それに加えて、出発時の確認や宿泊場所での設営なども加えれば、移動する時間も一人旅や少数の旅に比べると圧倒的に短いわけで、そう言うもろもろを考えると行軍というものは非常にペースが遅いといえるでしょう。

辺境軍出発の少し前に、ボクは近隣の弓が上手い人達、基本的には猟師さんですが、そういった人達と一緒に一番辺境伯の町に近い村に到着しました。

既に村にはボク達以外誰も居ません。既に近隣の村やウチの村に避難しています。

めぼしい家財も根こそぎ持っていかれているため、どの建物もがらんとしており、ボク達は男女に分かれてそれぞれのグループが気に入った家を借りて泊って辺境伯軍を待っていました。

目的はもちろん、敵軍へのハラスメント、嫌がらせのためです。

ボクが狙われている以上、こうやって村の外に出るのは危ないという反対もありましたが、押し切って外に出てきています。ずっと村にいると巻き込まれた別の村の人たちを中心に反感が起きそうなのもありましたし、移動している限り場所を把握されにくいわけです。

周りにも仲間がいますし、ボク自身も大小2本の剣を持ち歩く完全装備ですから、前回の暗殺未遂事件の時と違ってそうそう遅れも取らないでしょう。

そんな事情もあり、襲撃部隊の一応リーダーということで出ているボクは、監視役の人と会って状況を聞くことになります。

「辺境軍は出発しました。このペースならば明日の夜にはこの村にたどり着くでしょう」

「ありがとうございます。監視を引き続きお願いします」

そう言うと、監視役の人はまた監視に戻っていきます。
３人１グループで、交代に報告に来てくれる予定です。安全第一で、情報より命を優先するようお願いしているので、上手く情報が入らない可能性を心配していましたが、どうやら今のところは上手くいっているようです。
なんにしろ報告を受けたボクたちは、予定の場所へと移動を開始するのでした。

◇　◆　◇　◆　◇

辺境伯の領地のさらに外、本当にド田舎な、名もなきこの辺りの地域は、非常に森と川の多い地域です。起伏もあり、決して移動がしやすい場所ではないですが、移動のための街道は比較的整備されています。
つまり想定される進路、道以外の道を通るのは一部の例外を除けば難しい地域です。
ボク達はその例外であるけもの道を通り、街道の近くにある崖の上に到着しました。
回り道しないと出られない崖の上、崖の下の街道を悠々と歩く軍隊。まああとは簡単です。

「撃て～!!」
「敵襲だー!?」

猟師の皆さんが矢を射かけたのです。

「上だ！　上から撃ってくるぞ!!」
「ぐわー!!」

当然崖の下は阿鼻叫喚となりました。前に進んで逃げようとする者、後ろに進んで逃げようとする者、崖を上ろうとする者、皆が統率なく動くものですから混乱は拡大していきます。

射かけられる矢は石の矢尻で作った即席のモノで、威力はそこまでありません。対熊用の矢尻を使えば鉄鎧でも一撃でぶち抜けますが、高級品で気軽にポンポン射かけられるわけではありません。軍隊に射かけてしまえば回収も難しいですしね。

ですから、気軽にガンガン射かけられるように、石製の矢尻の矢を作りました。子供たちが一生懸命河原で磨いてくれた代物です。

とはいえ、ほとんどの人が使っている弓は対熊用の大弓なので、切れ味の悪い矢尻で

もかなりの威力が出ていました。
一方的に攻撃されるという状況の影響も大きいのでしょう。
どんどん混乱が広がり、こちらに対処しようと一部の兵士たちが移動し始めるのが見えます。
ですが、崖の上に回り込むにはかなり時間がかかります。土地勘がなさそうな彼らではこちらに来るのにはかなり時間がかかるでしょう。

「じゃあ撤退しますよ～」
「「「了解」」」」

そしてほとんど矢を打ち切ったボク達は悠々と撤退します。
ちなみに皆が矢を射ている間、ボクの仕事は周囲の状況確認です。
ボクは弓矢つかえないんですよね。胸が大きすぎて弦がつっかえるのです。一度試しに弓を引いた時は、弦が横乳にヒットして捲げるかと思うぐらい痛かったです。
現に弓を射ている女性の皆さんは、みな品性のあるお胸をしています。素晴らしいですね。希少価値です。
補充の矢は人がいなくなった3つの村の中に作った拠点に残っていますので、そこで

また補給をして再度嫌がらせをする予定です。
特に追撃もなく、ボクたちはまた身を隠し、補給のために移動をするのでした。

◇　◆　◇　◆　◇

辺境伯軍にハラスメント攻撃をしているのはボク達だけではありません。
何をするかは各村にお任せしていますので、詳細はわかりませんが、少なくとも会議の時にボクにいやらしいことを言っていたおじいさんの村の人たちは非常に積極的に動いているようです。
この前は兵糧を集めていた場所に夜襲を仕掛け、ごっそりと食料品を奪ってきたとのことです。おすそ分けとして、ボク達の拠点にも見たことがないお酒が届いていました。
辺境伯のためのお酒でしょうか。ガラスでとてもきれいでした。
他にも補給のための輜重隊に襲い掛かろうとするところもあるようで、辺境伯軍は四苦八苦しており、進軍速度が目に見えて落ちています。
最初の村まではおそらく予定で2日程度だったと思いますが3日かかっており、次の村までもさらに2日程度の予定だったでしょうか、6日かかっています。

最初のような失敗を繰り返さないように偵察をかなり出していますが、そのせいで遅くなったりしており、また、少数の偵察隊も装備を狙われ少なくない数を襲われています。

一方こちらの被害は、ボク達のところは怪我をする人はいますがそれ以上の被害は出ていません。こちらに有利な地形から矢を射るだけですから、早々相手の反撃を受けるようなことはありません。

あとは偵察部隊を襲うときに怪我をする程度でしょうか。

基本猟師の皆さんは弓を使う人たちなので、偵察部隊、特に騎馬兵を倒すのはボクのお仕事です。熊殺しで馬を射抜いてもらえば猟師皆さんだけで少数の部隊程度なら倒せるのですが、馬がもったいないのでボクが上の人をぶん殴って倒しているわけです。

今回はボクもちゃんとぶっとい鉄の塊みたいな剣、斬馬刀を持ってきているので騎兵でもそうそう苦戦はしません。相手が持っている片手剣や片手槍に比べればリーチがこちらの方が長いですからね。

ツッコんでくるところを飛びあがりながらうまく躱して、横降りで乗っている人をぶん殴ればミッションコンプリートです。

このおかげで馬が3頭も手に入りましたが、最近はこちらを見かけると偵察部隊の方は逃げて行ってしまいます。どうやら対応されてしまったようです。

他の村で各々動いている方はどこまで被害が出ているかわかりません。略奪紛いのことをしている以上、そうそう無傷とはいかないでしょう。

全体としてこれらの攻撃で辺境伯軍に与えられている数的損害はそう多くはないと思われます。

ですが休むこともできず、食料にも不安があり、といった状況での行軍は確実に士気と戦闘能力を下げているでしょう。

ただ、ハラスメント部隊の方も、消耗以外の意味で色々大変なことになっています。

やはり戦闘行為をするといろいろ滾ってくるわけです。

最初の方は皆我慢してましたが、戦闘を専門にしている人たちではないので、すぐに我慢しきれなくなってまあひどい状況です。

カップルや夫婦はこそっと抜けて村の拠点以外の空き家でギシアンです。

男女のカップルだけでなく、男性同士、女性同士も発生して何組も新しいカップルができているようです。ボク達はいろんな村から手伝いに来てもらっている混成部隊なので、出会いの場としても機能してしまったようですね。

一方で乱交状態になっている人たちもいます。男女数人ずつでやりたい放題はさすがにやり過ぎ感がありますが、まあそういうのが好きな人もいるようです。

本人が良しとしているならまあ止めないでおきます。

そしてボクはというとまあお姉さま方にかわいがられています。

最初、ボクは一人隅っこで悶々としていました。義兄が居ればいろいろ襲い掛かっていたでしょうが、残念ながら義兄はうちの村の方で決戦のための準備をしています。だからボクにお相手がいないわけです。

かといって義兄でぎりぎりですから、その辺の男に抱かれるなんてマジで無理です。

なのでどうしようもなく、ご飯を食べて寝ているだけだったのですが、同性に興味のあるお姉さま方に夜這いされて、いろいろされてしまいました。

どうやら猟師の皆さんは品の良いお胸をされていますので、ボクの我儘で豊満な胸部に興味があったようです。結論だけ言えば、とても楽しい体験でしたが、義兄にはちょっと言いがたいものになりました。

そんなボクの体験は置いておきまして、結局辺境伯軍がボク達の村の近くにたどり着いたのは2週間以上後になりました。予定は1週間程度だったでしょうから、結構消耗は激しそうです。

とはいえ、辺境伯軍は嫌がらせを受けていただけで、戦いで負けているわけでもあり

ません。この時点で撤退の選択肢もないでしょう。

決戦の時が近づいていました。

9　戦の始まり

うちの村まで戻る途中、村の前にはあらかじめお願いしておいたものが設置されていました。

穴を掘って作られた空堀に、掘った土を盛って作られた土塁、周りの木々を切って作られた柵が張り巡らされています。

俗にいう野戦築城というものです。

それが村に至る道の直前の斜面に張り巡らされています。人の背丈より高い土塁に、四重にめぐらされた空堀、一番外のはへこみぐらいの深さしかありませんが、これは投石するときの射程の目安の場所でしょう。

予想以上に張り切って作られたようです。

見た目は城壁のように洗練されていませんが、なかなか威圧感があるのではないでしょうか。

移動のために空堀の上に置いてある板を渡り、土塁の切れ目にある簡易な木の門をくぐれば、その先はいつもの村でした。

土塁の裏には大量の石が置いてあります。攻めてきたときにここから石を投げつけ

るわけです。村への入り口は三か所ありますが、この入り口以外は、辺境伯領から大きく回る必要がありますし、他の村につながっているだけの道ですから万が一、回り道をされたらそちらの村から連絡が来るでしょうし、今のところそういう話は来ていません。

「お帰り、アーシェ。怪我はないかい？」
「ただいまお義兄さま。大丈夫ですよ」

そんなことを考えていたら、義兄が出迎えてくれました。
義兄には村の野戦築城をお願いしていました。簡易な要塞を作るというのは最低でもこの辺りにない概念でしたが、ボクの十分だったか不安なレベルの話から、ちゃんと作ってくれたようです。
そのままボクはまっすぐ義兄に向かい、ぎゅーっと抱き着きます。

「ああ、お義兄さまのにおい～　汗臭くて雄臭いお義兄さまのにおいです～」
「臭いと連呼されるとちょっと悲しいんだけど。水浴びしてこようか？」
「だめです。アーシェ、寂しかったんですから」

先ほどまで働いていたのでしょう、かなり汗臭いです。義兄の匂いが強くて臭くて、思わずいっぱい嗅いでしまいました。

猟師のお姉様たちに遊ばれている程度では欲求不満の解消には不十分だったようです。

とはいえ、そろそろ辺境伯軍も到着する頃ですからあまり色ボケしている場合ではありません。

「お義兄さま。辺境伯軍はあと1、2日でここに到着すると思いますが、準備はできていますか？」

「私なりに工夫もして作ってみたし、大丈夫と思いたいね。アーシェから見てどうだった？」

「村の正面は大丈夫だと思います」

そんなことを話しながら、義兄と一緒に村を回りました。

相談していた準備は十分終わっているようです。決戦はすぐに迫っていました。

◇　◆　◇　◆　◇

辺境伯軍が村の正面までたどり着いたのは、ボクが村に戻った2日後の正午ぐらいでした。

準備していた村の人たちが続々と土塁の上に集まってきます。

辺境軍は、準備もそこそこ早速攻めてきました。

1列10人が並び、盾を構えて進軍を始めます。

村の前の街道は、そう広いわけではなく10人も並べばいっぱいになってしまうぐらいの広さですし、両脇は深い森ですから踏み入って超えていくのは不可能です。

ですから敵軍は馬鹿正直に正面から来るしかできません。

「投石準備ー!!」

「「「りょうかい～」」」」

ボクの掛け声で土塁の上に待機していた村の人たちが投石機を振り回し始めます。

投石機と言っても、長い布の片方を手首に結び付けただけの簡略なものですが威力は絶大です。

１０人以上がぶんぶんと投石機を振り回しながら、ボクの合図を待っています。

「投石はじめー!!」
「とりゃー!!」
「えいっ！　えいっ!!」
「えりゃー!!」

目安にしていた小さな空堀のところに先頭の人たちが足を踏み入れた瞬間、投石を始めました。まだ距離が７０～８０ｍぐらいありますので、早々当たるものではないと思いましたが、皆さん練習してくれていたのでしょう。それなりの精度で、辺境軍の人たちの方向へと石礫は飛んでいきました。といっても先頭の人たちはみな木製の盾を構えているので、ほとんどの石は盾にはじかれます。

時々隙間に上手く入ったのか、盾の列が欠けるのが見えることがありますが、そんなことはそうそう起きません。

もっとも、盾の列はちゃんと機能していれば矢の雨すら防ぐはずです。遠目から見ても、盾の列は整然と横一列に並んでいるわけではなく、デコボコしていますから練度は高くなさそうです。

幾度となされたハラスメント攻撃で消耗しているのもあるのかもしれません。

一度掛け声をすれば投石は際限なく続きます。

疲れたら予備の人と交代しますし、石は大量にありますから途切れることはありません。

最初は大半が盾に阻まれていましたが、空堀を超えるぐらいになると敵軍の被害は増え始めました。盾を構えながら空堀を登れませんからね。

もちろん相手も黙っているわけではなく、矢を射かけてきたり、こちらが投げた石を投げ返したりをしてきます。ただ、高低差的にこちらが有利なうえ、土塁の端には木製の置盾が置いてありますから、ほとんどその反撃はこちらには届いていません。

運悪く当たってしまった人は後ろに運ばれて母の治療を受けていますし。

相手からの矢が飛び始めたタイミングで、ボクが率いていたハラスメント部隊の猟師さんたちも応射を始めます。

今回撃っているのは、熊撃ち用の鉄の矢尻が付いたものであり、熊の分厚い毛皮すら貫けるものです。

なので、木製の盾ぐらいなら盾ごとぶち抜きますし、金属製の鎧も当たり所次第では貫きます。

遠距離から熊すら倒すその腕は非常に正確であり、バンバンと敵兵を貫いていきます。

とはいえ全体から見て倒れる敵兵の数はそう多くはありません。

１０００前後いるわけですから、数十の兵士が倒れてもまだまだ数が減ったようには感じないでしょう。

ただ、敵軍の士気はどんどん落ちているでしょう。一方的に攻撃され、反撃は届かず、目標の土塁までは３つの空堀と木の柵を超える必要があります。

現状先頭の兵たちは最初の空堀を超え、木の柵を半分ぐらい壊したところです。最初に並んでいた盾の列も半分ぐらい脱落し、後ろと入れ替わっているのを考えると怖気づいて逃げたくなる気持ちもわかります。

ですがこちらも必死です。村になだれ込まれたら村人への被害は非常に大きなものになるでしょう。

削れるだけ削るべく、投石と弓による射撃は絶え間なく続けられるのでした。

◇　◆　◇　◆　◇

それなりに損害を出しながらも、辺境伯軍は最後の空堀までたどり着きました。

ここを超えられて土塁にたどり着かれると非常に厄介です。
出入り用に作られた中央の門は、突貫工事の木製ですからそう長くは持たないでしょうし、そもそも土塁自体をよじ登ってくる可能性もあります。
これ以上は取りつかせないようにする必要があるわけで、そのための準備もありました。

「お義父さま、行きましょう」
「そうだな。抜剣隊、でるぞ」

剣術が得意な人員で固めた近接部隊１０人と一緒に、ボクは門から出撃しました。
門を出ると義父がすごい勢いで突っ込んでいき、先頭にいた兵士を盾ごと切り捨てます。
木製とは言え盾まで真っ二つというのは相変わらずすさまじい技です。地の技は今ではボクの方が得意になってしまいましたが、もともとは義父から教えてもらった技であり、十二分に義父だって使えるわけです。
そのままぶった切った死体を蹴り飛ばすと、後続の兵士は死体ごと空堀に落下します。

義父に負けじと、道中の村の男爵さんたちも今までの恨みを叩きつけようとしているのか、剣をきらめかせ兵士たちに突っ込んでいきました。

そう広い街道ではありませんから、４人でも剣を振るにはかなり狭そうです。

残りのメンバーは、怪我をした時に連れて戻るための人員と、抜けた穴を埋めるための人員ですから、現状動く必要はありません。

ですがボクだけ違うお仕事がありました。

抜剣した大剣を地面に突き刺し、集中を始めます。

魔法を使うための準備です。

空気中に漂う魔法の元、マナをかき集め自分の中に取り込んでいきます。

物にはすべてマナが含まれていますし、体内にも魔力はありますがそれだけでは大きな魔法は使えません。

そのため、周囲からかき集める必要があるわけです。

呼吸に合わせて、魔法に必要なマナをかき集めていきます。

母は先日の暗殺騒ぎの時、ものの３０秒程度でこの作業を終わらせていましたが、未熟者のボクではそんな早くはできません。今までの経験的に５分程度、かなり時間がかかります。

まあ、眼前では義父が頑張っていますからそれくらいは持たせてくれるでしょう。

幸いなことに今盾を構えて押し寄せてきているのは雑兵の類らしく、義父らに圧倒されています。

ボクが集中している間、特に問題もなくしのいでくれました。とはいえ義父らの体力だって有限ですから、ずっと戦えるわけでもありません。

ここで一撃を加える必要がありました。

「お義父さま!!」

「一度引けっ!!」

戦っていた皆さまが後ろに飛びのくのを確認し、ボクは剣を振り上げます。

そのまま前に出つつ、大きく横なぎに剣を振りました。

「烈風斬!!!!」

魔力により高められた剣風が敵軍を襲いました。

すさまじい暴風に、先頭にいた兵士たちはバランスを崩し空堀に倒れ落ちていきます。

空堀の中にいた人たちは直接暴風を受けていないでしょうが、倒れこんできた味方に押しつぶされて大変なことになっているでしょう。群衆雪崩と同じような現象が起きているでしょうから、どれだけ圧死しているか、そうじゃなくても大けがしているかわかりません。

もう一つ奥の空堀でも同じようなことが起きています。倒れこんだ人で埋まった堀は少々グロテスクでした。

こんな結果を魔法が生じさせられるなら、もっと早く使えと言いたくなるかもしれませんがそうも行きません。

魔法というのは便利に見えてものすごく不便だったりします。

こと戦闘という面で見れば、準備に時間がかかる上に射程がすさまじく短いわけです。

投石機だと７、８０ｍは余裕で石を飛ばせますし、弓なら狙わないで良ければ１００ｍ以上余裕で飛びます。

一方魔法の射程はそれと比べると圧倒的に短く、今の一撃でもおそらく２０ｍぐらいが限界でしょう。

しかも準備に時間かかり、準備中も準備後もそう激しい運動はできませんから、使い

勝手は正直劣悪です。

ただ、場合によってはこのように大きな成果も得られるわけですから、使いようではありますけどね。

何にしろ動くこともままならない空堀に落ちた兵士たちを見れば損害は甚大であることは容易にわかります。

油断はできないまでも、こちら有利な状況になったと思ったそのタイミングで、後方から騎馬兵が一人、こちらに突撃してきました。

味方であるはずの兵士で埋まった空堀を踏み越えてこちらに向かってきます。

上で射撃をしていた猟師の矢がその騎馬兵へと射られましたが、手持ちの剣で切り捨てられました。かなりやり手のようです。

「我こそはマーチ辺境伯ウイリアムスである！　貴殿らに決闘を申し込む!!」

戦いはまだ終わらなそうです。

１０　決闘

目の前に現れた騎馬兵、おそらく名乗った通りの辺境伯本人に気を引き締めます。

この世界の貴族というのは基本強い人が多いのです。

これは単純に、武力のための鍛錬を積み重ねている、というところが大きいと思われます。

前世でももちろん鍛えた人というのは強かったですが、こちらの世界だと鍛えた時の身体能力の上限が前世と比べ物にならないのです。さっきみたいに木製の盾ぐらいならただの鉄の直剣で普通に真っ二つにしますからね。

そして、爵位が上の貴族の方が個人的な武力は強い場合が多いです。

もちろん例外もありますが、こうやって単騎で飛び出てきたということは自身の武力に自信があるのでしょう。

こんな一方的な一騎打ちの所望に応じてやる必要は一切ないでしょう。

ですが、囲んで叩くのも少し難しそうな状況です。

今この場にいる人の中で万全の状態なら一番強いのは義父でしょう。ですが、先ほど

の戦いで少し怪我をしているようです。動きが鈍っていませんが、左手から血が滴っていますし、一度下がってもらったほうがいいでしょう。

他の男爵さんたちも今のところ命に別条がありそうには思えませんが、多かれ少なかれ怪我をしていそうです。

となると、皆下げた方がいいでしょうし、残ったメンバーで袋叩きにしようにも連携の練習もしていませんからマイナスになりそうです。

「お義父さま。下がってお母さまの治療を受けて来てください」

「だが、辺境伯をだれが止めるのだ!?」

「そりゃボクですよ」

「アーシェ!?」

「偽皇女殿が相手か。手間が省けるな」

「偽物でもないしそもそも手を出してきたのは貴方の方なんですけどね」

放置してくれればこんなことにならなかったのに。

恨みを覚えながらも鉄塊のような剣、斬馬刀を上段に振り上げ構えます。

義父のことはもう無視します。義父達にはさっさと退散して回復してもらわないと

いけないのですから。

そしてボクが負けたら義父達に倒してもらわないといけないのですから。

馬に乗った辺境伯を前に剣を構えます。

騎馬兵というのは優秀な兵科です。利点はいくつもあります。

まず、馬の分背が高くなります。ボクが１４０ｃｍにもいかない低身長なのもありますが、辺境伯の背の高さは馬に乗っているのを合わせれば２ｍを優に超えています。下手するとボクの倍ぐらいの高さになりそうです。

高いというのはそれだけ重力を利用した振り下ろし攻撃の威力が上がりますし、視点も高くなるので観察する面でも有利です。

また足の速さも圧倒的です。逃げるにも、唐突に攻めるにも速さというのは有利に働きます。

他にも重い、というのもあります。馬は人間の何倍も体重がありますから、騎馬兵ごと突撃されるだけで大抵の人間は死にます。

他にも馬自身が判断してくれるとかいろいろ利点はありますが、結論を言えば騎馬兵と徒歩兵が戦うというのは徒歩兵が圧倒的に不利だということです。

鹵獲した馬を持ってくればよかった、と一瞬思いましたが、辺境伯の立派な馬に比べ

ると鹵獲した馬は質として明らかに劣りますし、ボク自身騎乗戦闘になれているわけではないので、むしろ不利は広がるかもしれないと思い直します。

さて、決闘と言っても作法も何もわからないし、攻めてもいいのかな、と思った瞬間、辺境伯が声を上げました。

「我こそは辺境の守護者、マーチ辺境伯ウィリアムズである!!」

どうやら名乗りを上げた方がいいらしい。

ならば一応ボクの方からも返事をしよう。

「ライン男爵令嬢、アーシェロットです」

皇女と言われても正直現状でもピンとこない。だが、義父の娘という自覚はあるので名乗りは義父の名を使わせてもらった。

「いざ尋常に勝負!!」

そう言いながら辺境伯は馬に拍車をかけ、突撃を始めます。
全体重の乗ったチャージなど受けたら僕は簡単に吹き飛ぶでしょう。
ですがこちらも機先を制するために準備していたことがあります。

「ファイアアロー!!」
「魔法だとっ!?」

魔法を使った後、辺境伯が突っ込んでくるのが見えたので、実は今までずっとマナを収集し魔力を練っていました。集まり切っているわけではないですが、今集まったマナをもって魔法を行使します。
ファイアアロー、火の矢を打ち出す魔法です。
細長く形作られた炎が、１２個空中に生み出され、辺境伯に向かって飛んでいきます。
見た目は派手な魔法ですが、効果はというと、実はあまり強くなかったりします。
純粋な高温の炎だけを打ち出しているので、表面が一瞬炙って終わりなんですよね、これ。
油とかぶっかけていれば着火して一大事になりますが、何も下準備がないと目くらま

し程度の意味しかありません。
ただもちろんこれには利点もあります。
一つは少ないマナで大量に行使できることです。
先ほど使った風の魔法ですらこの何倍もマナを使いますし、直接的な殺傷能力を付与したいならストーンアローやアイスアローといった魔法を使う必要がありますが、1本生成するだけでさらに風の魔法の何倍もマナが必要になります。
風の魔法の時ほどのチャージ時間がなくても、ファイアアローなら12も放出できますからね。
もう一つの利点は、知らない相手なら当たってはいけないと焦ることです。
ファイアアローに殺傷力がないのは魔法を使う者なら知っています。だから弾けばいいと思うでしょう。ですがそれを知らない者が見たらどう思うでしょう。
例えば……　人語を解せない馬などは。

「くっ、沈まれ!!!」
「でりゃあああああ!!!!」

辺境伯は一瞬驚いたものの、ファイアアローに威力がないのは知っていたのでしょ

う。すぐに冷静になり火の矢を腕ではじきました。ですが、馬の方は大いに驚き棹立ちになってしまいました。

その隙に、馬の腹に斬馬刀を叩きこみます。

当然馬は耐えられるわけもなく、そのまま横に倒れました。

「ぐおっ!!!」

「チッ、外した」

投げ出された辺境伯は、受け身を取って落馬の衝撃を和らげようとしていましたが、その瞬間、後ろから援護射撃が飛んできます。皆、見入ってしまっていたようですが、一人だけ、目の前のお貴族様に矢をぶち込んでやろうと考えていた人がいたようです。

熊の皮すら貫く矢は、気配を察知して身をよじった辺境伯の胴体には当たりませんでしたが、左二の腕にクリーンヒットしました。

金属製の重装甲を身にまとっていましたが、それすら貫いて矢が左腕に刺さっています。

「一騎打ちに割り込むなど卑怯な!!」

「いきなり襲ってくるアンタの方が卑怯だよ」

この辺境伯、やりたい放題過ぎるんですよ。

一騎討、決闘というのは、紛争が起きた時に、戦争を避けるために直前にお互いの合意で行うものなはずです。戦争の決戦時に不利になったからいきなり一騎討だ、なんて言われても何を言っているんだという話です。

今ボクだけが対応しているのは単純に戦力不足であり、男爵さんたちが元気だったら4人がかりで襲い掛かってきていたでしょう。

「逃がさない!!」

「ちっ!!」

上段から振り下ろしたボクの剣を、慌てて立ち上がりながら右腕に持った剣で受ける辺境伯。

一合合わせただけで、純粋な武力なら正直ボクより強いだろうなと思います。ボクの両手の一撃を片手で受け止めているわけですから。

ですが、落馬の衝撃によるダメージに左腕が使えないというハンデがあれば、戦える

相手です。

「でりゃでりゃでりゃでりゃ!!!」

「くっ、調子に乗るな小娘っ!!!!」

一気呵成に攻めますが、なかなか守りを崩せません。片手とはいえ、やはり相手の方が上手なのでしょう。

そうしているうちに相手もじれてきたようで、力任せにボクのことを押してきました。

腕力ならば、さすがに片手の相手に負けることはありませんが、体重をかけて教えてきたため、体重差で押し負け、相手との間合いを開けさせられます。その隙を利用して、辺境伯は大上段からの一撃を振り下ろしました。

単調ですが威力が乗った一撃を、ボクは剣をかかげて受けるふりをしながら、受け流しました。

受け流しは得意ではないですがここまで単調な一撃ならばいくら速くて力強くても流すのは難しくありません。

右に一撃を流し、さらに剣を手放して完全に衝撃を地面と剣に流しながら、ボクは辺

境伯の手首をとりつつ、後ろに回り込みます。

「どっせい!!!」

「ぬわあああああ!!!!!」

そして移動と体の回転の勢いを利用し、ボクは辺境伯を逆一本背負い投げしました。

この世界、剣術と魔法は発達していますが、無手の格闘技はあまり発達していません。ですので前世知識を利用し、奥の手としていた一つがこの投げ技でした。

幸い力については有り余っていますし、多少技術が足りていなくても投げ飛ばすのは難しくありません。この世界の人たち、投げられるという経験がないせいで、対応もお粗末ですし。

空いていた右腕の肘関節を逆に極めながら、ボクは辺境伯を投げ飛ばします。

柔道とは違う殺し合いですから、引き手は意識せずに脳天から地面に落とします。

「へぎゅっ!?」

辺境伯は間抜けな断末魔を上げながら、逆さまに地面に突き刺さりました。
これで死んでいればいいですが、この世界の人間は結構丈夫なので自信はありません。
後腰に差していたショートソードを抜いて、胸を貫けば確実です。
辺境伯が打ち取られ、辺境伯軍は明らかに動揺を始めます。
そのまま逃げだす者もあらわれました。

「追撃するぞ!!」

治療を終えたらしい義父達が、馬に乗って門から出てきました。
このまま易々と逃がしてやる選択肢はありません。
生け捕り出来れば身代金の交渉もできるでしょうし、死んでいても装備や服は役に立ちます。
それにうちの村はまだましですが、避難してきた村の人たちの恨みは深いでしょう。
拠点から離れた奥地に来ていたのも災いし、追撃やその後に各村が行った落ち武者狩りに襲われ、辺境伯軍は身代金代わりに帰ってきた者を除けば誰も戻ってこなかったようです。

第二章　皇女と辺境伯

1　戦のあとの後片付け

戦いが終わり、まずしなければならないことは怪我人の治療です。

幸い死者は出ていませんが、攻撃に参加していた人は大なり小なり怪我をしている人が多かったです。前線に出た人は、剣を振っていない人含め、石礫の洗礼を浴びていましたから一番怪我の度合いが重く、また、そうじゃない投石などをしていた人も、反撃の投石を受け怪我をしている人が出ています。

とはいえそのあたりは母の担当なので全部丸投げです。

幸い集会所の大広間に並ぶ程度のけが人の数で済んでいますし、軽傷な人はすぐに日常生活を送り始めています。

村に避難していた人たちも、様子を見ながら徐々に元の村に戻り始めています。

もっともうちの村に住むことを決めた人も結構居り、畑と家が問題となっています。

当面畑はうちの畑を貸すことにして、地代と税でウチは食べていくことになりそうです。

農業自体は楽しかったですが、やはりきつかったですし……　やっと貴族らしい生活ができる、かなぁ……　農業しなくてよくなっただけ良しとしましょう。

あとは開墾して畑を増やすのと、それぞれで頑張って家を建ててもらうだけです。そのあたりは義父がうまく調整してくれているようですし、お任せすることにします。

そして一番の問題は敵兵の対応でした。

まず、死体が大量にあります。１００以上の死体です。

うんざりするだけの数ですが、これの処理が問題になりました。

その辺に捨てておくと病気の発生が怖いですし、森に捨てると肉食獣のご飯が増えて大繁殖する上に人肉の味を覚えた肉食獣が村人を襲う可能性もあります。

本当は火葬したいところですが、それだけの燃料を用意するとなると莫大な量になりますからそれも難しいです。

そうなると地面に埋めるぐらいしかありません。

幸い村の前の空堀は、さすがに交通上不便すぎるので埋めることになっていました。なのでここに死体を投げ込んで、上に土を被せます。

雑過ぎる埋葬ですが、増えた村人３００人に死体の数が多すぎました。

それでも入りきらないので、さらに道に穴を掘って埋めるということまでしたりして

います。

少々時間がかかるでしょうが、そちらはまあどうにか対応できそうです。

それ以上に問題なのは捕虜の方でした。こちらも１４８人もいます。村人の５割ぐらいの数です。あまりに多すぎるので、村はずれに放置し、逃げるなら逃げろ状態になっていますが、それでもこれだけ残ってしまいました。自分たちが恨まれているのを十分察しているのでしょう。逃げれば辺境伯領までの村の人たちが恨み身骨の思いで襲ってきますからね。

ここにいれば最低でも殺すことはありませんし。

ひとまず怪我が軽い人に死体を埋葬するお仕事をさせていますが、治療をする余裕もなければ食料も厳しいです。

現状村の人が増えても大丈夫なように備蓄を出していて、新しい村の人たちも飢えることはないでしょう。ですが捕虜の分までは計算していません。最低限の食事を与えるだけでも負担が重すぎました。正直逃げてくれないかなと思うレベルです。

死体の埋葬が終わり、今は開墾と家づくりをお願いしていますが、さっさとお家に返しちゃいましょうか……

「ということで辺境伯の街まで行きたいんですけど」
「ちゃんと全部話しなさい」

義父に雑に提案したら怒られてしまいました。

「捕虜の人たちの食糧不足が深刻ですし、さっさと行って身代金交渉してこようかと。ついでに今回の戦の交渉もしたいなって」
「どういう内容で交渉する予定なんだ」
「そのあたりはお義兄さまにお任せです」
「アーシェ、時々すごく雑になるよな……」
「だって社会情勢とか全くわかりませんし」

熊を狩ったり大猪を狩ったりしているが、これでも箱入り娘で村の外になんかほとんど出たことがないんですよ。
だから交渉の落としどころなんてまるで分らないし、そういうのは義兄に任せればいいでしょうと思っています。
戦い自体は辺境伯が亡くなったので終わりましたが、それで何もなしとはならない状

況だと思いますので、和平交渉は必須だと思います。そんな交渉にはうちの村から代表者を出す必要がありますし、ボクと義兄で行こうかなという話です

「結局少ないうちの村の上層部のだれか行く必要がありますし、お母さまが懐妊されてますから、ボクと義兄が行っても大丈夫かなと思いますから」

「そうなんだが、心配なんだよ」

義父が微妙な顔をします。

暗殺事件後、母と一緒に寝なくなったボクですが、母は義父とよろしくやっていたのを知っています。

そして見事子供ができたとのこと。弟か妹かはわかりませんが、とても良いことです。

なので、ボクと義兄に万が一があっても大丈夫と言えるでしょう。一番まずいのは義父と母が害されることですから、ボク達で行こうかなと。

「あと、正直村にいてもお義兄さまが手を出してくれないから環境変えたいんですよ」

「お前たち、まだそういう関係じゃないのか？」

「全然です。お義兄さまのへたれ」
「妹思いなんだよ」
「へたれなだけです」

本人と両親からゴーサインが出てるんだから、あとはいただくだけなのに、義兄的に納得できていない部分があるようです。
ボクのことそういう目で見れないとかなら引き下がりますが、そう言うわけでもないでしょう。この前おっぱい揉んでましたし。

「で、道中の村の人達には声を掛けながら行きますから、お義父さまには周辺の村に声をかけてほしいんです。捕虜を確保した村もあるでしょうし」
「はぁ……　使いを出しておこう。馬が手に入ったし」

今回の戦で数頭の馬が手に入りました。もともと村にも何頭かいましたが、これで大幅増です。
それを使って、周囲の村に使者を出してくれるように頼みました。
今回の直接の当時者はうちの村と、道中にあった三つの村ですから、道中の村からも

交渉の権限がある人を出してもらう予定です。
そのあたりの人が集まれば、交渉団は余裕で１０人以上になるでしょう。さすがにボクと義兄の二人じゃ戦力的な意味で人数少なすぎますからね。
ただ、直接的に関係していなくても、間接的に関係している村もいくつもあります。
ボクに皮肉を言ってきたおじいさんなんかはハッスルして輜重部隊に襲い掛かっていましたし、撤退していく辺境軍を最後ボコボコにして捕虜を大量にとったと聞いていますから、今回の交渉に関係したいでしょう。
もちろん貝が殻に閉じこもるように何もしていない村もありますから、全部が全部参加してくるとは思いませんが……　もしかしたらそういう村の人も野次馬程度で出てくるかもしれません。
そうと決まれば早速準備です。
義父が早馬で道中の村にも連絡を入れてくれるようなので必要な装備を準備します。
戦の間は暗殺事件直前に母が作ってくれた母曰く「姫騎士風」ワンピースを着ていましたが、母が新しい服と言ってくれたので、そちらに着替えることにします。
いや、これ服と言っていいんですかね……
白のビキニにガーターベルトの左脚だけ白いロングタイツに左腕だけ白の長手袋という謎の服装です。

動くと暑くてしょうがないボクにはちょうどいいのは確かですが、ちょっとエッチすぎませんかね。しかもこれが日常服とか。

まあ着ますけどね！　見た目は痴女ですがエンチャント（効果付与）のおかげで防御力はばっちりです。服自体を強化するわけではなく、ボク自身の肌の強度を大幅に上げていて、着ている間は肌が鉄鎧よりも丈夫になるんだとか。だから露出部分の防御力も安全安心です。

さらに楽しいことに、義兄はこれを見て絶句して真っ赤になっていました。効果は抜群ですね。

装備はこんなものですから、それ以外の準備もします。

同行者は義兄と二人きり予定でしたが、結局戦の間ずっと村にいたニキータさんが

「私も同行します」

というものだから同行人数が増えました。

安心半分、がっかり半分です。

ニキータさんは辺境伯の街の中でも顔が売れていますから、同行してもらえれば交渉が上手くいく可能性が高いですから、断る理由はありません。

さらにニキータさんが用意してくれていた荷車を使えるようになりましたので、荷物を運ぶのも楽です。荷車があれば道中分の食糧を持っていくことができますから、同行する人の人数を増やせます。

なので、捕虜の人から代表の人2名もつれていくことになりました。

本当は義兄と二人旅でくんずほぐれつ計画だったのですが、残念ながら頓挫しました。

すごく残念です。

荷物として町までの食糧と、辺境伯からはぎ取ったエンブレムなんかの遺品をいくつか荷車に積み、馬に引かせながらボク達は目的地に向かって移動を始めました。

2　辺境伯領までの道中

ボク達の村であるライン村から、隣のリルブの村までは、急ぎ気味に移動すれば、徒歩でも朝に出て夕方にはつくぐらいの距離です。馬に乗って走れば1日で往復もできるでしょう。

軍隊の移動だとそこまで急げないので辺境伯軍は2日以上かかっていましたけどね。

同行しているのは義兄であるクリスと、馴染みの行商人さんのニキータさん、あとは捕虜の代表として来ている、カーク子爵のアランさんと、シフォン女男爵のアルゥちゃんです。

捕虜の二人も武器は渡していませんが、それ以外には特に縄をつけたりはしていません。そういうことすると管理が大変ですし、逃げたら他の捕虜の方がひどい目に合うだけです。

彼らの親族も捕虜に混ざっているのは確認していますし、逃げることはまずないでしょう。

アランさんは、６０ぐらいの白髪が目立つおじいちゃんで、でも体を鍛えていてとても強そうで、捕虜の中で年上で格が一番高かったので選ばれました。

一方アルゥちゃんはボクと同い年の女の子で、捕虜の人の中でも一番気が合ったのでボクの話し相手も含め選ばれた感じです。

村にも同年代の女の子はいますが、狩りやら剣術やらが趣味のボクと当然のように話が合わないんですよね。男の子たちは男の子たちでなんか遠慮されるし、友達が少ないのです。

同年代で男爵をすでに引き継いでいるアルゥちゃんは、趣味の点で非常に話があったため、かなり仲良くなってしまいました。

捕虜になっている男爵は数人居ましたが、ボクと仲良くなっているという点を考慮して彼女が同行者に選ばれています。

今は道中の移動中で、アランさんに貴族の格について教えてもらっています。

こういうの、うちの村だとほとんど情報が入ってこないんですよね。母なら知っていそうな気がしますが、面白くないと教えてくれないのです。

アランさんに教えてもらったところで言うと、子爵というのは伯爵や辺境伯の直属の家臣で、伯家の経営にもかかわることができる格であり、ただの村長さんであり、寄子契約をしているだけの男爵より上なんだそうです。だから、場合によっては男爵に直接指示ができる場合もあるのだとか。

ただ、格としての話だけらしくて経済力はまた別で、カーク子爵領はシフォン男爵領と同じぐらいの広さしかなく、ライン村より小さいぐらいと言っていました。

どうせだから、皇帝っていうのはどれくらい偉いのか、と聞きましたが、皇帝と主従関係になれるのは、王か、公爵か、一部の辺境伯だけだということで、伯爵や大半の辺境伯というのは王か公爵と主従関係を結んでいるという関係になるのだとか。

とはいえ現在の皇帝は権威はあっても権力がないのでほとんどだれも言うことを聞かないという話も教えてもらえました。

ちなみに今回の敵であったマーチ辺境伯は歴史があり、格的には皇帝と主従関係となる由緒正しい家なのだとか。

まあ今回の戦争で領主一家の関係者ほとんど亡くなってしまったみたいですが。

現辺境伯はボクが討ち取りましたし、軍に同行していた嫡男も落ち武者狩りで殺されてしまったということです。

なので、今近い親族で存命なのはまだ成人していない長女だけだとか。

「それだと長女の方が引き継ぐのではないですか？」

「エミリーはたぶん無理よ。荒事苦手だもの」

「アルゥちゃんの知り合いで？」

「妹分よ。年も私や貴女の一つ下だからよく知ってるわ」

アルゥちゃんが女男爵であるように、この世界だと女性でも普通に爵位を引き継ぐことも多いです。とはいえ場所に寄っていろいろ違うらしく、男性しか引き継げない爵位もあれば、女性しか引き継げない爵位もあり、また、血統ではなく実力で爵位を決めるところもあるそうです。

ちなみにうちの村は、このままいけば義兄が引き継ぐでしょう。

何にしろ、辺境伯は血統で基本決まり、性別の決まりもないようなので、順当に行けばその長女のエミリーさんが引き継げばいいと思うのですが、アランさんもアルゥちゃんもそれはないという雰囲気を醸し出しています。

「エミリーさんってどんな方なんですか?」

「天才で引きこもりで男性嫌いなコミュ障よ。あと三歩歩くと転ぶ」

「なんか生きているのがつらそうな方ですね……」

どう天才なのかも気になりますが、それ以外の属性が強すぎないでしょうか。

組織のトップに向いていなさそうな気配をひしひしと感じます。

そんな役に立つかはよくわからない情報収集をしている間に、ボク達は隣のリルブの村に到着をしました。

「なんでそんな痴女みたいな格好してんだよアーシェ!!」
「うるさい、アンタは相変わらずガキだね!!」

たどり着いて早々、めんどくさい奴に絡まれました。
リルブ男爵子息のクレイです。ボクの幼馴染であり、おそらくボクに惚れているのではないかと思っています。隣村の同年代の異性でしたから結婚相手の候補の一人でしたし、毎回こうやって絡んできますし、視線がボクのおっぱいに常に行っていますし。
ただ、ボク個人としてはこいつのことはあまり好きではありません。うるさいし、時々意地悪してくるし。ガキみたいなことばっかりしてくるし。
子供がすればかわいいですが、同年代にやられると腹が立つだけなんですよね。
外見は俗にいうイケメンで、正直義兄よりカッコいいでしょうが、それ以外がすべて義兄と比べて劣っているので私は圧倒的に義兄のほうがいいです。
まあボクの格好が痴女みたい、というのは否定しませんが。
めんどくさいなぁ、と思っていたボクより速くクレイに反応したのはアルゥちゃんで

した。

「はっ、これだから田舎者は」

「なんだと!?」

「アーシェロット様の服は、帝国の伝統的な女性竜人騎士の服装です。アーシェロット様のお母様はそういった有職故実にお詳しい方ですから、伝統に則った服をお造りになったのでしょう。それを軽々しく批判するとは。全く教養のない田舎者は困りますわ」

「なにー!!」

何この服、そんな伝統的な服なんですか？　というか帝国の女性竜人騎士ってこんな服着てたんですか。この服装の騎士がずらっと並ぶとか痴女博覧会じゃないですか。

後、アルゥちゃんなんで様付けなんでしょうか。ボクは単なる男爵令嬢でしかも後継ぎではない一方、アルゥちゃんはれっきとした現職の男爵様ですから、アルゥちゃんの方が格上なんだけど。なんかバグってないですか？

ボクが混乱している間にも、アルゥちゃんはクレイを言い負かしていきます。

ついに逆ギレしたクレイとアルゥちゃんがこぶしで語り合いを始めました。

格闘戦は圧倒的にアルゥちゃんの方が強く、一方的にボコボコにしています。
現職男爵舐めちゃいけないですよ。周りから認められている以上、腕っぷしは一定以上なわけですし。

ノしたクレイを引きずって、ボクたちは男爵のお家へと行きます。
今日はここで一泊して、出来れば明日朝一で出発予定です。話がまとまらなかったらもう一泊ですが。
クレイがボロボロなのはボクに会えばいつものことなので、クレイの父であるリルブ男爵も特に気にしません。もうちょっと鍛えてあげてもいいんじゃないかと思いますが。

「で、おじさま。一緒に辺境伯の街まで行ってくれて、リルブ男爵家としての判断が出来る方をお願いしたいんですが」
「うーむ、クレイじゃだめかい？」
「ダメです」

一応成人しているし、全くダメということはないのですが頼りなさすぎます。

万が一捕虜であるアランさんとアルゥちゃんが敵対した時に抑えられるだけの人が欲しいのです。クレイじゃ弱すぎるし、しかも考えが子供なので正直役に立ちません。くっついてくる程度ならまだ許容範囲ですが。

「セバスのおじさまをお願いします」
「今忙しいからセバスには残ってほしいんだがなぁ」
「さすがに最年長がお義兄さまでは不安ですし、経験があって信頼できる方がいいんです」
「仕方ないか」

セバスさんは、リルブ男爵の弟で、男爵の補佐をしている方です。
年は父と同じぐらいで、交渉事に長けた方です。男爵の信用も厚いですからこういう場にはちょうどいいでしょう。
現状捕虜の方の管理やウチの村に移住してしまった人の抜けた穴の調整などいろいろあるため、セバスさんは手放したくないのでしょうが、ここはこちらの要望を通してもらいましょう。

「人員はセバスに決めさせるが何人ぐらいがいい？」
「戦闘できる要員は三人程度は欲しいですね。雑用の方はお任せします。料理ぐらいはボクがしますし」
「食料は？」
「うちの分は十分ですが、それ以上はそこまで余裕がないです。荷馬車を連れて来てますから運べますので、そちらで用意したものは運べますよ」

必要な情報のやり取りはボクとリルブ男爵で進めます。
義兄はセバスさんのところへ行って話し合いをしているでしょう。既に席を立っています。
ニキータさんは情報収集と言ってどこかへ行ってしまいましたし、アルゥちゃんとアランさんはボクの目が届く範囲で待機しています。
この感じだと明日朝一で出発できるかな、と思いながら、ボクはリルブ男爵から聞かれることに答えていくのでした。

3　交渉の始まり

辺境伯の拠点がある町、マーチは何というかずいぶん静かな感じがしました。
この一帯では一番大きな町ですし、比較的何でも揃うという話を聞いていましたから、もっとにぎやかなイメージがありましたが、正直さびれている、という感じです。

「なんというか、寂しいですね」
「１０００も出兵してほとんど帰ってこなかったわけですから、寂れますよ」

そう言われるとそうでしょう。根こそぎ兵を出しているわけで、それが全く帰ってこなければ政情不安はすさまじいものになっているでしょう。
逃げ出している人たちもいるかもしれません。
幸い、辺境伯と言ってもその名前が付けられたころの辺境である魔の森は、現在はボク達の村をはじめ魔の森は開拓大きく開拓されたため大きく遠ざかっていますから、兵力が減っても大きな問題になりにくくはありますが。

アランさんの案内でボク達は町を進み、お城を目指します。
途中の村々で人数を増やしたボクたちの集団は現状３０人を超えています。
大体は各村の男爵代理である子供や兄弟ですが、先日の会議の時ボクの首を出すことを提案してきたおじいさん、ローランド男爵は男爵ご本人が来ています。年ですから後継者もちゃんと育っているので、万が一があっても問題ないという判断なのでしょう。
ほとんどの村が人を出してきたためかなりの大所帯になってしまいました。
街の奥にはお城、というよりもお屋敷のような建物がありました。そこが辺境伯のお屋敷のようです。
立派な入口ですが、そこに門番もおらず、人手不足の深刻さを感じます。
領主館なのに……
アランさんの話だと目的地がここであっているようなので、ドアノッカーでノックをします。装飾のついた立派で重い金属製のノッカーがゴンゴン、と鈍い音を立てました。
少しすると、扉が少し開いて、中から少女が顔を出します。黒髪で褐色肌の美少女です。彼女の大きな目がこちらをとらえると

「ぴぎゅっ!!」

という謎の鳴き声を発して扉の向こうに戻ってしまいました。
何でしょうか、今の。ボクも同行している人も疑問に思っていると

「エミリー!!　扉まで来たならちゃんと迎え入れなさいよ!!」
「アルゥちゃん!?」

アルゥちゃんが扉を開けて遠慮なく中に入り始めました。
勝手に入っていいのでしょうか。
慌ててアルゥちゃんの後をついて建物の中に入ると先ほど扉から顔を出していた少女が転ぶ瞬間を目撃しました。思いっきり顔面から地面に落下していました。下が絨毯でなければ悶絶するレベルの転びっぷりです。

「大丈夫ですか!?」
「へぅ……」

思わず慌てて駆け寄り、抱き上げてしまいました。

彼女の体格は小柄なボクよりさらに小さく、さらに痩せているのでボクでも抱き上げられるぐらいです。転んだせいか、おでこが赤くなっていました。

さっきアルゥちゃんがエミリーと呼んでいましたし、この子がマーチ辺境伯令嬢のエミリーさんでしょう。

なんというか、辺境伯の遺伝子がどこ行ったんだ、というぐらい雰囲気が違います。辺境伯は巨漢で金髪碧眼の色素薄めの人でしたが、エミリーさんは黒髪黒目褐色肌と色素多めですし、体格もすごい小さいです。ボクもアルゥちゃんもこちらの世界の平均で見るとかなり小さいほうですが、それよりも一回り背が低いんですから本当に小さいですね。

しかし、なんでそんな令嬢本人が扉まで出てきたのでしょう。

うちならお手伝いさんもいないから下手すると男爵本人が出てくることもありますが、辺境伯は直属の家臣として子爵が二人いるし、世話を焼いてくれる人もそれなりにいるはずです。

そういうメイドさんとか執事さんとかが出てくるものではないでしょうか。

「エミリーさま、ユーノ殿はどうしました？」

「ユーノは敗北の知らせを聞いて逃げました。付き添いの侍女は残っていましたが、敵

が攻めてくると聞いたので数日前から実家に退避させています」

「……」

アランさんの質問にそんなことを言いながらエミリーさんはボクにギュッとしがみつきました。

寂しくて不安だったのでしょう。そして幼馴染のアルゥさんと馴染みのアランさんが戻ってきたから味方だと思ったのかもしれません。ですがボク達はその『敵』で、総大将がボクなんですけどね!!

あまりの状況に、強硬派筆頭のローランド男爵すら微妙な顔をしていますし、アランさんは笑顔の裏でブチ切れてますね、あれは。そりゃ主君を見捨てて逃げる同僚に怒りが収まらないのは当然でしょう。

「それでアルゥちゃん、こちらの麗しき竜騎士のお姉様のこと、紹介していただけませんか?」

「あ、えっとそれは……」

エミリーさんの問いかけにアルゥちゃんは口ごもります。

まあそりゃそうですよね。彼女にその責任を押し付けるのも何ですし、自分で自己紹介しましょう。

「エミリーさん、ボクはライン男爵令嬢のアーシェロットです。帝国皇女であり、あなたのお父様を殺した、あなたの敵になります」

自分で言ってなんですが属性多いですし、エミリーさんから好かれる要素何もないですね。

うう、褐色美少女とお近づきになれるんじゃないかという下心がありましたが、これは絶対無理です。だって自分に置き換えてみればわかります。義父や母を殺した奴が目の前にいたら絶対死んでも殺しますもん。問答無用ですよ。

そう考えると彼女を抱えているこの状況、ちょっとヤバくないですか。

どうしようかと思っていましたが、エミリーさんは

「そうでしたか。ごめんなさい勘違いしてしまって。アーシェロットお姉様が優しくてきれいだったので」

と特に何もなかったのように答え、ボクの腕の中でおとなしくしていました。

当初の予定では、辺境伯を相続予定であるエミリーさんを代表、残っているはずの子爵を辺境伯代理にして交渉予定でしたが、あまりに人が居なさすぎるので、ひとまずはアランさんを正式に釈放してエミリーさんの代理になってもらうことにしました。

まあ現状でもほぼ自由行動でしたしね……　捕虜返還の代金は後払い予定ですが、担保としてアルゥちゃん含め何人かこちらが抱えていますから、あまり問題はないでしょう。アルゥちゃんはアランさんの孫らしく、しかも唯一の直系血縁ということなので、彼にとって価値が非常に高いのです。将来は今持っている男爵だけでなく子爵も引き継ぐ予定だとか。すごいですね。

閑話休題、実家と言っても同じ町の中にあるらしい侍女さんをよびもどして、エミリーさんの世話をお願いしながら、まずは交渉を始めることにしましょう。

「ひとまず身代金だけ払っていただけれ……」

「アーシェロットお姉様に辺境伯の地位の禅譲をしたいと思います」

「ふわっ!?」

なんかとんでもないことを言われました。
というかお姉様ってなんだ。ボクはエミリーさんと一つしか違わないはずだぞ。まあ一つ上だからお姉様でも間違っていないのだろうか。

「前辺境伯を倒した実力に、帝国皇女という血筋から言って、辺境伯を引き継ぐのにお姉様は十分だと思われます」
「いや全然十分じゃないが!?」

それって武力と血筋だけじゃん!!
領主になるってそれだけじゃ全く足りないでしょ！　政治力とか、経済力とか、いろいろ必要でしょ!!
そう思うのですが、周りは案外その提案に肯定的です。

「確かに、アーシェ嬢が辺境伯になれば今までのわだかまりもある程度良くなるかな」
「それだけではございません。屋敷の中を見ていただいてわかるように、現状辺境伯には捕虜の身代金全額を払う力はありません。アーシェロットお姉様が辺境伯になる場

合、身代金の後払いをお願いしたいと思います。捕虜の方たちを領地に戻せば、1年もあれば払えるだけの準備もできます」

まあ、捕虜の人たち早く帰してあげたいのは確かです。正直食糧の負担も大きいし、気も使いますし。

お家に帰って働いてもらって、自分で身代金稼いでもらえれば一番楽ですから。

ただ、何もなく先に帰せば踏み倒されてしまいますから、ボクを辺境伯にして、ボクと、場合によっては父にその支払いの保証をさせようという算段なのでしょう。

「エミリーさん、ボクは前辺境伯であるあなたの父と、次期辺境伯だったあなたの兄を殺した人間ですよ。そんな人に引き継がせていいのですか？」

「私としては何も問題になりません。あの人たちとは血のつながり以上のものはないですから」

何それ怖いんだけど。家族仲悪すぎでしょ。

あまりにもあまりな話に、この場で話をまとめるのはかなり難しく感じてしまいます。

ひとまずアランさんとエミリーさんで今後のことの話をまとめる必要もあるでしょうし、こちらもこちらでどうするか話す必要もあるでしょう。

「ご提案についてひとまず検討したいのですが」

「ではお部屋に案内します。屋敷の中は、私の部屋以外は好きに立ち入って構いません」

そう言うと、侍女さんがボク達を案内してくれます。

彼女についていき、ボク達はひとまずこの場を去るのでした。

4　話し合い

客間らしい部屋に通されて、早速ボクは義兄と話し合いを始めます。

これだけの関係者がいると、誰と何を話すかは、ちゃんと場合分け、色分けしておかないとごちゃごちゃになってしまいます。

まず絶対信用ができる人。現状これは義兄しかいません。あとは義父や母ぐらいで、あまりにその対象が少なかったりします。

次に同じ目的を持っているだろう人達。辺境伯軍の進撃路の道中にあたり避難していた村の人達はここに含まれます。隣村のセバスさんや幼馴染のクレイ、他の村の代表として来ていて、ハラスメント部隊で一緒に戦っていた女性のフィオナさんなどもここに含まれます。行商人のニキータさんもここに入れていいでしょう。

さらに広げて辺境伯以外の男爵の人たちはさらに一段下になります。ローランド男爵のおじいちゃんとかですね。決して無視はできませんが、どう動くかは読みがたい層です。

その下が辺境伯側のこちらに好意的な人たちです。アルゥちゃんやアレンさんは仲良くなりましたし話しやすい相手ではありますが、いつ手の平を返すかわかりませんの

で、あまり油断ができる相手ではありません。
　ひとまずボクの根本的な方針を決める必要がありますから、義兄と二人でお話合いです。部屋一つにしてもらって押し倒そうかと思っていましたが、その計画は一時中断になりました。

「で、何から考えればいいんでしょうね」
「まず受けるか受けないかだろうし、受けた場合の問題でわかる範囲のことを検討するべきだろうな」

　突拍子もなさすぎる話に義兄も困惑しています。
　ボクとしては頼れるお兄ちゃんではありますが、まだ２０にもなっていない若者ですし、あまり頼りすぎるのも問題でしょう。

「辺境伯の引継ぎが正当にできるのか、は考えてもしようがないのでおいておきましょう。皇女パワーがどれくらいすごいかわかりませんし。それがわかる人というと……
　お母様ですよね……　一度馬で村に戻って話を聞いた方がいいかもしれません」
「そうだな。義母上をこちらに呼ぶのは難しいだろうし」

母は現在妊娠していますから、こちらに呼ぶのは難しいでしょう。
そうするとこちらから戻る必要があります。馬を走らせて往復二日です。それくらいする時間的余裕はあると思われます。

「そのあたりの正当性についても、辺境伯側に話をまず聞く必要があるだろう。だがこれ以上考えてもしょうがないし正当に辺境伯になれるとして、懸念点は何か、ということだ」
「まずは人でしょう。道中聞いた限り、辺境伯には子爵が二人ついているわけですし、寄子の男爵も３０以上いると聞いています。それを取りまとめられるだけの人が必要です」
「アラン殿に残ってもらうとしても子爵一人はこちらで準備する必要があるわけだな」
「できればバランスを考えて二人ぐらいは欲しいところです。その下の行政を任せる人たちも、ある程度辺境伯時代の人を使うとしても、こちらから人を入れるべきでしょうし」
「それがどの程度準備できるかだな。ほかの男爵にも相談が必須だ」

辺境伯の下についてもらうのは、一時的に兵士を出してもらうのと違い、恒久的にこちらに所属を移してもらう必要があります。

もちろんそれなりの地位を渡すことになりますが、各男爵の方は人手不足になりかねません。これは今来ている代表たちに聞いてみないとわかりませんね。

「あとはお義兄さまが一緒に来てくれないととても無理ですから、ボクと結婚は必須でしょうね」

「まあ、そうなるか……」

頭をガシガシ掻き始める義兄は、とても悩んでいるように見えました。

いやなら嫌で断ってくれてもいいわけで、それなら辺境伯もお断りするで済むでしょう。

「ボクとの結婚、いやですか？」

「いや、アーシェの方が私以外と一緒になったほうがいいかと思っている」

「ほえ？」

「アーシェは前世の記憶があるんだろう？」

「そうですね」

ボクが前世の記憶を持っているという話は母と義兄しか話したことがありません。義父は知っているかもしれませんが、ボク自身から話したことはないです。

前世男性の時の記憶を話して、いろいろできないかと義兄を悩ませ続けましたが、技術レベルも違えば知識があやふやなのもあり、ろくに使えなかったです。母には衛生知識が役に立って喜ばれましたがそれくらいですね。

「男性の記憶があるから、女性と一緒になる方がいいかと思ってな。もしくはもっと男らしくない相手とか」

「いや、そんなこと考えていませんが」

「でもこの前、ルドン男爵令嬢とお楽しみだったんだろう?」

「あれは、単なる気の迷いですよ!?」

遊撃部隊を率いていた時、同行していた女性に胸を揉まれたのは確かです。いや、確かにお姉さま方に迫られて楽しかったのは否定できません。

その時の相手の一人がルドン男爵令嬢で、今回の一行にも実は加わっています。

あの人はその時の話を5割り増しぐらいで義兄に話したものですから、義兄が不機嫌になって結構大変だったんです。あの恨み、いつか晴らしてやる。

「お義兄さま、いくつか僕の意見を聞いていただけますか？」
「なんだい？」
「まず、ボクはお義兄さまを愛しているということです、多分」
「なんでそこで多分が付くんだ。まあアーシェらしいが」
「燃えるような恋とかよくわかりませんし……　ただ、お義兄さまと一緒に居ると非常に落ち着きますし、ずっと一緒に居ても苦にならないわけです」
「まあ、私もアーシェと一緒に居ても苦にはならないな」

村では男爵の子供でしたし、ボクはさらによそから来た子供ですからそれなりに浮いていました。なので義兄にべったりでしたし、それで辛かったことも困ったこともありません。

「結婚するというのは一緒に暮らすことですから、一緒に居て楽しい相手というのはすごく大事だと思うのです。これって愛していることになると思います」

「でも多分と言ったのはなんでだい？」
「そりゃ体の相性を確かめたことがないですから」

ボクは義兄を押し倒しました。部屋の鍵は閉まっていますし、邪魔が来ることもないでしょう。

義兄は予想外の展開に慌てています。

「結婚するということは子供を作るわけですが、そういう行為は長い間一緒に居てもしたことがないわけです。ですからもしかしたらやろうとしても生理的に受け付けないとかあるかもしれないなと思いまして。ボクも、お義兄さまも」
「ちょ、ちょっと待てアーシェ」
「これが大丈夫なら、『多分』が取れますね」

◇　◆　◇　◆　◇

結論だけ言えば義兄は獣でした。

特に問題なく終わった、と言いたいところですが、義兄はたまりにたまっていたので

しょう。まあ、先日まで続いた戦の間、誰かに手を出していた気配もなかったですしね。義父すら母と激しかったのに。

それでこんな状況になればもうハッスルですよ。いつも甘えている相手だということで忘れていましたが、義兄もまた思春期の男でした。

一瞬にして逆転されて、やめてと言っても止めてもらえずまあ大変でした。

何にしろ相性は良かったですがボクには辛過ぎて完全にグロッキーであり、そのまま二日ほど寝込んでいました。敵地で何やっているんでしょうね……

もっともボクがグロッキーであった間、義兄はいろいろ動いてくれたようです。母のところにも話を聞きに帰ってくれたようですし、情報収集してくれたようです。

あまり寝ているばかりも行かないですから、ようやく復調したボクは皆の話し合いに参加します。既に辺境伯以外の人達全員が参加する会議の段階まで来ているようです。

「義母上から聞いたところによれば、アーシェが辺境伯を引き継ぐことは可能らしい。皇女にあずかっていた辺境伯位を返還する、という形になるそうだ」

「それじゃあお嬢ちゃんは晴れて辺境伯か」

「まだ流動的だがな」

「捕虜の身代金は、辺境伯になったアーシェさんが保証してくれる、ということでいいん

ですか？」
「正確にはアーシェではなく辺境伯が保証するという形にする。アーシェが追い出されても補償義務は辺境伯に残る形にしておかないと、何かあったときに怖い。アーシェ自身は何も持ってないからな」
「なるほど」
「あとはアーシェが就任したとすると任せられる爵位はこれだ。男爵位が６つ、子爵位が１つ。条件があるところもあるから、どこをどれを取るかを詰めておきたい」

義兄が取り出した紙には、領地の名前とざっくりした概要、そして条件が書いてありました。
これが褒賞として配れる土地なのでしょう。
子爵位は、すでに逃げた方から取り上げる予定のモノです。緊急事態に尻尾巻いて逃げるような者を子爵位にはおけないですからね。一族全体もすでに逃げてますし。
これについては重要な役割ですし、おそらくセバスさんあたりか、ルドン男爵令嬢あたりに依頼することになるでしょう。セバスさんがベストですが、本家の方のお仕事もありますからね……
男爵家６つは、先の戦いで当主が亡くなり、後継ぎもいないという悲しい状況の場所

です。存続のために新しい男爵を派遣する必要がありますから、今の領地と兼任はできません。なので、後継ぎでない子供を抱えている家に配り、引き継いでもらう予定です。

中には婿入り希望とか嫁入り希望といったものもあるので、性別や未婚であることが求められるものもあります。

子爵位はまだしも、男爵位に関してはボクから何も言うつもりはありません。今いる代表者の人たちで決めてもらいます。

ある程度こちら側のお話は固まりました。

あとは相手と最終調整をするだけです。

5　最終交渉

ざっくりとした話は進んでいるが、一つ気になったことが生じました。
それを確認するべく、ボクは現辺境伯（仮）であるエミリーさんのところへと向かいます。
同行者は彼女が人見知りのことも考えて、同年代の者がいいだろうと思い、義兄とリルブ男爵子息のクレイと、ルドン男爵令嬢のフィオナさんを連れて行きます。
ただ、このグループになるとなんとなくギスギスしてるんですよね。クレイはなんかずっと義兄を睨んでいますし、フィオナさんは愉悦の表情を常にしてるし。
かといって年上の人を連れていくとエミリーさんの緊張が高まりそうなので、しぶしぶこのメンバーで行くことにします。
廊下を歩いていると、メイドさんがパタパタと走っています。
こちらを見つけると慌てて端に寄り頭を下げるので、気にしなくていいよと声をかけて進みます。なかなかできたメイドさんです。
来た時は誰もいなかった館の中ですが、アランさんが呼び戻しているらしく少しずつ働いている人が増えてきているように思います。

さて、そんなこんなでエミリーさんの部屋にたどり着きます。
ボク達が来てからほとんど部屋から出ていないとのことですが、ノックをすれば素直に入ることが出来ました。
部屋にはアルゥちゃんとアランさんも待機していました。少しお話をしたいと伝えていましたから、待っていたのでしょう。
勧められるままに席に座ると、侍女さんが紅茶を出してくれました。
人生初紅茶です。茶葉なんてうちの周辺の村では育てていませんから、最高級品ですよ。
しかも白い角砂糖付きです。村での甘味なんてもっぱら果物か蜂蜜ですから、そんなの舐めたこともありません。
ボク以外の人たちもそうですから、完全に場の空気を持っていかれました。
「クレイ、角砂糖二つ以上入れちゃだめだからね」
「そ、そんなことしねーよ!!」
やらかしそうな幼馴染に釘を刺します。

やりたくなる気持ちはわかりますが、普通にがっつきすぎですし。
一度仕切り直したくなるような状況ですが、ここで逃げるわけにもいきません。
正直紅茶や砂糖なんて辺境伯としてもかなり高級品でしょう。そういったもので場を遊離しておきたい程度には向こうも重要な話をしようとしていると思われます。
ボクとクレイのやり取りをみてクスクス笑っていたエミリーさんに、早速こちらの話題から切り出しましょう。

「で、エミリーさん」
「エミリーで構いませんわ」
「わかりました、エミリー。それで、辺境伯をボクに譲るという話だったけど、そうした場合にはエミリーはどうする予定なのか聞きたくて」
「私もそれについてお話ししようと思っていましたの。アーシェロットさん、私をお嫁にもらってください」
「……ふえ？」

とんでもない爆弾が投下されました。
この世界、結婚は同性でも可能ですし、下手すると人以外とでも可能です。

結婚をつかさどる愛の女神が、愛こそ至上としており、愛さえあればすべてを認めるという教義を残しているためです。

ですが、同性婚はそうそう起きません。子供出来ないですから。特に家を継いでいく必要がある貴族には同性婚は致命的です。平民でも家業を持つ家では基本受け入れられないものです。

譲渡した先の新辺境伯と、前の辺境伯の血筋が交わるのは確かに政治的にも意味がありますから、結婚ということ自体は理解できなくはないですが、それも同性婚では果たせないでしょう。

つまり意味が分からないわけです。

「ちょッと整理させてください」

エミリーの突然の提案に戸惑いながら状況が良くわかっていそうなアルゥちゃんと一緒に部屋を出て廊下へと行きます。

アルゥちゃんはエミリーの姉貴分的存在ですし、状況を把握していそうです。

「アルゥちゃん、エミリーのあれ、一体何なんですか？」

「すいませんアーシェちゃん、あれはエミリーがいろいろ拗らせただけです」
「拗らせた？」
「エミリーはもともとおとぎ話が大好きでして、特に姫騎士様の話が大好きなんです」
「姫騎士……？」

姫騎士、母も前に言っていた謎概念である。
どうやらおとぎ話の存在らしい。

「もしかして、姫騎士アマーリエのお話、知りませんか？」
「ごめんなさい全く知らないです」
「端的に言うと、物語に出てくる帝国皇女でとっても強くて悪者を退治する人ですね。銀髪の竜人だったといわれていて、絵本なんかではその姿で描かれる場合が多いです」
「なるほど、もしかしてボクがそのイメージに合ってる感じ？」
「その服装も相まってあえて意識しているのかと思いました」

どうやらエミリーのあこがれの存在に近い格好をしているらしい。
めんどくさい一目惚れである。

「それだけではなくてですね、前辺境伯様やお世継様は、エミリーを邪険にし続けていました。実はエミリーは前辺境伯のお兄様の子供でして、家系的にはエミリーの方が正当なんです。そういうのもあってかなりいじめられていまして、正直エミリーも前辺境伯様たちを恨んでいたと思います」
「あー、彼女にとって、ボクは正義の味方の位置づけなんですね」

つまり悪い養父や義兄たちをぶったおして、助けに来た姫騎士様がボクだと。
でもそこからプロポーズはかなりかっ飛んでると思います。

「まあ、正当性も得られますし、少しの間だけでもお付き合いいただければ助かります」
「なるほど、わかりました。ひとまず全部おじゃんになったらごめんなさい」
「え、どういうことですか」
「だってまったく拒否するつもりだし」

ボクの答えはすでに決まっていました。

「少し考えましたがエミリーと結婚はできません」

はっきり告げると、エミリーは驚き悲しそうな顔をしました。

正直黒髪褐色美少女は性癖にはドストライクで、無茶苦茶かわいいと思います。

性欲だけで言えばぺろぺろしたいぐらいなのは間違いありません。

ただ結婚になると外見とか正直あまり重要ではないと思っています。

生活を共にして、協力して生きて、場合によっては子育てとか言う死ぬほどめんどくさい作業をしないといけないわけです。

外見の好みなんて正直そういったことには何も役には立たないでしょう。

「そもそもボクはお義兄様と結婚する予定です」

「でもさらに私も娶っていただければ」

「お義兄さまは結構嫉妬深いので他の人とさらに結婚するつもりもないです。それに二人以上を平等に愛することができるほど器用でもないので」

貴族となると重婚は可能です。
前世で言うハーレムとかも可能だったりします。同性婚も可能ですから女性だけのハーレムとかもやることも可能です。
ですけどね、ハーレムって絶対大変ですよ。主に好感度管理が。
あんなのお相手全員がハーレム主に脳死レベルでべた惚れか、逆らえない関係か、ハーレム主が超コミュ力強いかのどれかですよ。
実際前世の歴史を見れば、オスマン帝国のハーレムなんてみんな奴隷だったわけですし。
ボクにそんなコミュ力はないですし、義兄がボクにそこまで惚れているかというとそんなこと絶対ないでしょう。結構嫉妬深いですから。
ボクはノーと言える竜人なので、断固断ることにしました。

「で、でもそれなら辺境伯を差し上げるのも難しいというか……」
「それならいらないですよ、辺境伯」
「え？」
「男爵領一つもらえればうちとしては十分なので」

そもそも別に成り上がったりしたいわけではないのです。
現状欲しいものというと、生まれるだろう弟か妹のための男爵位ぐらいです。
今のままでも村の補佐とかのお仕事はあるでしょうが、どうせならばそれくらいの地位は用意してあげたいじゃないですか。
そうすると飛び地の男爵領一つあれば十分です。ライン村にボクたちが戻るかどうかは弟か妹が大きくなってから考えればいいので。
正直辺境伯自体は重荷の面が大きいので、やーめたと言われれば全く問題なかったりします。その後の辺境伯の運営をどうするかはボク達の感知することではないので。
辺境伯をダシにしたのは売り言葉に買い言葉的な話なのだろうとは思いますが。
交渉の札は全くないことをエミリーも気づいたのでしょう。言葉に詰まっていました。
そして……

「えう、えううううう」

泣き出してしまいます。さすがに年下の子を泣かせるとちょっと焦ります。
男性陣は同じように困った表情を浮かべていますし、フィオナさんはとても楽しそう

です。この人鬼畜ドSなのでしょうがないですね。
アルゥちゃんは肩をすくめ、代替案を提示しました。
「まあエミリーを嫁に、とは言わないけど、アーシェちゃんが辺境伯になったら子爵にしてあげると助かるわ。行き場もないし、経験はないけど頭がいい子だからそこそこ使えるから」
「まあそれくらいなら……」
「えうぅぅぅぅぅ」
謎の鳴き声を上げているエミリー。
可愛いけどフィオナさんが愉悦の表情を浮かべているのはどうにかしてほしいです。
色々トラブルはありましたが、どうにか交渉はまとまりそうな感じになりました。

6　辺境伯のお仕事

ということでどうにかこうにか、ボクは辺境伯になりました。

エミリーは結局泣きながらボクに辺境伯を譲るのを同意しました。まあ、自分でやるのは難しそうだと本人もわかっていたのでしょう。なのであの場の暴言的なあれこれは水に流すことにします。まだ子供ですしね。

禅譲の書類にサインをして、手続き自体は終わりです。簡単に終わりました。

これでマーチ辺境伯アーシェロットです。一気に強そうになりました。

それと同時に、捕虜にしていた人たちは皆返すことになりました。どこの村が捕まえて、誰が帰ってきたかをちゃんと記録に取り、捕まえていた村には身代金？　支払いは麦なので身代麦ですかね、として人数に比例して一定の麦を渡す約束になっています。

もっともどの村もあまり余裕がありませんから、義父のライン男爵と辺境伯で支払いを保証している状況です。

ボクの辺境伯就任と同時に新しく子爵も任命されます。

カーク子爵のアランさんは領地もそのままで続投で、リルブ男爵のおじさまにどうに

か許可をもらい、新しくセバスさんがキリル子爵に任命されます。逃げた子爵の代わりですね。もっとも領地はまだ相手が支配したままですからおいおい討伐しに行く必要があるでしょう。

領地持ち子爵はこの二人ですが、領地無しの子爵を3人さらに新規で任命しています。一人は義兄です。ボクの配偶者予定ですが、それだけだと夫というだけの無職になってしまうので、それっぽい肩書として子爵に任命です。名誉職ですねこれは。

後はエミリーも領地無し子爵に任命することになりました。まあボクの秘書みたいな立ち位置ですね。可愛い秘書が居てボクは満足ですし、現に結構役に立っています。今回簡易でボクの就任と子爵や男爵の任命を行いましたが、この辺りの儀式については全部彼女が手配してくれました。アルゥちゃんが言うように確かに優秀なようです。

最後の子爵は行商人のニキータさんにお願いしております。本人は遠慮していましたが、今回の戦でいろいろ手伝ってもらっている以上、恩賞は必要ですし、辺境伯の首都の街を差配する権限を渡してしまうことを考えています。具体的に何がどこまでお願いするかはまだ決まっていませんが、ひとまず都市子爵の肩書だけ渡すことになります。

後は戦争で亡くなって領主がいなくなった男爵領に関して、村々から推薦された嫡子以外の人たちをそれぞれ任命すればひとまず最低限の新辺境伯の体制は完成しました。

とはいえ今後やらなければならないことは山積みです。

まず、逃げた子爵は討伐して領地を奪わないといけないわけです。出兵しなかったにもかかわらず、土壇場で逃げだした子爵をボクとしても使いたいとは思いません。そのための討伐の準備は始める必要があります。

捕虜の復員を具体的に進める方法も大きな問題です。ひとまず全体のルールは決めましたが、バラバラに帰してしまうと道中の食糧のための略奪なんかも起きかねませんし、誰が捕まっていたかの把握もできなくなります。なので村々に一度この辺境伯首都まで捕虜を連れてきてもらわないといけないでしょう。その調整にも頭を悩ませます。

あとはうちの義父の村含めた、今まで非辺境伯領だった地域の辺境伯領編入の問題もあります。やはりトップが居た方が協力もスムーズになりますから、ボクの辺境伯就任後に皆辺境伯の傘下に入る予定です。もっとも、方向性として辺境伯領になろうということが決まっただけで、具体的にどういう条件で封建契約を締結するかなども決まっていないので、その調整からする必要があります。

他には、旧辺境伯領内の男爵との封建契約の見直しもあります。今回１０００も動員できたのは、封建契約において上納金がほとんどない一方で、軍事力の提供を強く義務化している契約書だったのが大きな原因です。だって、１００人規模の村で１０人も兵

士ださせられる契約なんですもん。そりゃ大量の兵士を準備できるに決まっています。ですが、軍事偏重すぎて、経済発展が明らかにおろそかになっていますし、もっと違う形にしたいところです。隣接の貴族たちとの関係がどれだけ悪いかわかりませんが、今回の戦で死者も結構出てしまっていますから、この規模の義務をさらに課すのは難しいですしね。人は大きくなるまで１０年以上かかる生き物なのです。

「ひとまずどれから手を付けるべきかな」

「お披露目としての就任式と、捕虜返還が良いと思います。就任式で貴族を集めて、そこで同時に捕虜返還してしまえば手間が省けるでしょう」

「じゃあ招待状作るから、配達と会の手配をお願い」

「わかりました、一月後には行えるよう手配しておきます」

結局ボクの秘書のポジションに就いたエミリーがそう答えます。

辺境伯の儀式についての知識だとか、全体的な戦略構築とか、そういう点では確かに優秀なんですよね。

正直彼女が手伝ってくれていなければ非常に苦労していたと思います。

引きこもりで虐げられていた彼女ですが、どうやら引きこもっている間に辺境伯家に

あった書籍を全部読みつくしていて、さらに記憶しているらしいのです。まさに動く図書館ですね。

なのになんであんなわけわからないプロポーズになってしまったのか。多分恋愛小説は辺境伯家に置いてなかったのでしょう。

「お義兄さまも、捕虜の皆さんをこちらに移送するように、男爵さんたちに連絡をお願いします」

「わかったよ」

基本、旧辺境伯についていた貴族たちはエミリーが、新しく入ってきたボク達の地元の貴族たちは義兄が連絡の役割を担っています。担当を分けて分業ですね。

アレンさんはエミリーの補佐で、セバスさんは義兄の補佐、ニキータさんは辺境伯の都市の運営と経理管理、という分業です。

大まかな指示を出せば、あとは任せることもできます。まあボクはボクで仕事があるのですが。

ひとまずは、貴族に配る大量の招待状を作るべく、ボクはペンを動かすのでした。

辺境伯のお仕事は事務作業だけではありません。

この世界、貴族こそ強くないといけないので鍛錬は欠かせなかったりします。

そして、辺境伯になったので、辺境伯に伝わる剣技を教えてもらえることになりました。

と言っても秘伝書みたいな本を読めるだけなんですけどね。引きこもりのエミリーは剣なんて触ったこともないらしいですし、使える人はみんな戦死しましたし。

そういった戦死した時用の秘伝書があると聞いて、早速読ませてもらいました。

内容は、そう多くはないし、抽象的な言い回しが多いし、剣の技自体は平凡すぎるものばかりでしたが、一つすさまじく役に立つものがありました。

身体強化です。前世的に言えば界〇拳みたいな技ですね。

あの辺境伯のおじさんもおそらく使っていたのでしょう。ボクの両手の一撃を片手で受け止めていましたからね。

原理はそう難しくなく、空気中のマナを吸収し体内にめぐらせるという、魔法を使う前段階とそう違わないやり方でした。なので、習得自体は結構簡単にできたのですが……

「結構難しいですね、これ……」

集中が乱れるとマナが乱れ効果が下がるので、これを使いながら戦うのは慣れがかなり必要そうです。ですが慣れれば非常に有効な技だと思います。

身体能力をマナに応じていくらでも上昇させられます。あまり高めすぎると体が負担に耐え切れなさそうですが、効果量の調整自体は難しくありません。

感覚はつかめたので、秘伝書を仕舞って練習場へ練習のため素振りをしに行くと、アルゥちゃんが居ました。

アルゥちゃんも素振りをしています。片手剣を右手に持つだけというちょっと変わったスタイルです。片手剣ならもう片手は盾にするのが定番に思いますし、空いた手は戦いに使いようがなさそうな気がしますが……

「アルゥちゃん頑張ってるね」

「アーシェちゃんこんにちは。今から?」

「そそ、良ければ試合する?」

「やるやる」

ノリノリで応じるアルゥちゃん。

試合をすることになりましたので早速準備です。ボクの方は、この痴女服が防御力バッチリなので、着替える必要もなく武器だけです。アルゥちゃんも普段とそう変わらない服ですが、特に着替えないようです。戦闘用に工夫がしてあるのでしょう。

練習場の隅に置いてある木剣から大き目のモノをを持って早速アルゥちゃんと相対しながら構えます。

ボクの方は大きめの両手剣、アルゥちゃんの方は素振りをしていた時と同じ普通の片手剣です。

やはり盾がなく、左手の使い方がわかりませんが、ひとまず様子見で攻めてみましょう。

「いきますっ!!　てりゃあああ!!」

「ぐっ!!」

勢いよく袈裟懸けで振り下ろしたボクの一撃をアルゥちゃんは受け止めます。どうやら流そうとしたみたいですが、ボクの一撃が重すぎたようで受け止める形になってしまっていました。

そのままボクは攻め続けずに、一度引きます。
新しい技のおかげもあり、全力の一撃を叩きこめばアルゥちゃんの防御は容易に崩せそうです。ですがそれでは練習として不適切ですし、次は身体強化を落として切りかかります。

「もう一回!!」
「くうぅぅぅぅ!!」

ぬるり、という感触とともに剣が逸らされます。
探りの一撃なので、態勢もあまり崩れておらずすぐにこちらも迎撃が可能です。
振り下ろした剣を戻そうとした瞬間……

「せりゃっ!!」
「おっと」

アルゥちゃんは左手の拳を繰り出してきました。
剣を切り返すより圧倒的に早い一撃です。

偶然反応出来て、左手を剣から手放して掌で受け止めましたが、戦場でこんな奇襲を受けたら対応できるかわかりません。

「えいっ!!」

「まだまだっ!!」

そのまま前蹴りまでしてきたアルゥちゃん。蹴りを足で防ぎつつ、右手の剣を力任せに振ると、アルゥちゃんは躱しながら間合いを開けました。

「これで最後っ!!!」

「あっ!!」

もう一度、袈裟斬りを仕掛けます。今度は全力に近い一撃で下から、アルゥちゃんの受け流しは上手くいかず、片手剣を模した木剣は容易に砕けました。

「アーシェちゃんやっぱり強いね」

「アルゥちゃんも格闘技なんて使うとは思わなかったですよ」
「うちの技だからね」

アルゥちゃんが胸を張る。その胸は豊満だった。

「でもすごいパワーだし、どうやって鍛えているか教えてほしいんだけど」
「一つは辺境伯の剣技にあったパワーアップの技術を使っているのもありますが、素の力の強さはトレーニングしてるからだと思います」
「どんなトレーニング？」
「こういうのですね」

木刀を置くと、腕立て伏せを始めます。
こういう基本的なトレーニングって、この時代だと全く誰もしてないんですよね。筋力トレーニングという発想自体がないのかもしれません。

「そのよくわからない動きでパワーがつくの？」
「つきますよ。なれるとこんな感じです」

そのまま逆立ちして、腕立て伏せを始めます。
肉食べて、筋トレすると前世よりも圧倒的に筋力の伸びが高いんですよね。
こんな曲芸じみたこともすぐできるようになりました。

「すごいね……」
「よろしければトレーニング、一緒にやりますか？　基本お義兄さまとも一緒ですが」
「時間が合えばぜひ」

こうして新技も覚えつつ、ボクもパワーアップを図り続けるのでした。

7　辺境伯就任式準備

辺境伯就任のお披露目も兼ねた就任式。

その開催までがまず大変です。

ひとまず各地に散らばっていた辺境伯軍の捕虜を全員かき集めましたが、その時点から大変ででした。その数７００以上です。予想よりもかなり生き残っていたようです。

亡くなった数が多ければ多いほど領地には打撃なので、残っていてくれて助かった部分は大きいですが、返還の手続きの手間は増えるわけです。ひとまずどこの村で何人捕まえたか、を計上して記録し、次にその人たちがどこの出身かを記録します。

辺境伯軍は混成軍でしたから、捕虜の出身地もバラバラです。それぞれの村同士が直接交渉していたら煩雑でみんなパンクしてしまいます。なので、辺境伯で捕虜を全員引き取った上で出身地に返し、身代金は辺境伯が回収して捕まえた側に支払うことになりました。

人数も多いですしかなりの量にはなりますが、そこまで支払いには懸念はありません。代金用に、うちの義父から古い穀物を借りていますし、町の方からも就任に合わせてお祝いがかなり集まっています。そういったものをやりくりすればひとまず支払え

る予定です。

また、いくつかの乗っ取った男爵領の身代金は貴族位自体を買い取った対価としてチャラにしてもらったりしています。一番大きいのがうちの義父のところで捕らえた分１５０人弱です。これを辺境伯位の対価の一部としているのでこれも支払う必要がないという形で処理しています。そう言った支払わなくていいものを含め、実質的な支払いは半分強、４００人分ぐらいになります。

後は徴収側も色々考えています。具体的には物納ではなく労力で支払う形も考えている感じですね。負けた男爵領の方ではそう余裕もないところも多そうですので、労役という形で支払ってもらう方法です。ひとまずライン村まで続く街道は２本整備する予定だったりします。最短距離の道と、少し遠回りの道です。この２本を通せば、大体の村が辺境伯の首都マーチまでのアクセスが格段に良くなるでしょう。

いままでは敵対的な関係でしたから、道なんて通したら即進撃路になってしまうのでそうそう作れませんでしたが、今後はお仲間ですから作るのに懸念はないわけです。さらに、ライン村の奥は魔の森と大洋しかなく、奥から敵が攻めてくる、ということもありません。魔の森からは魔獣が出てくることはありますが、あいつらは餌を求めてるだけですから街道なんて使いませんからね。

実質的に辺境伯領の安全地帯になったので、整備をしない手はありません。どんどん

開発してどんどん発展させていきたいわけで、その初期投資の部分を身代金代わりの労働力でやろうという話です。

まあ、そう言った皮算用も結局地道な事務作業を終わらせないといけないのがつらいところですね。全く人手が足りていないので、結局ボクまで記録を取る作業に加わっています。捕虜から帰ってきた人に官僚系の人もいるようですが、さすがに捕虜に捕虜集計の記録の仕事やらせるわけにもいかないので……

地道な事務作業が苦手なボクはひーひー言いながら手伝い、どうにかこうにか全員分の記録を取りました。

記録を取れば、基本的に地元まで帰っていいことになっています。町に住んでいる人たちは当然家に帰りましたし、家族が待っている人たちは慌てて地元に戻っていきました。ですが、大半の人は就任式まで待って帰る予定のようです。来賓でどの村の人達も来る予定ですし、残っていれば御馳走食べられますからね。

城には兵士が駐留するための部屋も、貴族用の客間もそれなりの数があります。なので長期間滞在することも可能です。

この時期滞在するとなれば就任式の手伝いに駆り出されることになりますが、それでもかまわないならまあ、問題ないでしょう。

捕虜関連の問題も解決の目処が立ちましたし、就任式の準備が進みます。

お祝いですから大量の食糧が振舞われますが、これは町の商人から安く買いました。先の戦いでの祝勝記念用に仕入れていたものらしいですが、大敗北により売る先がなくなった食料や高級品です。それをニキータさんが目ざとく見つけて原価ギリギリで買いたたいてきたものです。おいておけば腐るだけのものも多かったですから損切としてしょうがないと商人たちも考えたのでしょう。

ひとまず安酒と配るパンには困らないぐらいの量が仕入れられました。

貴族たちも続々と首都に集まってきます。

招待状が届いているかどうかわからないぐらいの早さで来た貴族もちらほらいました。

そういう貴族は、大体3パターンに分かれます。

1つは捕虜に早く会いたいパターンです。多くの捕虜が取られているところ、後継ぎや多くの親族が捕虜に取られているところ、単に捕虜が心配で早く来てしまったところなど、詳しい理由は様々でした。さっさと捕虜に会わせて、帰ってもいいし、就任式までいてもいいしと伝えています。捕虜の皆さんが元気なのを確認するとそれで安心するのか、皆就任式まで滞在すると伝えてきました。

1つはボクに早く知り合いたいパターンです。

まあいきなり出てきて辺境伯の城を占拠した出自不明の女ですからね。そういう人たちは大体血気盛んなので、「辺境伯様の実力を是非見せていただきたい」とか言い始めて試合になります。なので叩きのめすところからスタートです。貴族の上に立つ貴族は強くなければならないという発想が前提としてあるようです。野性的すぎてヤバいですね。

幸い苦戦するほどの腕を持つ相手はいませんでした。辺境伯の身体強化が強いですからね。一撃で木剣をへし折ってやれば皆負けを認めてくれました。

ただ、ボクより弱いといっても、男爵ごとに技術が違って面白いのは間違いありませんでした。それぞれの剣術の技術を集めて、剣術道場とか開けたら面白いのにな、と思っていたりします。今度新しい政策として提案してみましょうか。

貴族たちの交流としては剣術の試合以外にも宴会をして親睦を深めています。

貴族の人たちが集まり始めてから、3日に1回以上のペースでやってますから、なかなかの頻度です。

ちなみにボクは初回で飲んでトラブルを起こしたせいで2回目以降はお酒禁止になりました。お酒、嫌いじゃないのですが、あまり強くないので、少し調子に乗って飲む

と直ぐ記憶が飛ぶんです。今回も記憶が飛んだあとは当然覚えていないのですが、参加者に力比べを挑んで、3分の1ぐらいそのまま伸してしまったようです。そんな大暴れの結果、お酒禁止令となった次第です。

ちなみに宴会の話題は下世話なコイバナもありますが、陳情的な話も少なくありません。特に、適当にだれでも参加可能としたせいで、貴族だけでなく一般の人や商人の人たちも集まり始めてからその傾向が顕著でした。その場で決めるのはしませんが、耳寄りな情報も集まってきています。

まず、逃げたキリル子爵ユーノの話が圧倒的に多いです。軍を用意して怪しい動きをしているとか、そう言う系の話ですね。この前の戦の時、キリル子爵とその取り巻きの男爵たちは、一切兵を出していません。彼らは辺境伯北方、隣接する貴族たちがちょっかいを出してこないようにという備えのために残されていた名目があります。ただ、この前の戦に関しては、ボクが偽皇女で討伐するべきという話を持ってきたのもキリル子爵だったらしいですし、自分で煽って自分はその軍役から逃げたわけですから、参加している貴族たちからの彼らの評価は最悪です。その上責任も取らず逃げたわけですからね。

ひとまずは隣接する男爵たちには優先的に捕虜を返して、さらに馬を何頭か渡して警戒してもらっています。馬がいれば偵察にも何かがあったときの伝令にも使えますか

らね。キリル子爵はそのうち討伐予定ですが、戦争が終わったばかりの今は手を出したくないところです。

あとは今回新しく辺境伯傘下に加わった村々の商売に関する話が主に商人の方から多いです。街道を通す予定があるという話をすると、ある商人さんがライン村のあたりに港を作ってはどうかという話を持ち掛けてきました。ライン村は海にも近いため、作れるなら作ってもいいかなと思います。提案してきた商人さんを記憶し、後日呼び出して見積もりと計画書を作らせましょう。

最後のパターンは、一番厄介な奴です。揉め事ですね。褒賞に渡す予定だったある男爵の後継ぎ問題です。

亡くなった男爵に娘がいたからそちらを後継者としてくれと突然ねじ込んできた話です。正直困ったことになりました。

この娘というのはあまり信用できません。そもそもそういう後継ぎがいたなら最初から後継ぎがいると連絡をするべきだったのです。にもかかわらず、遠縁の男性しかいないから嫁入りの形での男爵を送ってくれと送ってきたのは相手の方でした。今更娘がいたからやっぱりなし、というのは到底受け入れられる話ではありません。

ただ、かといってこのまま正論で推し進めてもいいことはないのも確かです。無理や

り引き継ぐのを強行しても現地の反発がすごいでしょうし……

「そんな感じなのですがどうしましょうか」

「そうねぇ……」

そんな面倒な男爵の地位を引き継ぐ予定だったルドン男爵令嬢フィオナさんとひとまず打ち合わせです。

この人、両刀なんですよね多分。男性と結婚するのにもためらいはなかったみたいですし。戦の間は女性ばっかり食べてましたが。

「その娘という方には会えるかしら?」

「今も来てるので会えますよ」

「では二人きりで『お話』したいから部屋を一つ貸していただけれると助かるわ」

「相手がどういう人間だかわかりませんので気を付けてください」

「どうせお互い裸になるんですから、暗器も仕込めませんわ。ちゃんと隅々まで確認しますし」

どうやらベッドの上の肉体言語で解決するつもりらしい。まあそのあたりは本人が解決するなら手段についてあまり文句を言うつもりはないのですがが、そんなことを話しながらボクのことを視姦するのは止めてほしいのですが。立ち会ってるお義兄さまがすごい顔してるし、そのイラつきは最終的に夜のボクにぶつけられるんだぞ。

多分そこまで察してそういうことをしてきているんだろう。そういう所が食えない人なんですよね。

まあ本人がどうにかするといっているのだから報告はちゃんとするように言って丸投げしました。

後日のことになりますがフィオナさんは、無事、関係者を全員説得し、全員配偶者にして解決したとのことです。力技が過ぎる解決方法でした。

こんな感じで、大きなトラブルも起き、酒の減りがすごいことになりつつも、着々と就任式の準備は進むのであった。

8　辺境伯就任式

就任式は予定通り行われることになりました。

最初は、辺境伯位を禅譲する証として、辺境伯の家宝である剣を受け取り、ボクが辺境伯になったことを宣言する、という程度でした。

せいぜいそれの後に宴会を適当にやるぐらいでいいかなと思っていましたが、いつの間にかプログラムがどんどんてんこ盛りになっています。

まず、就任の儀式は、最初はお城の適当な会議室でやろうと思っていましたが、いつの間にか竜神教の教会で行われることになっていました。

竜神教とは、法と剣を司る神様を祀った宗教であり、そこそこメジャーな宗教ではあります。ボクが竜人であり、竜人の守護神でもありますから、ここが選ばれたのでしょう。ボク自身は別に信仰はしていません。村に教会がなかったし。

教会でやると、より多くの見物客が参加できることと、神から認められたという建前が使えるのが強いところですね。どれだけ司教さんに袖の下渡したのでしょうか。

何にしろまずは教会での正式な儀式です。

参加者は新辺境伯のボクと、前辺境伯のエミリー、あと司教さんとボクの付き添いとして義兄です。義兄とは結婚式はしていませんが、ちゃんと夫ということになっています。正式な手続きとかあるわけではないので、今日から夫婦と言えば夫婦なのです。

服装ですが、ボクはここ最近の普段着である痴女白ビキニです。これ、本気で正装なんですね。帝国の正気を疑います。

そしてエミリーも色は黒ですがデザインは同じ痴女ビキニ服です、竜姫騎士にあこがれていると聞いていましたが、もうちょっと羞恥心を持った方がいいと思います。

そして、司教さんはハイレグ黒レオタード服です。頭おかしいんじゃないですか？痴女と痴女と痴女が集まって姦しくなっちゃってるじゃないですか。あれもまた竜神教の正装だという話ですから、正気を疑います。竜神さまって、エロ親父なのではないかと疑いを持ってしまい調べましたが、どうやら外見は美人の女神様らしいです。つまり単に痴女女神だという話でした。終わってるな竜人!!

ちなみに義兄はブーメランパンツとマントという伝統的な衣装を断固として断り、今どきの礼服である普通の燕尾服に蝶ネクタイを着ています。義父のお下がりらしいです。ずるいですね。

ただ、竜神教は男女を差別せず変態にするとても公平な宗教だということはよくわかりました。

何にしろ就任式です。

これ自体は非常に簡素なものでした。というか簡素なものにしました。だって、２時間も３時間も話すの大変ですし、聞いてる方も多分寝ますよ。

ということで、エミリーが当初出してきた、ボクの演説２時間コースは却下し、簡単に終わらせるものにしました。

「辺境伯及び次期辺境伯が入場いたします」

痴女の司祭さんが厳かに告げた声が教会の聖堂に響きます。痴女の格好でも一切恥ずかしがらずに厳かに告げればそれっぽく見えるのは不思議です。

その声に合わせて、エミリーとボクがそれぞれ両方の脇から入場します。義兄はボクの後ろからついてきます。

そのまま司教さんの前で向かい合うと、エミリーが跪き、持っていた剣を横にして両手でボクの方に捧げます。

「現辺境伯より、大いなる姉にして次期辺境伯たるアーシェロット様へ。辺境伯領をより良いものとしていただくことを願い、辺境伯位をお譲りします。その証として、辺境

伯に伝わる宝剣をお受け取りください」

そう言いながら差し出された剣が辺境伯の家宝である剣です。

ボクはそれを受け取り、左手で鞘を、右手で柄をもって抜き放ちました。

柄が装飾された美しい宝剣は、その美しい刀身を銀色に輝かせています。

「アーシェロットは謹んで辺境伯位をお受けする。竜神と、前辺境伯エミリーと、皆さんに、辺境伯領をより良いものとし、領民たちを幸せにし、敵を打ち払うことを約束しよう」

そう宣言すると会場は歓声で湧きます。否定的な反応が怖かったのでサクラも仕込んでいましたが特に問題ないようです。母が最前列で歓声を上げていました。妊婦なんだしもう少しおとなしくしてほしいです。主に義父のために。心配そうにしてるじゃないですか。

そのまま宝剣をくるくるとまわしながら曲芸のように鞘にしまうと、義兄に渡しました。辺境伯位の象徴となった剣を渡すことで、義兄がボクの身内で信頼していることをアピールする効果があるそうです。

あとは、今後義兄がボクの代行として動く時のアピールにもなるようです。義兄の外見は筋肉が結構ついている以外は平凡ですから、辺境伯オーラが足りていないそうです。一方ボクはなんせ竜人で痴女な格好してますから、５００ｍ先でもわかるオーラをまとってるんだとか。なんか褒められている気がしません。なんにしろ、ボクは剣なんてなくてもわかりますが、義兄は外見だけだとわからないから宝剣を渡してアピールするっていうことですね。ここまでエミリーが考えたことです。ボクにはよくわかりませんがそう言っていたのでそうなのでしょう。

ボク個人としては、良い剣ではありますが、軽すぎて使いにくいので義兄に使ってもらおうと思って渡すことは確定していました。義兄の今の剣は義父からのお古でぼろいので、ちょうどいいと思います。

そのまま右手をエミリーに、左手を義兄に預けて、聖堂の中心を通ってボク達は退場します。結構あっけなく終わりました。

ちなみにこのシーンですが、画家さんが待機していたので後日絵になることが確定しています。何か注意した方がいいことはないかと聞かれたので、義兄の服をブーメランパンツマントにするようにだけは強くお願いしています。痴女と痴女と痴女の中で普通の正装は浮いちゃいますからね。妹の適切な配慮です。お前だけは逃がさんぞ、なん

てことは結構考えています。

さて、儀式が終わったら次はパレードです。

パレードですよ。ボクは全くそんな予定がなかったのに、いつの間にかそんな計画になっていました。

突貫工事で作られたらしい山車に乗って、町を一周グルっと回ります。

山車の動力は人力です。主にうちの村で捕虜になっていた人たちが押してくれています。重くてつらいでしょうし、ハレの日に働くのも大変そうですので自分で歩くと言ったのですが、皆さんやる気にあふれていて説得はできませんでした。

ゆっくりと動く山車。前後を固める馬に乗り、礼服を着た騎士たち。

ここで言う礼服は、女性はボクと同じ痴女ビキニ（アーマーですらない）ですし、男性はブーメランパンツマントです。

ヤバい変態集団が爆誕しています。

騎士役の人たち、基本今回の件で集まった貴族なんですけどね……　大丈夫？　恥をかかされたってあとで反乱起こされない？　まあ統一感はありますし、貴族は皆鍛えていますので、見せられるだけの肉体をしているのが幸いです。一応参加希望者にお願いしているので、あとから文句を言われる可能性も低いでしょう。うん。

ボクは山車の上で延々と群衆に手を振っています。
指をそろえて、肩の高さで手を振る、前世テレビで見た皇族の手の振り方です。
元気度で言えば腕を上げて腕ごと振るぐらいがちょうどいいですが、これが一番きれいに見えると思いますので、おとなしく手を振り続けます。
観客も大盛り上がりです。子供たちが義兄を指さして「なんであのお兄ちゃんだけ服を着ているの？」と言っていたのは傑作でした。変態の国で普通の格好をしていると狂人に思われるという典型ですね。ですが義兄は決してブーメランパンツマントにはなりませんでした。残念。

パレードが終わると、宴会が始まります。
町の人も参加できる形式の、いわゆる無礼講です。
適当に酒樽が各所に置かれ、適当にパンがそこかしこに積み上げられます。各自が適当に料理を持ち寄ったりしながら、あちらこちらで大騒ぎしています。
メインステージでは義父が、先ほど狩ってきた熊を捌いています。野蛮ですね。ですが周りは肉が食べられると大盛り上がりです。

「アーシェ、皮？ぎ手伝ってくれ」

「ボク、辺境伯様なんですけど!?」

そして義父に呼ばれてメインステージに上がります。

まあ、解体ならボクの方が絶対にうまいですからね。この皮、宴会代とかに充てるのでできるだけ綺麗に剥いで高く売りたいですし。

お腹側から心臓を一突きしているので、おなか側から切っていきます。

内臓を取り出して、胆のうは熊胆になるので縛って保管します。干すと高級薬の材料です。ほかの部位は洗って焼いて食べましょう。

心臓をエミリーちゃんに渡したら悲鳴を上げていました。

皮をはいで、肉を切り出していきます。適当な大きさに切って、鍋にぶち込んでいきます。既に野菜も入っていますので、ワイルドな熊汁が出来上がります。

そうそう肉が食べられないからでしょう。すさまじい人だかりになりました。

酒を飲んで、パンと肉を食べて、皆満足そうです。

ちなみにボクはお酒禁止令が出ているので、子供たちのコーナーで薄いレモン水しかもらえません。悲しい。

近い年代の人たちは皆酒を飲みに行っているので、子供たちとおとなしく遊んでいます。訂正します。全然おとなしくないです。走り回ってますし暴れまわってます。

まだ成人になっていないエミリーも同じコーナーにいましたが、すでに子供に埋もれてしまいました。かわいそうに。

ボクは藁のクッションに子供たちを投げる遊びをしています。大人気アトラクションですが、さすがにそろそろ体力的にきつい……とても辺境伯に対する扱いとは思いません。

さすがに体力が切れたので終了にして、ボクは藁のクッションに休憩のためうつ伏せに倒れました。そしてなぜかその上に乗ってくる子供たち。すごく、温いです……。

そのまま圧力と温さにボクは意識が遠のいていくのでした。

9　辺境伯の日常

辺境伯の領の政治は意外とスムーズに動き出しました。

「予算は……　案外足りていますね」

「アーシェ様は質素ですからね」

捕虜として捕まっていた、アランさんのところの人たちが戻ってきたので行政自体は特に目立った問題は起きていません。

就任式でバカ騒ぎしたことや、捕虜関係の問題で財政状況も火の車かと思いきや、意外と現状でもぎりぎり回っています。まあ辺境伯の費用が全然掛かっていませんからね。正直食費だけですし、食費だって大してかかりません。肉が食べたくなったら時々近くの森で肉を狩ってくるので、タダどころか毛皮代などでプラスですしね。

珍味とか興味ないし……　紅茶と砂糖は欲しくなりますが、現状では我慢です。あまり質素倹約すると経済が停滞してしまいますが、現状大規模な消費活動である戦争をした以上は、しばらく質素でいいでしょう。

「ということでセバスさん、道づくり、お願いします」
「万難を排して行います」
辺境伯首都のアーチの街からうちのライン村までの道の整備は、キリル子爵になったセバスさんが早速始めてくれました。予算は、魔の森辺境地域、ボクの村とかがある地域の税収があてられます。
辺境伯と主従関係になりましたから、それぞれの村には税を上納する義務が発生するようになったわけですが、それをガッツリ回収し始めると反発が出る可能性が懸念されました。なので、税を分かりやすく地元に還元したわけです。それが道の整備です。
魔の森辺境地域の税収をガッツリ全額道の整備につぎ込んでいるので、整備はかなり急ピッチで進んでいます。秋ごろには馬車が余裕ですれ違える程度の立派な道ができる予定です。
税収が本体に入ってこなくて困らないか、という点についてはあまり困らなかったりします。なんせ、今までの辺境伯の地域ではないので、今まで通りやれば新領地の税収なくても回るんですよ。魔の森辺境地域のトラブルについても、セバスさんが税収内で対応してくれる予定ですから、持ち出しは本当に0です。

まあ、一部家臣が離脱してますから、多少マイナスなわけですが、それもどうにかなるレベルみたいですし。

一方でメリットはいろいろあります。一つは辺境伯側の軍事的負担が軽くなったことです。今までの魔の森辺境地域と辺境伯との関係は交流はあるが悪い、といった状況だったので、警戒のための軍事的負担が重かったわけです。それが一気に軽くなりましたから、かなり楽になったと聞いています。軍役負担を大幅に減らして、その分少し租税を増やしましたが、全く反発が出ないレベルです。その純増した租税分だけでも大勝利です。

さらに、何かがあった場合に魔の森辺境地域からの援軍も期待できます。なんせ、軍役の約束もしてますから、命令すればそっちから兵士を持ってこれるわけです。動員すれば食料その他辺境伯側の負担も増えますから、早々連れては来れませんが、何かあったときに動員できるというメリットは非常に大きいです。

他にも、流通が活発化すれば辺境伯首都での税収が上がります。この辺りでの大規模な市は辺境伯首都にしかありませんから、余剰物資は全部ここに集まります。そして取引が起きれば都市の税収も増えるわけですし、商人たちも潤います。魔の森辺境地域では比較的単純な穀物なんかが余っていましたが、輸送が大変で、それぞれの村で安酒になっていました。それを辺境伯首都に持ってくれば、もっといいお酒に交換できます

し、他にもいろいろ購入できるでしょう。安価な穀物が入ってくる旧辺境伯領の人たちにも利益はあるでしょう。そういった交易・流通のためにも、道は重要なわけです。

西側である魔の森辺境地域はこんな感じで平和ですが、反対の東側地域は結構面倒な状況になっています。前キリル子爵が敵対姿勢を崩さないためです。

「前キリル子爵から返事はない？」

「何もありません。厚顔無恥に就任式に出てくると思っていましたが、当てが外れましたね」

この前の就任式の時、前キリル子爵やその周辺のいくつかの男爵は、本人も来なければ代理も送ってきませんでした。皆先の戦いで出兵していないところですね。捕虜もいないため送る必要性もなかったのでしょう。

一応キリル子爵には、子爵位自体ははく奪で男爵になるが、領土も削らないから戻ってこないかという妥協案は送っています。ですが、応じてくれる気配はまったくありません。

とはいえ、離反しているのは前キリル子爵と、その取り巻きの男爵７家です。キリル子爵管轄の男爵が２０家以上ありましたから、自分の実質的傘下であった家の半分も切り崩せていません。

このままだとじり貧でしょう。このまま反応がないなら、こちらもある程度準備が出来次第攻め込む予定ですし。

というか、さらに東側には公爵領が広がっていますし、そちらとマーチ辺境伯の仲はあまり良くないと聞いていますが大丈夫なんですかね。

前キリル子爵との境界地域については、アランさんとエミリーが地元の男爵たちと協力しながら監視網を作っています。現状は動きがないと聞いていますし、ひとまずは大丈夫でしょう。

他に始めたことは、剣術道場もあったりします。

この世界、剣術一強で、剣が使えると無茶苦茶強いというなんかよくわからない法則があったりします。実際槍のほうが射程あるし、障害物が多いとかなければ強いと思うのですが実際にやってみると剣に一瞬にして切り落とされるので弱かったりします。

貴族騎兵に槍衾が全然効果的じゃないんですよね。

そんな剣術一強の世界で、各地の貴族が技術を相伝していたりします。

剣の技術は結構機密情報です。あえて全部使わずに見せないとかいう選択肢が命の取り合いの場ですら考えられるレベルの機密情報です。それを共有しようなんて言ってもそうそう応じてもらえないでしょう。なので餌として、辺境伯の剣の技術を教えることにしました。

ボクとしては、義父から教えてもらった剣術の方が使い勝手が良かったりします。力技の地の剣、受けの水の剣、躱す風の剣、魔力を利用する火の剣の4つが組み合わさり、非常に複雑ですが万能な剣術です。まあ、まだ未熟ものなので全部使いこなせないんですが……　義父のレベルは遠いです。

これは義父からの受取ものですから、義父の許可なく第三者に教えることはできません。

一方で辺境伯の剣技は正直棚ぼたでもらったものなので、別に交渉材料に使うのに抵抗感がないんですよね。実際身体強化は素晴らしいですが、それ以外は普通ですし。

外聞的にも辺境伯の剣技が教えてもらえるといわれた方が人気が出ますからね。代わりに自分の剣術を教えるか、お金をもらうことにしています。

そんな剣術道場を始めたら、それなりの人が集まりました。

まずは首都周辺の貴族関係者ですね。辺境伯はやっぱり強かったので、技術を教えてもらう方が価値が高いと判断したようです。

また、魔の森辺境地域の貴族関係者の人たちもそこそこ来ました。もっともこの人たちの目的は、義父の剣術の方だったようです。義父、無茶苦茶強いですからね……　家の中では親バカで母の尻に敷かれていますが。こちらは教えられないといったのですが、辺境伯の剣技で我慢してくれました。

最後に町に住んでいる裕福な家の子供たちです。商人の関係者ですね。剣術を覚えて手柄を立てれば貴族になれるかもしれませんし、普段の物品輸送でも自身に武力があれば護衛費を節約したり、荷物を奪われるのを阻止できるでしょう。高めの水準で授業料設定したのですが、それでもそれなりに集まるあたり、需要が高いのでしょう。

ひとまず辺境伯の秘伝書を義兄に預け、ボクと義兄とアティちゃんが教える体制になっています。アティちゃんは初心者向きで教える係ですね。商家出身の人たちに基礎トレーニングとかをやっています。

「うおおおおお!!」
「ぐっ、力が、暴走する!!」
「ぐわあああああ!!!」

今、暑苦しく叫んでいるのは貴族の皆さんです。自分のところの剣術を治めているレ

ベルになれば、辺境伯の身体強化も使えるだろうと思って教えたのですが、なかなかうまくいきません。

すぐに平静の状態で使えるようになっていますから、全くできないわけではないのですが、動くとその状態を維持できず、すぐに暴走します。暴走して爆発するので、慣れるまで屋内での使用は禁止になりました。

クレーターの中で倒れ伏すみなさんに、駆け寄るのは母です。この前の就任式以降、母はこちらにとどまっています。義父はもう村に帰ったのに、可愛そう……

薬と回復魔法がつかえる母は、怪我が絶えない剣術道場で非常に役に立っています。

美人で優しい母は、道場のアイドルです。通っている子供たちの初恋を6割奪っていきます。経産婦なのに。

大人もべた惚れですね。といってもちゃんとわかっているので、皆お姫様に仕える騎士みたいなムーブしかしません。段差などで手を取るレベルが許される接触の最高ランクです。不届き者が居たら義父が黙っていませんし、ボクも権力と実力ですりつぶして生まれてきたことを後悔させるに決まっているので、変な気は起こさないでほしいと思っています。

治療された人たちが騎士の礼を取ると再度練習を始めました。母を一人で道場に出せないな、と思いました。

ちなみに4割はアティちゃんです。子供向けに教えているからね……　そしてボクは全然、全くモテません。なぜだ。若くておっぱい大きくて美人なのに。

「なんでお母様ばかりモテるんでしょうね」
「うふふ」

母に愚痴ったら母は意味深な笑いを浮かべました。
いや別にモテたいわけでもないんですけどね。男衆に囲まれても楽しくないし。ただ、人気投票的なもので負けてる気持ちになって悔しいだけです。
母の反応を疑問に思っていると、肩を叩かれます。義兄が、いつの間にか後ろにいました。

「アーシェ？　他の男に目移りするなんて、いけない子だね」
「ちょ、ちょっとまってお義兄さま。話せばわかるから!!」
「夜が楽しみだね」

明日は起き上がれなくなることが確定した瞬間でした。

母も義兄に気づいていたら教えてくれればいいのに。いや、気づいていたからあの意味深な笑いだったのでしょう。

閑話休題、剣術道場によって、腕の立つ剣士がそれなりに生まれ始めています。技術の問題もありますが、単純に鍛えているので身体能力が上がってそれだけでも強くなるんですよね。

ボクの方も、色々な技術を教えてもらって、自分の剣術の精度が上がっている気がします。力任せ気味なので、抑えるよりもそれをうまく使える技術をいくつか教えてもらったので助かっています。

そんな感じで、辺境伯になった後の日常は、意外と順調に流れていくのでした。

10　戦の風が吹き始める

順調な日々を送りながら、戦争の準備をするのは少し気が重いですが手は抜けません。前キリル子爵の討伐は、秋の収穫期の後に行われる予定です。この時期が一番食糧の余剰があるので、兵の食糧調達が楽なんですよね。

進撃路も決め、途中の村には備蓄庫を作ってもらっています。また、泊る場所としてテントなんかも準備していますから、準備は着々と進んでいます。あとは収穫期に上納される税の麦をそこに入れてもらえば準備万端です。

こういった動きは隠しもせずに派手に行っています。前キリル子爵に降伏してほしいんですよね。戦争は人が死にますから、出来るだけやりたくないですし、男爵領に空きができても埋める人材を用意することが大変なのです。この前の戦争ですでに余剰の良さそうな人員はすべて男爵か子爵に就けてしまっていますから、これ以上はつらいところです。

さすがに子爵には戻せませんが、それ以外は何も変えないという破格の条件を出しているにもかかわらず、向こうは何も返答してきません。これ以上こちらも譲歩する余地がないんだけど……

「ユーノは辺境伯位が欲しかったのかもしれないな」
「引き継げるんですか？」
「カーク子爵もキリル子爵も、辺境伯の分家だからぎりぎりできなくはない」

でもそれなら、ボク達が来た時に逃げちゃダメだったでしょう。
エミリーが辺境伯に身体能力的に不適格だったのは明らかですし、あそこで踏ん張れば可能性はあったと思います。

「では何で逃げたのでしょう？」
「キリル子爵の軍は丸ごと残っていたから、それを率いて反撃すればどうにかなると考えたのかもしれないな」
「戦略的センスなさすぎでしょう」

兵力的には正しい判断だったかもしれませんが、それにより周りにどう思われるかわかっていないのが致命的です。貴族は武力で食っている商売ですから、戦わずに逃げたといわれたときのデメリットが重すぎるんです。

それが今の結果です。

辺境伯傘下４９家中、前キリル子爵に付いてきたのは前キリル子爵含めて８家だけでした。辺境伯に勝ったボクと、戦わずに逃げた前キリル子爵のどちらに頼りがいがあるかと言われれば、そうなるでしょう。

更に現状、調略が進んでおり、近隣の男爵の説得により、前キリル子爵傘下の男爵家のうち２家がすでにこちらに付くことを約束しています。男爵家に関しては現状維持ですからね。多少労役などでペナルティを課しますがその程度ですから、裏切りが加速するのは間違いありません。さらに２家ほど揺らいでいますし。

こういう裏切った家は信用できない、という考えもあるでしょう。確かに信用はできませんが、男爵家に求めるのは村の適切な統治と主従関係に基づく義務の履行だけで、それ以上何か任せたりしませんので特に信用できなくても問題なかったりします。少数の家で反乱とかしてもたかが知れていますからね。

そんなこんなでどんどん追い込まれている前キリル子爵ですが、それでも強硬姿勢を崩しません。どうやら隣接するノルン公爵に助けを求めているという話も流れてきますが、動くとは思えないんですよね……

動いたとして、ノルン公爵が得られるのは男爵領いくつかですし、辺境伯と全面戦争ですから、労力に比して得られるものがなさすぎると思います。

しかし、戦うつもりなら逃げることはできません。この時は、ボクも消化試合の一種だろうと油断していました。

◇　◆　◇　◆　◇

「ノルン公爵軍が前キリル子爵領に侵入!!　占領地を拡大していると連絡が来ました!!」

そんな連絡が来たのは、こちらの出撃準備が整いつつあった時期でした。既に動員もかなり終わっており、すでにカーク子爵代行としてアルゥちゃんが先遣隊を率いて現地に到着している頃のことでした。

どういう手練手管を使ったかわかりませんが、前キリル子爵は上手く公爵を味方に付けたようです。おそらく公爵軍も収獲により兵糧の確保ができたので進軍を始めたのでしょう。

「早馬でカーク子爵代行に連絡。防衛線まで撤退してください。こちらに付く予定の４男爵家の人たちは受け入れるように伝えて」

前キリル子爵の支配地域とこちらの支配地域の境界には野戦築城による陣地が張り巡らされています。空堀と土塁だけですが、その防御力は前の戦いで示された通りです。

前の戦いでその恐ろしさを感じている人は捕虜の中にもたくさんいましたから、マネして作ったと聞いています。発想はまだしも、作るのには人手以上のものは不要ですからね。

こちらに付く予定のところは、こちらの本隊が到着すれば前キリル子爵を裏切る予定でしたが、それまでは裏切りがばれないようにそういった防御施設は作っていませんでした。なので、このままだと数に押されて簡単に負けてしまうでしょう。

一応万が一があったら逃げて来ても構わないということは伝えていますから、逃げてくる可能性があります。なので逃げてきた受け入れをするように連絡をしました。

「本隊の出発を早めますか？」

「いえ、先遣隊をもう一つ出しますが、ボク達は予定通り出発しましょう」

既に旧辺境伯領の軍は集まっており、あとは魔の森辺境地域の軍を待っている状況で

す。

なので、旧辺境伯領の軍を先遣隊として出して、魔の森辺境地域の軍はボクが待つことにします。みんな行ってしまうと、あとからついた人たちがどうしていいかわからずに帰ってしまう可能性もありますから。

「カーク子爵代行と、第二先遣隊には、連絡を密にするように伝えてください。馬は主にそちらに割くようにと」

「騎兵が不足しませんか？」

「防御陣地での戦いに騎兵の出番はないですよ」

平原でのガチの戦いなら騎兵の数は重要ですが、防衛線では騎兵はあまり使わないでしょう。状況が急変した時に情報が入らないほうが今の状況ではヤバいので、伝令を重視します。

第二先遣隊は義兄に任せます。

アランさんにお任せすることも考えましたが、アランさんとアルゥちゃんは祖父孫の関係で親族なので、さすがに役割の偏りが大きすぎます。

義兄なら卒なくまとめてくれるでしょう。

「で、公爵について全然情報がないんだけどエミリーは何か知ってる？」
「はい、ある程度は……　現公爵様とはお付き合いがありましたし」
「どんな人？」

現状、公爵とは全く交流がありません。
なんせ主要な街道がキリル子爵領のど真ん中を通っていますから、碌な連絡ができませんでした。
海路で交流を図ることも考えましたが、マーチの街の港は非常に小さい漁港ですし、ライン村に今作っている港はまだまだ完成まで程遠い状況です。
なので情報がなかったので、うちで一番博識なエミリーに聞きましたが、どうやら知人のようです。もう少し早く知っていればそれを伝手に連絡を取っていたのですが、しょうがないです。

「優しい方でしたよ。私もお兄様なんて呼んで慕っていましたし。あとはちょっと思い込みが激しくて、自分は勇者なんだ、なんて言っていたのが記憶にありますね」
「ふむ……」

何とも言い難い人物評です。これだけではどうして攻めてきたかがわかりません。
実質的に支配地域ではないにしても、形式的には辺境伯の傘下なわけですから、何かしら宣戦文が届くでしょう。全軍集結を待ちながら、そう言った連絡が来るのを待ちますか。

残念ながら全軍が集結したタイミングまででは、公爵側からの連絡はありませんでした。降伏予定だった男爵の人たちはすでに逃げてきて保護できていて、現状は陣地で小競り合いが始まっているようです。
遠距離攻撃で公爵側の嫌がらせをしていますから、状況はこちらに有利だという連絡が来ています。
そろそろ第二先遣隊も到着するでしょうからこちらの戦線が崩壊するということもなさそうです。

調べた限り、公爵領の人口から考えられる全兵力の数は１万程度と考えられます。
ちなみに辺境伯領の全兵力は２０００程度、魔の森の方の兵力は１０００程度です。
もちろん根こそぎ兵士を出せば、という仮定の数字であり、現地の治安のためや、他

の敵対的勢力への備えのためにかなりの数を残す必要があります。前回で全兵力の半分もつぎ込んだ辺境伯は頭がおかしいレベルでしょう。

現在の辺境伯領は、魔の森と海、あと公爵領にしか接していません。魔の森は常に魔物が居ますからある程度の兵力を置く必要がありますが、侵略などしてくるわけではないのでそう多くの兵を取られるわけでもなく、ほとんどの兵力を公爵方面に向けられます。

一方公爵領は、いくつかの他の公爵の領に接していますから、早々兵力を出せるわけがありません。広いですから治安維持の兵力だってそれなりに必要だと思います。なので、辺境伯方面の全兵力は２０００程度と考えられ、辺境伯と軍事力にそこまで差があるわけではありません。

推定で出てくるのは５００程度ではないかと考えられています。

こちらの軍の編成は、最初の先遣隊は、アルゥちゃんと剣術道場のうち希望者をまとめ、アルゥちゃんの傘下の兵士と前線に近い貴族たちの現地集合でおよそ１００弱。

第二先遣隊は辺境伯領内の貴族連合軍で、数は絞りましたからおよそ２００強。

本隊は新辺境伯領内である、魔の森辺境地域の軍２００弱です。

総勢５００弱で、子爵たちには数でも圧倒的に有利でしたが、公爵軍の数次第では追加派兵も必要でしょう。

もっとも防御に専念すれば推定の２倍の兵力が居ても、どうにかなりそうです。
ひとまず現地に着いてから詳細な戦略は考えましょう。
ボクは、本隊を率いて前線へと向かうのでした。

第三章　お兄様公爵とうちのお義兄さま

1　前線

ボクが率いる本隊は、先の戦いで活躍した投石部隊や狩人出身の弓兵部隊がメインの構成です。遠距離攻撃は得意だが、正面から当たればあまり強くないのがほとんどです。

防衛線向けの構成にしたのは、切り込みたいならば先遣隊がいるからです。剣術道場出身者がメインの先遣隊は近接戦闘では圧倒的な強さを誇ると思いますし。

本隊の総指揮官はボクで、副官はエミリーにお願いしています。

魔の森辺境地域からまとめてくれていたのはうちの義父です。一番奥の村なので、とりまとめしやすかったようですし、強いので地域からの信頼も厚いんですよね。

義父は普通にボクより強いので、いるといろいろ安心できます。一騎討があったら今度は義父に丸投げする予定ですので、それまで大事にいたわっておくことにします。

「そう言えばアーシェ様、今回服はいかがですか？」

「わるくないですね」

今までの謎のビキニアーマー装甲抜き服は、最近胸やらお尻やらがきつくなり始めたので、新しい服を仕立て直しました。

伝統の竜姫騎士衣装は、いくつかパターンがあるようで、エミリーのアドバイスの元、デザインを決めました。

首元から右わきにかけて謎のスリットが入ったノースリーブへそ出しの白い上着に、肘のあたりで固定する付け袖、股下０ｃｍのマイクロミニスカートという、やはり痴女ってる服ですが、まあビキニよりはましだと信じましょう。座っているだけでパンツ見えていますが気にしないことにします。

「アーシェ様、今回の戦い、勝算はどの程度あるのでしょうか？」

「うーん、現地に行かなきゃわからないことはいっぱいあるけど、ひとまず負けることはないと思いますよ」

ボクだけでしたら馬で移動していましたが、エミリーがいるので今回は馬車移動です。これはこれで結構快適ですね。道が整備されている場所しか使えない欠点はありますが、今回の前線近くまでは食糧備蓄などと並行で道を整備していました。なので、

馬車移動でもそこまで困りません。

そんな移動中、エミリーがボクに戦争の行方を聞いてきました。なので負けることはないという答えを返します。

「？　どうしてですか？」

「仮に敵が同数ならば、防御陣地に頼ったこちらが圧倒的に有利だから負けるわけがないわけです」

野戦築城と遠距離攻撃の組み合わせは非常に凶悪です。

これを破るには、数で押して空堀を埋め、障害物を壊した後に強い人物を突入させて暴れる、ぐらいしかありません。辺境伯軍は前回その攻略法をしようとしましたが、突入した辺境伯がボクに負けたためボロボロになりました。

つまりハイリスクすぎる攻略法です。

もう一つは防衛陣地を迂回する方法ですが、そう簡単にはいきません。道から外れれば移動は圧倒的に困難になりますし、補給も難しくなります。言うほど簡単ではないわけです。

そうすると、現状の防衛陣地を公爵軍から守るには、同数でも過大です。倍ぐらいま

では防ぎきれるでしょう。

「しかし、公爵の全兵力は辺境伯の3倍以上です、数で押されたら難しいのでは？」

「そりゃこっちは５００ですから、３０００も４０００もつれてこられたらかなり厳しいでしょうね。ですけど、それはありえないんです」

「そうなんですか？」

「いくつもの領が隣にある公爵は、一つの方面で全力は出せません。なので公爵軍の大多数をここで投入するとは考えにくいです。更に補給の問題があります」

「ご飯ですか」

「そうです。今回５００の兵を維持するだけでもそれなりに大変だったのはエミリーもわかっていると思います。もちろん公爵側は略奪などもしているでしょうが、現状公爵軍が占領しているのは小さな村ばかりです。ですから、略奪してもそこまでの兵の維持ができません。５００程度ならそこまで維持に苦労しないでしょうが、これが３０００，４０００となればすぐに補給不足で動けなくなりますよ」

数は偉大ですが、戦場に兵数を投げ込み過ぎればすぐに補給がパンクします。

戦場に合った適切な数がありますから、それを大幅に超える出兵は何もいいことはな

いでしょう。

仮にそれだけの数を送ってくれれば、徹底的に時間稼ぎをする予定です。それだけで兵は飢えて動けなくなるでしょう。人は3日も食べなければ動けなくなる生き物ですから。

「だから負けることはないんです。あとはいかにこの戦いを終わらせるか、ですが、それは相手の目標次第ですね」

負けないことは大切です。ですが勝つためにはさらに一歩踏み込まないといけません。

だからこそ、ボクは前線に赴く必要があります。

行軍は予定通り進みました。食料の備蓄に道の整備、簡易宿泊施設の拡張で、それなりに快適な行軍ができています。

予定通り、出発から3日後、ボク達は前線へと到着したのでした。

◇　◆　◇　◆　◇

「ご到着お疲れ様です、マーチ辺境伯殿下」
「そんなに堅苦しくなくていいですよ、セバスさん。戦況はどんな感じですか？」
「公爵軍の先遣隊が何度か威力偵察をしてくるぐらいですね。本隊はまだここにたどり着いていません。ハラスメント攻撃も仕掛けていますから。早くともたどり着くのは２日後ですね」

到着して早速、セバスさんから戦況を聞きます。
土塁の上に上ると、敵軍の駐屯地が見えます。数はざっと３００程度。あまり多くないですね。と言っても先遣隊ですから、本隊が来れば数は増えるでしょう。

「本隊はどれくらいの数が？」
「５００以上のようです。総勢１０００に行くかどうかぐらいですね」
「なるほど」

予想よりは多い数ですが、こちらの倍は越えないだろうという想定された範囲内には収まります。ひとまず慌てるような状況ではなさそうです。

「ちなみにハラスメント攻撃を仕掛けているのはどの部隊ですか？」
「占領された男爵たちが組織した義勇兵部隊ですね。地の利を生かしてそれなりに損害を出しているようです」
「卒がないですね」

　てっきり先遣隊をうまく使っているのかと思っていましたが、もっと上手い手を使っていました。誰が考えたのかはわかりませんが、占領されて逃げてきた男爵とその周辺の人たちを使って臨時の部隊を作り上げたようです。彼らも自分の故郷を攻められていますからそりゃ抵抗しますよね。
　ですが、特に地の利については圧倒的に分があるでしょう。それを活かした射撃や投石攻撃に、本隊の移動は目に見えるレベルで妨げられているようです。

「本隊の方への攻撃は継続するように伝えてください。無理はせず、損害は出さないようにと」
「お優しいことで」
「人が国を支えるんですから、少しでも多いほうがいいんですよ」

一時期敵対的だったわけですから、ネガティブな感情を抱く気持ちはわからなくもないですが、貢献してくれている以上、評価するべきです。
そして遅延行動自体はあくまで相手の消耗を増やすための手段でしかありませんから、無理をする話でもありません。辺境伯領を栄えさせるために人は多いほうがいいのです。

「しかし、この状況ならばあの先遣隊をどうにかしておきたいですね」
「どうしますか？　いままで挑発は散々したのですが全く乗ってくれないので、防御陣地を使った消耗戦は難しそうですが……」
「自制の利くぐらいには最低でも優秀な部隊ですか。正面からは当たりたくないですね。アルゥちゃん呼んでもらえます」
「わかりました」

陣地を使った防御線は安定的に有利をとれますが、相手が攻めてこないと使えないという欠点があります。数がこちらの倍で押されると、万が一があると大変ですし、合流前に削れるものは削りたいところです。

「アーシェちゃん、お呼びかな？」
「アルゥちゃん、待ってました。今晩夜襲を仕掛けたいから、抜剣隊貸して」
「了解。参加するのは抜剣隊だけ？」
「貴族で剣の腕に自信がある人は声をかけるけど、どこまで参加するかはわからないかな。夕方に作戦会議するから、会議室までくるように伝えておいて」
「あいさ」

抜剣隊は剣術道場で修業をしていたメンバーで構成される部隊で、一定レベル以上の身体強化が使える、攻撃のエリートです。
現状２０人しかいませんが、こと奇襲や襲撃ならばこれほど強い部隊はないでしょう。消耗したくないのでできるだけ大事に使いますが。
目の前のあれをどうにかする算段は立てました。
あとは本隊到着後に備えて、ボクが連れてきたこちらの本隊の布陣を考えましょう。
やることはまだまだ終わりません。

2　夜襲

集まったのは抜剣隊２０人とアルゥちゃん、義兄と義父になりました。あとはボクの副官としてエミリーも一緒に聞いています。彼女は管理してもらうだけで作戦自体には参加しませんが。

今回の作戦上身体強化ができないと特に防衛線を飛び越えるのが難しいので、メンバーが限られるのはしょうがないでしょう。

身体強化技術、一応まだ秘伝の類なので、教えた人の数は多くないのです。

「今回の作戦は二段階に分けます。まず最初は夜襲です。ですが皆で行くと同士討ちの可能性がありますから、順々に一人ずつ行ってもらいます」

「わざわざ分けるのかい？」

義兄が不思議そうに首をかしげます。

数を集めてたたきつける、というのが基本ですから疑問なのはわかります。

「そうです。皆さん剣の腕はかなりですから、それでも可能だと思います。3人倒すか、1合でも受けられたら撤退してください」
「不完全燃焼になりそうだな」
「こんな前哨戦で怪我でもする方がつまらないですよ。本隊が来るのは早くて2日後なんですから」

辺境伯のところに残って鍛えていたクレイが愚痴を言いますのでたしなめます。

「ここのメンバーは、現状の辺境伯軍の最精鋭です。だからこそ、このような困難な作戦に参加してもらっていますし、だからこそ不用意に消耗されると困るのです。第二段階の作戦もありますから、敵を一人も倒せなくても構いません。必ず無事に帰ってきてください」
「それで第二段階は？」
「明け方の奇襲です。こちらはここにいるメンバー全員で切り込みますし、今日連れてきた本隊に遠距離攻撃で援護してもらいます」

日が少しでも上がれば明るくなりますから、同士討ちの危険もなくなりますし、この

時間がわかっていても一番人間が動きにくい時間帯です。目覚める直前ですからね。
夜じゅう嫌がらせで消耗させて精神的にも疲弊させて、一気に攻めれば相手の士気はボロボロでしょう。相手の軍を崩壊させるのが目的で、殺し切るのが目的でもないですし。

「明け方の切込みは、先遣隊のトップと思われる人間を狙います。ですが遠距離攻撃部隊との連携上、鐘がなったら確実に引いてください。離脱援護のための矢の雨に巻き込まれますよ」
「了解。まあ俺に任せてよ」

クレイの大言壮語っぽい発言は気になりますが、まあ自己責任です。

「何か質問は？　なければ夜の間切り込む順番を決めます。寝ていても出撃少し前に起こしますから、必要なら仮眠をしていてください」

◇　◆　◇　◆　◇

「では先陣、行かせてもらいます」
「よろしくお願いします」

日も暮れて、少し経った頃から夜襲を始めます。
トップバッターは抜剣隊においては珍しい商家出身の女性、サラさんです。
実力的には下の方ですが、商家出身らしい視野の広さと現実主義的な状況判断力を重視して先陣をお願いしました。
軽々と防衛拠点の障害物を超え、闇夜に紛れます。
１０分もすると、同じように障害物を超えて戻ってきました。

「どうせなので回り込んで東側から攻撃してみました。やはり裏側ということで守りは薄いように感じました。見張りを3人倒してきましたし、もう一度やっても成功するかと思います」
「おつかれさま。ばっちりですね。じゃあこれ、感状です」
「ありがとうございます」

特に何事もなく襲撃は成功したようです。先遣隊の駐屯地は遠目で見る限り少し騒がしそうですが、落ち着かせないことこそが狙いなので問題ありません。

ちなみに感状とは、指揮官がいい働きをした部下に渡す戦功ポイントみたいなものです。今回の戦いから導入した制度で、用紙にサインと何が良かったかを書いて渡します。とても良ければ何枚渡してもいいわけで、今回はサラさんには襲撃成功と偵察成功で2枚渡しています。

何が良かったかが定型的にわかりやすくするために導入したものですが、みんな張り切る反面、指揮官におもねる人も出てきているので一長一短です。

何にしろ成功したようですのでまずは一安心です。

「じゃあ次はクレイですね。頑張ってください」

「まかせろ!!」

クレイは意気揚々と飛び出していき、闇夜に消えていきました。

クレイも10分もすると戻ってきました。ただ、顔色が良くありません。

「大丈夫ですか？　怪我でもしましたか？」
「いや、そう言うことではないんだけど……」
「ならよかったです。状況はどうでしたか？」
「北側の森が深いほうからなら奇襲になるかと思って攻めたんだけど、やたらでかくて強そうな奴がいて、切りかかったけど受け止められちゃったからあわてて逃げてきたんだ。だから成果０で……」

しょんぼりするクレイ。戦果がなかったのを気にしているようですが、特に問題ありません。

「わかりました。お疲れさまでした。はい、感状２枚渡しておきます。生還と、偵察成功ですね」
「え？　だって俺、一人も倒せてないし……」
「作戦に従ったわけですし、北側に強敵がいるのもわかりました。それで十分ですよ」

それは敵は倒すに越したことはありませんが、３人程度の死傷では、全体から見ればそこまでの損害ではありません。下手すると直ぐに復帰する可能性もありますからね。

夜で暗いからどの程度のけがをさせているかわかりませんし。
情報を得るのと混乱を与えるのが目的なので、クレイの判断が正解なわけです。
これで正しいんだとアピールする意味も込めて、サラさんと同じだけ戦功ポイントである感状を渡します。
若干釈然としない表情をしていましたが、クレイは大人しく帰っていきました。
もっと頑張って大人になるんだぞ。ボクの方が少し年下ですが、偉そうにそんなことを思いました。

「次はお義父さま、おねがいします」
「まかせろ」

今回は珍しく大剣を背負って、義父は飛び出していきました。
そして戻ってきたのは２０分後ぐらいでしょうか、少し長かったです。

「アーシェ、北側につっこんでそのヤバい奴をぶったおしてきたぞ。大体１０人ぐらい倒してきたからな!!」
「……」

「アーシェ？」
「お義父さま、正座」
「え？」
「正座」

クレイの成長を喜んでいたら、義父がやらかしてくれましたよ本当に。
いやまあ、義父を生贄にすれば何をするべきかアピールしやすいからいいんでしょうが、義父はたぶんそんなこと考えていません。息子と義娘に言い所見せたくて張り切り過ぎただけです。
強いからってボクの指揮下に入れたのが仇になりました。

「お義父さま？　夕方のお話、聞いてましたよね？　1人3人までって。それで1合でも合わせる強敵が居たら引くようにって。クレイは守りましたが、お義父さまはそんなこともわからないわけですか？」
「し、しかし」
「話して良いと言っていませんよ。お義父さま？　お義父さまは確かに強いでしょうから、3人どころか10人でも20人でも行けるかもしれません。でも他の人たちはそう

いうわけでもないわけです。ほかの人が無理して怪我とか、場合によっては死んじゃったりしたら、お義父さま責任取れますか？　取れないですよね？」
「うぐぐ」
「あとでお母さまにも言いつけますから。朝方の第二作戦でも、切込みじゃなくて射撃部隊の護衛に回ってください」
「そんな!!」
「異論は聞きません」

このまま朝まで正座させたいぐらいですが、残念ながらまだ作戦は残っています。帰るように冷たく義父に言うとすごすごと帰っていきました。

そのあと入れ代わり立ち代わり、出撃しては帰ってきます。徐々に警備が厳しくなっているようで、戦果も上がりにくくなってきました。
とはいえ義父の無様な様子を見て、それぞれ自分の役割を理解したのか、色々な方法で嫌がらせをし始めます。
義兄は投石機を持っていき、篝火の近くにいた兵士に石礫を命中させさっさと帰ってきました。外周以外から被害が出たため、駐屯地は混乱をしているように見えます。

他には魔法も使える方が、ファイアアローをばらまいて帰ってきました。テントや木の柵、そして備蓄の食糧が燃えて大わらわになっています。

「大体備蓄の集積場所はわかっていましたから」

事前の情報収集含め、やり手ですね。花丸です。

こんな感じで一晩中攻撃を続けましたから、向こうはもう疲弊しきっているようです。

第二段階の作戦を実施するのに都合が良い状況が出来上がりつつありました。

漸く東の地平線が明るくなり始めます。そろそろ日が昇るころでしょう。

そしてこれが、第二段階開始の合図でした。

合図用の鐘が鳴り、ボクが率いてきた本隊のうちの遠距離攻撃部隊１００名が駐屯地近くの丘から姿を現します。明け方前から移動してもらっていました彼らを見つからないようにすることもまた、襲撃の目的でした。そして、姿を現すと共に全力射撃が始まります。合計１００の矢と石礫が敵の陣地に降り注ぎます。狙わないで撃ってもらっていますから、ほとんど当たることはないでしょうが、テントを壊したり、篝火を

倒したり、本当に運が悪い兵士が当たったり、そんなことが起きると駐屯地は大混乱になります。

敵軍の意識が遠距離攻撃部隊に向いたタイミングで、ボク達は突撃を始めました。

狙いは敵のお偉いさんです。捕まえられれば最高ですね。場所はおそらく、中央あたりです。そこに本部らしきものがあるのは事前情報からも、今日の襲撃からも予想されていました。

ボクが持っている大剣を振り回すと、敵兵が面白いぐらい吹き飛んでいきます。気分は無双ゲームです。大振りの隙をついてくる兵士は、義兄が対応してくれますので、ボクは思う存分ブンブン丸ができるわけです。

ボクの白系で角が生えているという特徴的な外見と、あまりにでかい剣を振り回しているので、注目はボクに集まりまくります。手柄を立てようと襲い掛かってくる人、逃げようとする人で場は大混乱になっています。

混乱は望むところですが、主目的である敵のお偉いさんを捕まえるには非常に不味い状況になりました。お偉いさんはこの群衆の向こうにいるでしょう。混乱した群衆に戦闘力はありませんが、障害物としてはこれ以上ない邪魔さです。

退路を意識しながら暴れるだけ暴れるか、と考えながら、後ろに下がりつつ剣を振り

回していると、鐘が遠くから響きます。撤退の合図です。
何が起きているかわかりませんが、後ろから俯瞰的に見ているエミリーがそう判断したならば帰りましょう。全力で後ろに跳ぶと、そのまますたこらさっさと拠点まで帰ります。
追撃は、遠距離攻撃で妨害されますし、特に問題なく、ボク達は襲撃を終わらせるのでした。

拠点に戻ると、先遣隊を率いていたらしい伯爵が縄で縛られていました。

「アーシェが真正面から馬鹿正直に突っ込んでいったから、俺たちは裏に回って捕まえてきたんだ」

クレイが自慢げにそう話します。
どうやら自己判断で数人別れると、裏に回って敵の本部に攻撃を仕掛けたようです。
ボクが大暴れしていたのもあり、手薄になっていた本部から、偉そうな髭おじさんを回収したとか。
また、敵の駐屯地の物資が集積されているあたりが良く燃えています。

ソロ奇襲で放火していた放火おじさん（正式名称スミス男爵）が、これまたボクを囮に物資集積場所に忍び込んで、魔法で大規模に放火した結果のようです。

自己判断した彼らに比べ、何も考えずに突っ込んだボクは囮以上には役に立っていなかったようで、とても悲しい結果に終わりました。

やっぱり義父の娘は脳筋でした。いや、義兄はそうでもないし、よく考えたら血がつながってないはずなんですけどね……

何にしろ一晩かけた夜襲は成功に終わりました。

烏合の衆となった敵軍は散り散りになっていきます。

あとは本隊を待ち受けるのみです。気は抜けませんが、こちらの士気は大いに上がりました。

3　本隊

一日かけて残った駐屯地から物資を回収します。
食糧は残っていませんが、矢などの消耗品や、テントなどの大物はそれなりに残っているので、ありがたく使わせてもらいましょう。
２００人ぐらいしかいない村に５００人もいるわけですから、いろいろ足りないものがあります。
食に関してはしっかり準備していますから特に問題がないですが、住に関しては明らかに不足しています。
一応テント村は作りましたので、野宿よりはましな状況ですが、微妙にテントも足りていないので詰め込んで寝てますし、地面も冷たいんですよね……
かといって村の人の家に泊まり込むと確実にトラブルになりますので禁止にしています。
建物を建てるのも時間がかかりますから全然進みませんし……
先日やっと一つだけ立派な建物を建てましたが……　手が空いていた先遣部隊の人が建てたのですが、当然人数に比して部屋が足りていません。

軍の本部として機能しているので非常に助かっているのは確かですが、建てるために働いていた人たちがいまだテント暮らしなので少し悪い気がしてしまいます。

そんな状況ですので、敵の駐屯地から奪ってきたテントは引っ張りだこです。

これで過密状態も多少は改善されるでしょう。中には焼け残ったり破れたりしたテントをつぎはぎ修理し始める兵もいますから、どれだけ需要が高いかよくわかります。

そんな状況ですがボクは義兄と一緒に男爵さんのお家の客間に泊まっています。ＶＩＰ待遇ですね。テントでもよかったのですが、さすがにトップがそれでは示しがつかないということで、客間に押し込まれました。本部建物の方にも泊る場所がありますが、リスク分散のためボクは男爵さんのお家に分配されました。

なのでボク自身は快適と言えば快適です。部屋の掃除なんかもお手伝いさんがしてくれますし。

何にしろ、駐屯地をほとんど更地のような状況にした翌日、公爵軍の本隊が到着しました。

「公爵軍本隊はいかがでしたか？」

「半端なく強い。遠くから嫌がらせをして多少遅らせるのがせいぜいだった。下手する

と簡単に補足されて壊滅するからな」

足止めのハラスメント攻撃をしていた部隊も少し前に帰ってきていましたので、疲れているだろうと思いましたが早速話を聞きます。

４つの男爵家の部隊を取りまとめていたサルナン男爵は、困ったような表情をしながら報告をしてくれます。

「そこまで強いですか？」

「あれは多分公爵の直属で、率いているのは公爵本人だろう。やり手の公爵と聞いているし、兵士全員が下手すると男爵レベルだ。うちの兵士じゃとても相手にならない」

「そこまでですか」

補給の関係上人数が増やせないのだから精鋭を持ってくるのは手でしょうが、こんな辺鄙な場所に公爵がわざわざ出張る理由はわかりません。

わざわざ嘘を報告する必要もなさそうですが、謎がいろいろ浮かんでしまいます。

ひとまず男爵も含めて話をした方がいいでしょう。

更に人を呼んでもらい、そのまま会議をすることにします。

辺境伯の政治を行っていたアランさんとアルゥちゃん
書面上の知識なら一番詳しいだろうエミリー
第三者目線が必要なので義兄
補給のためこちらに来ていたニキータさんも捕まえて会議開始です。
本当は義父も呼びたいところですが、この前の独断専行があったので謹慎中です。

「そう言えばそもそも公爵がこちらに攻めてきた理由ってなんでしたっけ？」
「……」
根本のそこの部分について、よくよく考えたらよくわからなくなってしまったので、そこを確認したのですが、沈黙しか返ってきません。
「あれ、宣戦文って何が書いてありました？」
戦いになるときの様式として宣戦文が送られ、そこになぜ攻めるのかという理由が書かれています。
辺境伯がボクの村に攻めた時は、要約すれば偽皇女の討伐でしたし、今回のキリル子

爵領攻めは前キリル子爵のキリル子爵領不法占拠と主従契約不履行による懲罰です。
名目だけの理由のこともありますが、こういうのを送るのが様式美だったりします。
ですが、今回の公爵からの宣戦文に何が書いてあったか、記憶になかったので確認したのですが……

「多分、宣戦文は届いていません」
「公爵がそんな手抜かりしますかね？」
「多分前キリル子爵には届いていると思うのですが……」
「サルナン男爵、前キリル子爵から何か聞いてますか？」
「いえ、公爵家の侵攻が始まったと聞いてすぐに彼の元から去りましたから」

つまり、公爵はキリル子爵領目的で侵略を始めたということ？
しかしそれならどうしてこちらと戦っているのでしょうか。
少なくともこちらの防衛線まで何度か迫っていただろうことは防衛線の傷や落ちていた矢や石礫などから明らかですが……

「そもそも公爵側が攻めてきたのってどういう状況だったんですか？」

「サルナン男爵たちが逃げてきたのをこちらで保護しようとしていた時に、追撃してきた先遣隊がこちらまで攻撃したので、反撃したのが最初だったかと」
「つまりなし崩し的に始まった感じ……？」
「そうね」

こちらの先遣隊を率いていたアルゥちゃんの説明で、戦闘がずぶずぶで始まったのを自覚します。
あまりいい状況ではないですね。こちらも向こうも戦略目標があいまいですし、それで戦いがすでにかなり動いてしまっています。

「一度公爵とお話ししないとだめかもしれませんね」
「この前捕まえた伯爵にお話聞いては？」
「そうですね、そこから始めた方がよさそうです」

かなり混沌とした状況になっているのもわかりました。捕虜の人たちへの尋問は、まだ始まったばかりですし、状況確認のためにも話を聞くことにしました。

捕虜の人のうち偉い人は本部建物の方の地下に閉じ込められています。
幸い今回捕まえた捕虜の人は３０人程度、怪我をしている人を別の村に護送したのでここで捕らえているのは１０人ほどですから、少し窮屈でしょうが全員地下に泊まれるぐらいでした。うちの時は多すぎて野ざらしになりましたからね……

「それで、お話聞かせてほしいんだけど」
「くっ、辱めを受けるぐらいなら死んだほうがましだ、殺せ」
「なんでそうなるの……？」

伯爵さんは年齢は２０代後半ぐらいの、美人さんです。
ですが頭は残念なようです。なんせ今ここにいるのはボクと、アルゥちゃんと、フィオナさんの３人です。あまり威圧感がないようにと女性を集めたのですが、どうしてくっコロになってしまったのでしょうか。

「そうね、あなたが正直に話してくれないなら、あんなことやこんなことしちゃうかも」
「ひっ!?」

「フィオナさんも止めてください」

訂正です。やべー奴が居ました。ごめんなさい確かに覚悟しますねこんなのが居たら。

「で、聞きたいのはどうして公爵がこちらに攻めてきたか、なんだけど……」
「西方から貴様ら蛮族が攻めてきて辺境伯領がほぼ全土占領されたとキリル子爵から聞いたためだ」
「なにそれこわい。というかボクこれでも皇族の血を引いていると聞いているのだけれども……」
「確かに、銀髪碧眼の竜人は皇族の色だ。くっ、ユーグの奴、適当しか言わなかったな!!」

どうやら前キリル子爵のせいで情報がぐちゃぐちゃになっているようです。おそらく情報操作をして、上手くやろうとして、そして失敗して盛大に自爆した、ということだろうと思われます。

「で、子爵への宣戦理由を教えてほしいんですが」

「宣戦理由は正当なる辺境伯の後継ぎ、エミリー殿を守らず敵前逃亡したこと及び辺境伯の奪還を妨害したことだ。救援要請をしておきながらほとんど手伝おうとしなかったからな」
「で、そのまま追いかけてうちとぶつかったと」
「蛮族と思っていたからな、そもそも、貴殿らはいったい誰なんだ」

なんということでしょう。お互いの相互認識がなさすぎる。
まあこちらも武装してましたし戦場の空気に飲まれるとこうなっちゃうのかもしれません。こちらも公爵軍であるという認識以上なかったわけですし。

「あ、自己紹介してませんでしたね。ボクが現マーチ辺境伯のアーシェロットです」
「それじゃあやはりエミリー殿は……」
「元気ですよ」
「そうか……　え？」
「元気ですよ、今連れてきますね」

エミリーを連れてくるように指示を出します。

伯爵さんの心配し様を考えると、エミリーをさっくり殺して簒奪したと思ったのでしょうか。

なんにしろ一つ意外なのは、エミリーが単なる引きこもりのビブロフィリア（活字中毒）ではなかったということでしょうか。公爵側の人たちにそれなりに名前が知られているわけで、どういうつながりなのか気になります。

まあ、よく考えたらエミリーは公爵のことをお兄様と呼んでいたようですし、それなりに親しかったようですから、公爵側に好意的に思われているのかもしれません。

「アーシェ様、何か御用ですか？」
「エミリー、こちらの伯爵さんがエミリーに会いたいって」
「伯爵……　あら、リリーお姉様、ごきげんよう」
「……」
「リリーお姉様？」
「えみりーちゃあああん!!!　心配したんですよぉお!!!!!」

伯爵さんが泣きだしました。

エミリーもボクも困惑です。

伯爵さんが泣き止むまで、ボク達は眺めているしかできないのでした。

4　公爵

公爵側と一度会談をするため、事前交渉をすることになりました。

捕虜の方から一人を選び手紙を届けてもらいます。ボクが書いたものと、伯爵さんに書いてもらった添え状です。

ボクからの手紙の内容は、端的に言えばご用事なあに？　です。今更かよという手紙の内容ですね。伯爵さんから聞きはしましたが、公爵自身の考えはまた分かりませんし。

ちなみに伯爵さんからの添え状にはエミリーが可愛いという話ばかり書いてありました。結構キモいレベルです。単純に攫われたり人質になるのを防ぐ目的もありますが、キモいのでエミリーを遠ざけるため、本部建物接近禁止にしました。

手紙はすぐに返ってきました。

目の前ですからね。一度会談をしたい、という内容ですので、明日の正午に、村と駐屯地の中間地点あたりで2人ずつ出して会うのでどうかと提案します。

承諾の手紙が来ましたので、会談の準備を始めることにします。

近いと手紙のやり取りが早くていいですね。
ひとまず野外で使えそうな机と椅子、あとピクニックセットにサンドイッチとお茶を籠に詰めて用意します。
正午は失敗だったかもしれません。お昼ご飯の時間でした。
義兄と二人、机と椅子を担いでえっちらおっちらと目的の場所あたりに向かうと、向こうからも二人、大きなものを担いでこちらに向かってきます。酒樽二つ、ですね。何を考えているんでしょうか。
一人は背の高い男性です。金髪の中性的な顔で、王子様っぽい外見の人で、軍服をきっちり着ています。かなりイケメンですね。正直近寄りたくないです。
もう一人はメイド服を着た女性で、こちらの人が酒樽を二つ担いでいます。やばいですね。男性の方は敷物らしきものを持っているので、酒盛り気分がすごいです。
多分男性の方が公爵様だと思いますが……　エミリーはお兄さまって言ってましたし。
ひとまずこちらは机と椅子2脚を置きます。
公爵の方は、粗末な藁製っぽい御座を敷き、その上に酒樽を置きました。
お互い相手のモノを使ってトラブルが起きたら大変なので、それぞれ準備したものを使うのです。

最初に口を開いたのはメイドさんでした。

「我こそはノルン公爵マリオンである!!!」

外見と一切一致しない野太い声でそう彼女と思っていた彼は述べました。

いやお前が公爵なのかよ!?

思わず反射的にツッコみそうになるのを必死に堪えます。

首までしっかり締まったロングスカートのエプロンドレスを着た彼は、なかなか美人です。ですがメイドにしては髪が長く腰ぐらいまであるのは気になっていたのは確かでした。普通メイドは仕事のため、髪はまとめていますからね。

声は思いっきり男性のモノですが。首が見えないから喉仏もわかりませんし、声を聴いても外見は女性っぽいなと思います。

「そして私は前ノルン公爵夫人リリスです。初めましてお二方」

「あ、はい、はじめまして」

公爵家、変態しかいない説。

前公爵夫人って、母親ですよね多分。母親同伴で戦争とか……　いやボクも義父同伴ですから同じでした。義父にもう少し配慮がありそうなら確かに義父の方を連れて来てましたから、おかしくはないですね。その恰好以外は。

まあ確かにこちらは腰回りが丸いですから、女性っぽさが隠し切れているわけではないですね。ただ遠目から見ればわからない程度でした。

なんというか、完全に場の空気に飲まれてしまっていますが、ひとまずこちらも名乗りましょう。

「マーチ辺境伯アーシェロットです」

「クロン子爵クリスです」

義兄とともに簡潔に名乗ります。キャラが強すぎてもうついていけないので、張り合うのは止めましょう。

「早速今回のこの戦いについて、公爵にお聞きしたいこともありましてこうして機会を設けたわけです」

「たしかに、行き違いがいろいろありそうだからな。意思疎通しても損はないだろう」

そう言いながら、御座の上に正座でちょこんと座る公爵。外見と行動の貞淑さと言葉の尊大さがかみ合ってなくて頭がバグりそうです。

義兄は特に気にせずに椅子に座りました。こういう時の義兄のメンタルの強さは素直にすごいと思います。

「そもそも公爵の今回の目的は何なのでしょうか。残念ながら宣戦文はこちらに届いていませんので」

「ふむ、それを聞くか。端的に言えばエミリーの救出だ」

「彼女が旗頭に欲しい、ということですか？」

エミリーは前辺境伯唯一の生き残った子供です。

カーク子爵とキリル子爵も辺境伯家の分家らしいですが、血としてはかなり遠く、近い血縁はいないという話を聞いていますから、エミリーの旗頭としての存在価値は本来非常に高いです。

とはいえそんな彼女が大々的に禅譲を宣言してますから、今更彼女についていく人は多くないと思います。そもそも彼女自体に辺境伯への思い入れを感じませんし。将来

の夢は図書館に住むことな女は伊達じゃないですよ。

「いや、違う。単にエミリーを嫁にもらいに来たのだ」

「へー、なるほど」

ちょっと方向性が違った。内心で何を企んでいるかわからないですが、公爵はエミリーを嫁として欲しているようです。

最初の理由に比べれば条件交渉の余地があるでしょうが、それでもいろいろ面倒な部分が残ります。

「まずエミリーが了承しないのに引き渡すことはできません。条件としてはエミリーの了承があることが大前提です」

「それなら構わない。エミリーは私ことが好きだからな」

公爵は堂々と言い放ちました。どうしてそこまで自信があるか不明ですが……　まあエミリーはどちらかというと女性が好きなタイプですから、男性らしい人間より女装の変態野郎の公爵の方が好みかもしれません。

「ボク個人としてはエミリーを幸せにしてくれるならそれ以上は構わないのですが辺境伯ですからそうも言えないわけです」
「まあ、わからなくもない。旧辺境伯領は全部返還するのはお約束しよう」
「それはありがたいですが、それじゃ足りないのもお判りでしょう？」

正直ボクはエミリーを個人的に気に入っていますし、彼女の知的能力は買っています。

だが、彼女の政治的能力や政治的立場は正直あまり評価できる状態ではないと思います。なのでボク個人としては、最初からあえて辺境伯位を狙ってきているのでなければ、脅威とは感じません。トップに立てるには政治的なものが苦手過ぎますし、神輿に担ぐには彼女は賢すぎます。

ですのでエミリーが幸せになれるなら公爵のところに行くのを止めようとは思いません。公爵とエミリーは知り合い同士のようですし、相手から求められているわけですし、エミリーもまんざらではないのではないかと思います。

ですが、エミリーの血統的価値を考えるとおいそれと送り出すと周りにどんな評価をされるかわかりません。ですので、それなりに公爵が譲歩した、という形を作ってもら

う必要があるわけです。もしくはこちらが譲歩せざるを得なかった状況を作るか、です。

公爵側だって、先遣隊が負けただけでそこまで譲歩はできないでしょう。なので、何かしら勝ち負けの形を作り、それで条件を決める必要があります。

「ということで、決闘ですかね」

「そうだね。こちらは私が出るが、そちらは辺境伯殿が出るかね？」

「いや、私が出よう」

「お義兄さま？」

今まで黙っていた義兄がすすっと前に出ました。

基本あまり戦いは好まない義兄にしては珍しい態度です。まあ、強さだけで言えばボクと同等なので、義兄がやりたいというなら止める必要もないでしょう。

「では、公爵である私が勝ったら、エミリーとそうだね、撤退までの食糧を無償でいただこう」

「じゃあこちらは、２０年の港湾の無関税使用権と国境沿いの山の鉱山資源使用権を認

めていただきます。あと、食料は有償ならば譲りますよ」
「ふむ……　まあそれなら構わないだろう」

港湾の無関税使用権というのは、こちらから出した船が公爵領の港に着いた時に公爵側は関税がかけられないという話です。戦争の賠償として認められる場合もありますが、基本は2つの領の友好と経済交流の促進を目的にされることが多いですから、旧辺境伯が嫁ぐときの実家への援助としての外形もつくでしょう。

故郷のライン村の港の整備も順調で来年ぐらいから使えると聞いていますからこの権利を手に入れられればそれなりに利益が出るはずです。

国境沿いの山というのは、辺境伯領と公爵領の境目の話です。キリル子爵領の周辺以外は基本山が連なる山脈が国境にそびえたっていますので、行き来が非常に面倒だったりします。そしてその間の山の帰属は、まあ、揉める可能性が将来的にあったりします。現状はただの山で鉱山も何もないのですが、将来的にもしかしたら役に立つかも、程度の期待です。まあ権利関係が確定すれば調査もしやすいですから。

この程度譲歩させれば、まあ形だけはつくでしょう。これ以上戦争を続けて人を消耗したくないのが一番です。寝返った男爵4家には領地を返せますし、3家分の領地が空きますから最低限の恩賞は出せるでしょう。

何にしろ公爵とこと構えたくないです。潜在的な兵力に差がありすぎるので最終的に負けるのはこちらである可能性が高いですから。

「日時は明日の正午、場所はこの辺りでいいですか」

「ああ、構わん」

こうして、大体の方針は決まりました。

あとは決闘の結果で決まるでしょう。正式に行われる決闘というのは重いものです。ウチを攻めてきた辺境伯は勝手な宣言でしたし思いっきりボクが勝ったので問題にはなりませんでしたが、負けたり、生かしておいたりしたら正式じゃないとしてもどう使われていたかわからない程度には重んじられます。

公爵も決まったと判断したのでしょう。

二人で酒樽から酒を直接飲み始めました。豪快過ぎるでしょ……

「飲むか?」

「いえ、お酒はお義兄さまに禁止されているので」

「ふむ、ならしょうがないな」

アルハラされるかと思いましたが、案外簡単に引き下がりました。
ただ、ここにこのままいるといつアルハラされるかわかりませんし、ボク達はさっさと村へと戻るのでした。

5　決闘

翌日、決闘する場の周りには、皆が集まりました。
これで戦争が終わると周りもわかっているためか、気が緩んだ感じの兵士が思い思いに席を作って観戦しています。
公爵軍も空気が緩んでおり、こうなればこれ以上戦争は難しいでしょう。
正直公爵側の裏切りや奇襲の可能性も考えていたため、この雰囲気は助かりました。
若干お祭り気分になり始めたため、村の人も出てきます。
公爵軍の人たちが、お金で村の人達に支払いをしようとして困惑させていました。
帝国小銀貨ですね。きっと遠征費用として各自持参しているのでしょう。

「辺境伯様、これ、どれくらいの価値があるのでしょうか？」

男爵さんが、困った顔をしてボクに価値を聞きに来ました。

「大人1人の1日分のパンと同じ価値があるといわれています。それだけの価値で良け

ればボクの方で引き取りますよ」
「わかりました。よろしくお願いします」

貨幣経済が全く浸透していないからイメージがつかないのでしょう。
こちらの軍の支払いだって、基本租税との相殺で計算されます。２００人弱の村ですから、２００人の1年分の食糧の5パーセントが辺境伯に収める租税になります。
そうすると大体帝国小銀貨３５００枚です。こちらの軍の支払いも合わせれば、今回の戦争分だけでこの村や道中の村の今年の租税分ぐらいには達してしまうでしょう。下手すると来年分まで入るかも……
やっぱりあまり戦争はしたくないですね……
領内にできれば貨幣経済も浸透させたいですが、貨幣を用意するのが大変なんですよね……　銀貨なんてそうそう作れないし、そうすると紙幣ですが、それはおいおい考えましょう。

公爵軍の方は酒もふるまわれていて、もう雰囲気が完全にお祭りです。
中心となる簡易に作られた舞台の上では、本番である義兄と公爵の戦いの前に腕試しとして、有志同士が戦っています。

基本的に辺境伯軍の腕に覚えがある人対公爵軍の腕に覚えがある人なのですが、やはり公爵軍の人たちは強いですね。

うちの抜剣隊から何人か出ていますが、勝率は4割弱です。

公爵直属である伯爵になると、普通の男爵ではとても勝てそうにありません。

先遣隊で捕虜になったくっころ女騎士さんのリリーさんなんか、無茶苦茶強くて、三人抜きしていました。よくあんな人をクレイは捕まえたな、と思うレベルです。

ボクも、本番直前に軽く一手、ということで、公爵のお母様であるリリスさんと剣を合わせることになりました。

「お手柔らかにお願いします」

「こちらこそ」

男装の麗人が半身で立ち、正面に片手で剣を構えるフェンシングみたいなスタイルです。当然ながらまったく油断できる相手ではありません。

始まりの合図とともに細い刀身の片手剣による斬撃と刺突の嵐が襲い掛かってきます。

一撃は軽いですが無茶苦茶速いので、大剣ではとてもついていけません。

持っていた大剣を投げ捨て、いつもナイフ代わりに使っている、中途半端な長さの剣を抜いて剣と鞘の二刀流で受け流します。

風の剣で踊るように舞い、水の剣で受け流す。あまり得意な分野の剣ではないので、どうにかこうにか躱わすので精一杯でした。義父や義兄ならば反撃できるのでしょうが……

本気で殺し合いをするならば、防御を捨てて大剣で全力で切りつけるのが一番でしょう。射程的に大剣を使えばこちらの方が有利でしょうし、あの軽い一撃なら、身体強化を最大にすればボク自身の丈夫さに加えて服の防御力も合わさりおそらく1，2撃ならば耐えられるはずです。

ですが前座の見世物で、そんな肉を切らせて骨を断つみたいなガンギマリ戦法をするのは周りもドン引きでしょう。手加減もできませんし

なので苦手な戦法で相手に合わせざるを得ません。するすると舞うように、踊るように躱し、流していると、一息ついたタイミングで相手は剣を下ろしました。

こういう受け流したり躱したりする戦い方は得意ではありませんが、それなりに華やかになったのではないでしょうか。

「ありがとうございました」

「ありがとうございました。やはり公爵夫人、強いですね」
「貴女に本気を出させられない程度ですよ。やはりお強い」
「そんなことないですよ」

殺し合いならば確かに別の戦法を使ったでしょうが、決闘は決闘であり殺し合いと別のルールがあります。
そのルールの中でボクは全力でしたし、殺し合いならこんなまだるっこしい戦い方をせずに後ろから援護射撃させています。
ウチは弓兵重視なのです。剣で切られても、矢で射られても人は同じように死にますからね。
ただ、前公爵夫人はいまいち納得していただけないようでした。

そうやって場が温まると、本番である決闘が始まります。
義兄は辺境伯家の家宝の剣を持っています。
もともとの剣の質もいいですし、エンチャントかけたので切れ味も丈夫さも一級品の剣です。両手でも片手でも扱える長さなのでパワーファイターなボクには向いてない

ですが。

一方の公爵はバカでかい大剣装備です。一見すると美少女メイドですし、それが大剣を持っていると性癖に刺さりますね。小柄な美少女にバカでかい武器はとても相性がいいのは明らかです。ボクもあのスタイルにしてみようかなぁ……

何にしろ公爵はパワーファイターみたいですね。というか大体貴族の剣技って力こそパワーみたいなパワー系の技ばかりなんですよね。盾と片手剣を使った防御重視の剣術もありますがマイナーですし、義父みたいな受け流しと回避まで技術に含まれている剣術は義父のもの以外見たことがないです。

二人は礼をすると剣を構えます。正眼に構える義兄に、公爵が先手を打って上段から一撃を繰り出しました。

義兄は受け止めるように見せかけて、その一撃を流します。

なにも抵抗なく、それが当然だったかのように横に反れていった一撃を躱し、義兄は左手での正拳突きを公爵の顔面に叩き込みました。

公爵が後ずさります。一撃を躱されたのも、拳でぶん殴られたのも驚きなのでしょう。剣と格闘を合わせた技というのはボクもアルゥちゃんのモノを見るまで知りませんでした。それを義兄は応用したようです。確かに受け流した後に切り返すと相手も態勢整えて防御してくることが多いですから、流しながら殴ったほうが早いのは確かで

す。

公爵もさるもので、一瞬動揺を見せましたがすぐに立て直します。

そのまま大剣をすさまじい速さで振り始めました。公爵夫人も使っていましたが、かなりスピード重視ですね。でも剣が長くて重いですから、威力は十分です。

それを義兄はすべて受け流していきます。素早い連撃ですから間に反撃を挟むのは難しそうですが、今のところ余裕をもって受け流せているように見えます。

この攻防が続くとどちらが有利かは何とも言えません。

体力的には小さく動いて受け流している義兄の方が有利でしょうが、一方で慎重に受け流さなければならないため精神力的には義兄の方が不利でしょう。

現状は拮抗していますが、それが崩れた瞬間、どうなるかが問題です。

はらはらしながら見守っていましたが、崩れたのは公爵の方でした。

らちが明かないと思ったのか、大振りの一撃を放ったのです。スピードもパワーも乗った素晴らしい一撃でしたが、慎重にそれを義兄が捌くと、公爵はバランスを大きく崩しました。

その瞬間、義兄はまた拳の一撃を繰り出します。今回狙ったのは、公爵の剣を持つ手でした。

めきょっ、と鈍い音がした後、カラン、と金属音がしました。

公爵が剣を落としたのです。手を攻撃して、剣を持てないようにしたのでしょう。
えげつない義兄の攻撃で、決闘には決着がつきました。

「くっ、何故だ。妹を、エミリーを思う気持ちを持つ私がなぜ負けるのだ」

公爵が急に独白を始めます。というかエミリーは別に妹じゃないでしょ。

「簡単だ。私が義妹を思う気持ちが、貴様のそれよりも圧倒的に強いからだ」
「なんだと!?」

義兄もその独白に付き合い始めます。というか何言い始めてるんでしょう。

「私は義妹と結婚したし、そのために後継ぎの地位も捨てた。対して貴様はどうだ。妹のために地位を捨ててでも守ろうという気持ちがあったか。攫ってでも助けてやろうという気持ちがあったか。それが貴様と私の差だ」
「ぐっ……」

この義兄、何言ってるんでしょう。

確かにライン男爵の後継ぎの地位は現状保留中で、母が子を産めばライン男爵の地位はそちらに引き継がれる可能性が高いですが、義兄が辺境伯の夫というさらに一ランク上の立場になったからですし、現状子爵になったわけですから捨てたと言うにはかなり語弊があるでしょうに。

ですが義兄の出まかせに近い勢いのある主張に、公爵は膝を折りました。

「私は、エミリーを、妹を、思う気持ちが足りていなかったというのか。彼女を攫って、どこまでも逃げるべきだったというのか」

「そうだ。その気持ちの差が、剣のわずかな差となり、そしてそれが結果につながった。ただそれだけだ」

ドヤ顔を決める義兄ですが、もう放っておくことにします。何にしろ勝ったわけですし。

「で、エミリーはどうする？　帰る公爵と一緒に行ってもいいですし、再度迎えに来てもらってもいいですし」

「私は一度マーチの街へ帰ります。荷物の整理や仕事の引継ぎもありますし」
「了解、ということで公爵。いつでもいいけどうちの本拠地までエミリーの事迎えに来てくださいね。ちゃんと歓迎しますから」
「あっ、ああ」

若干呆然としていた公爵はそう返事をしました。
さて、これで戦争も終わりです。公爵との紛争がしばらくなくなれば、こちらの領も安定するでしょう。
食糧を受け取った公爵軍は翌日朝には撤退を始めます。後片付けはいろいろあるにしても、戦争が終わってこれで一安心と言えるでしょう。

6　戦後

戦争が終わりました。

終わると戦後処理が必要になります。

前キリル子爵を裏切ってこちらに付いた男爵たちは、そのまま領地を保証したまま主従契約を結び直します。

こういう時、どうするかはボクのような上の人間が決めるわけで、場合によっては許さんと殺してしまっても構わないようですが、ボクはそういう選択はとりません。正直、どうでもいいんですよね。トラブル起こして何かほかの領に迷惑をかけない限りは。

裏切りをしたというのは周りからも良く思われていないわけでして、近隣と揉め事を起こせば不利になる傾向が強いのは理解しているでしょうし、理解してなければ最終的にそういうことが起きた時に潰せばいいわけです。一応対公爵軍でも頑張ってくれていたわけですから、特に何もせずに続投を認めたわけです。

ですが、子爵領と男爵領２つが公爵に攻められ、トップがいなくなっていますからここに関してはどうするか決めないといけないわけです。誰かに押し付けたいところな

のですが、そう言うのにいい相手がいないんですよね……　全体的に人手不足です。
　辺境伯になるまでの戦いでそれなりに貴族が亡くなっていますので、その穴埋めに予備の地位にいた貴族の次男次女を使ってしまっているので、あまり分けられる相手がいません。今回の戦いで大きな結果を残した誰かにあげるかというと、候補は伯爵を捕まえたクレイなどの抜剣隊の人たちになるでしょうが……
「領地より新しい剣術を教えてほしい。あのクリス殿が使っていた受け流す技とか」
「肉がいいな肉。肉は体を作るのに重要だし」
「俺は剣がいいな。今のだと軽すぎる」
　彼らは剣の道に生き始めたせいか、報酬として新しい剣術や武具等は求めても、領地は断られてしまいました。
　まあ新領地の経営大変ですからね……
　公爵領との唯一の陸路の道を子爵領が持っていますから、重要拠点というのもあるので男爵領含めた3つの領を辺境伯の直轄地とすることになりました。代官には村の人の互選で選んでもらいます。

　領土の割り振りはひとまず完了しましたが、それではい終わり、というわけにもいきません。当然攻められた地域は家は壊れ、田畑は荒れ、食糧が不足しています。

その食糧を回す作業も必要です。これがなかなか面倒でして、近場から持っていくのが安上がりなのですが、それをやるとあいつらが俺たちの食糧を取った、みたいに思われて結構トラブルになるんですよね……

なのでひとまず辺境伯のところに運ばれてきた食料をわざわざ端の領まで運ぶことになるわけです。経済的合理性がかけらもないですが、トラブル回避にはしょうがなかったりします。

送る量の決定と運送方法の手配だけでもそれなりに大変でした。

また、近々来る公爵たちを迎える準備も必要です。軍を返して、正式な和平の儀式をする予定であり、向こうがこちらに出向く予定になっています。エミリーを迎えに来るという建前もありますからね。

もちろん雑になんて扱えませんから、食事から何からきちんとそろえる必要があります。まあうちの領で揃うものなんてたかが知れていますが……

エミリーの知恵を借りてどうにか様になるような準備をしていきます。教えてもらったものをもとに、ニキータさんに必要なものを指示して、どうにか取り寄せてもらっていますが果たしてどれだけ集まるか……

ベッドカバーに絹のレースとか絶対無理だと思うんですけどね……

あと、エミリーがいなくなると儀礼が無茶苦茶になりそうです。エミリーがいなく

なった後は一応そういった知識がある母にどうにかしてもらうしかないでしょう。

何にしろああだこうだしているうちに公爵がうちの領を訪れたのは、公爵軍が撤退を始めた日から1月後でした。

公爵領との隣接地域は公爵に否定的感情を抱いていそうですし、ちゃんとお迎えの兵を出して、比較的安全な前戦争の時の本部建物で1泊、そしてそのまま辺境伯首都までというちょっと強行軍気味の日程で頑張ってもらいました。

公爵が率いていたのは騎馬兵ばかり３００程度だったので、移動が本当に速かったようです。徒歩だと、公爵領との境目から4日ぐらいかかりますからね。騎兵隊、憧れますしうちでも編成しましょうか。

「いらっしゃい、公爵様。歓迎しますよ」

「お久しぶりですお兄様」

「お迎えありがとう。エミリーも元気そうだね」

ほのぼのした空気が流れます。まあ今回の歓待役はエミリーですし、彼女に任せておきましょう。すでに荷物はまとめていますが、本人がやっぱりヤダとか言い始めたら、

連れて行かせられませんし、公爵にはせいぜいエミリーのご機嫌を取ってもらう必要があります。決闘で情けない姿を見せてますしね……

二人がデートで出ていきましたから、ボクは公爵側の事務の人と条項について交渉を始めました。

ふわっとした内容は決まっていますが、文字に起こすとなるとこれがまたなかなか大変です。

例えば境界域の山脈について。山全体をこちらの領地としてしまうのが表現的には簡単ですがそうすると公爵側の人たちは山には入れなくなります。山からは薪などが取れますし、山の幸もありますから、山に入れないということの打撃は非常に大きいわけです。

で、公爵領側の山の斜面からとれる山の恵みなんて、辺境伯領側から利用できませんから、もらっても利益がないですから、そう言う取り決めはあまり良い結果を生みません。利用範囲が重なっているならいろいろ整理が必要ですが、高くて険しい山ですから、辺境伯領側と公爵領側で利用範囲は重なってないみたいですし。

一方で鉱物資源となると、鉱脈が山全体に広がっていることがありますから、鉱山の入り口がどちらにあろうが揉める可能性があるわけです。何かしらの鉱脈を見つけた後、反対から掘られて掘りつくされる可能性がありますから。

そういったことがないように、今回辺境伯側だけ採掘したいという約束をしたいわけですが、今度は鉱山の入り口についての取り決めの問題があります。見つかったものによっては鉱毒の話も出ますから、下手に向こう側に鉱山の入り口を作るとまた公爵領ともめるわけです。そういったことをいちいち取り決める必要があるので、本当に面倒です。

公爵側としては、他にも鉱山を持っていますから、境界域の山脈の鉱脈は興味がないようですが、何か公爵側にトラブルが起きた時に対応できる条項にしようとしてきますし、こちらはできるだけ自由に掘りたいわけですから、どう書くかでもめてしまいます。

ここでこちらの文官の少なさが響きます。こういった交渉事に慣れているのは商人のニキータさんぐらいで、あとはボクが義兄のフォローの元必死に考える必要があります。元々辺境伯では前キリル子爵が外交関係をやっていたらしく、前回の戦でほぼ全滅してますから、文官がまるで足りません。

一方公爵側は歴戦の外交官ですから、もう、うん、どうしようもないです。

パンチで解決していいかな、という思いが頭をよぎります。

無関税使用権についても、どういう風に認めるか、という問題が出ます。船籍が辺境伯なら全部関税免除、とはいかないでしょう。だって船籍なんて旗で判断しますから、偽装がしやすいですからね……　自分のところの船ならば、旗以外の要素で偽物ってわ

かるでしょうが、他人の船籍なんて判断が難しいです。
なので割符の免税証明書を発行してもらうことになりますが、これがまた面倒なわけです。免税の範囲、はまあ公爵の慣習に合わせるとして、何枚出すか、盗まれたらどうするか、紛失したら再発行できるのか、その場合にどうするか、みたいなことを決める必要があります。船のことですから、沈んで紛失、なんていうことも、海賊に襲われて奪われる、なんてことも普通にあるわけです。
そういうことを一々取り決めると、本当に煩雑になっていきます。
どうにかこうにか、内容を決める頃にはボクは疲れ切ってヘロヘロになっていました。
ですがこれで終わりなわけではありません。
最後にエミリーに本当に公爵についていくか、聞く必要があります。
まあ、こちらにいてもなかなか肩身の狭い思いをしてそうですから、ついていくって言いそうな気もしますけど。
何にしろ、一度呼び出して意思確認です。

「で、どうするの？」
「お兄様についていこうと思います。止めますか？」

「いや、全然そんなことは考えてないけど」

エミリーのことは気に入っているし、彼女が幸せになろうとするのを止めようと思いません。将来のことを考えると貴族的には良い手ではないのでしょうが、まあ、そんなの子孫に考えてもらうことにします。

「確かにお兄様は気が利かないし、アーシェ様のお義兄さまに負けて情けないし、そもそも女装が私よりカワイイのが腹立ちますが」
「急激なディス……　やっぱりやめる？」
「いえ、辺境伯のお屋敷の本は読みきってしまいましたが、お兄様のお屋敷には本がいっぱいありますからお兄様についていきます」
「本目当てかよ！」

思わず言葉遣いが崩れました。

「なんだかんだでお兄様は私に優しいですし、周りの皆さんも甘やかしてくれますから、向こうに行った方が楽しそうだと思うんです。何より本がありますし」

「本当に大丈夫？　本目当てってバレて返品されない？」
「出戻りになったらまた雇ってください」
「まあ同じようなポジションで働いてくれるなら受け入れるけど……」

したたかと言えばしたたかだし、天然と言えば天然なエミリーの話を聞いて、違う意味で不安になりましたが、まあ本人が決めたことです。
彼女を送り出すことにしました。

正式に和平が結ばれ、エミリーは公爵についていきました。
彼女の被っているかも怪しい化けの皮が？がれることがないことを祈るのみです。
何にしろ、これで辺境伯領は平和になるでしょう。
慌ただしい時代が終わり、ようやくゆっくりできるのです。

7　内政

異世界転生して貴族になったら何をするか。

そう、ＮＡＩＳＥＩチートです。

前世知識を使って、なんかすごいものを作り出したりすれば大儲け間違いありません。

そう、転生したのだからそんなことが……

「できるわけないんですよね……」

当然できるわけないです。今の世界の技術水準で可能なものと言ったら、と考えるとどの知識も使えない。蒸気機関がギリギリできるか、ぐらいでしょうが、蒸気機関の構造なんて当然全く知りません。お湯が沸騰して気体になることによる力を使うのはわかりますが、それをどういう風に動力に変換するかなんてボクにはさっぱりわかりません。

ノーフォーク農法？　輪作なんて今でもやっています。というか前世のあの時代

だって輪作ぐらい普通にやっていたわけでして、そんなので農作物の収穫量上がるわけもなく……

ひとまず境界域の山脈の調査は始めていまして、魔石の鉱脈は見つかっていたりします。

魔石は魔力が結晶化したもので、エネルギー資源として使えるものです。と言っても一部の魔道具の部品になるか、純度の高いものが宝飾品になるか程度で、使い道が多いわけではないのですが……

鉱脈自体はとても大きくて、早速試掘が始まっています。ボクの手元にも大きな透き通った魔石が送られてきました。キラキラと七色に光るので確かにきれいですね。

ただ、取れるものはほとんどは見た目の悪いクズ魔石だそうです。魔力の含有量は変わらないようですが見た目が良くないのだとか。

「宝石以外で使い道ないかなぁ。ニキータさん、何かいい活用方法知らない？　もしくは使い方を知っている人」

ニキータさんは首都マーチの纏め役兼経済政策担当というとても忙しい立場になっています。うちの領で一番社会のことを知っているので、こういう時に頼りにしてし

まっています。

彼女自身、新しいもの好きなのと、仕事も首都の商人の人たちをうまく雇ってこなしているらしいのもあり、ボクの無茶振りにも結構付き合ってくれます。困ったときにこうやって声をかけると、三分の二ぐらいはどうにかしてくれて、三分の一ぐらいは無下に断られて諦めることになります。

今回の無茶振りについては、心当たりがあったようです。

「魔道具技師の方なら一人心当たりがあります。ムアク男爵領に住んでいる方で、今は隠遁している方ですね。偏屈な方なので応じてくれるかわかりませんが……」

「ムアク男爵領なら今日中に行けるかな。じゃあボクがちょっと説得してくるね」

ニキータさんが言った男爵領は、辺境伯首都から歩いて半日ちょっとすぐの村です。前回の対公爵軍の遠征の時に通過した村の一つでもあります。

そんなところに人材がいたとは。応じてくれるかはわかりませんが、ひとまず説得してみましょう。

正直、今の辺境伯家で一番余裕があるのはボクです。もちろん緊急事態になると非常に忙しくなるのですが、平和な時のルーチンワークはボクには基本ありません。

辺境伯首都の街の運営はニキータさんが、旧来の辺境伯領はアルゥちゃんとカーク子爵のアランさんが、魔の森周辺地域である新辺境伯領は義兄とキリル子爵のセバスさんがまとめてくれています。諜報及び情報収集要員としては、元ルドン男爵令嬢で現ルドン子爵になったフィオナさんが男も女も食いながら対応してくれていて、軍と道場は義兄とクレイが運営しています。

つまり、ボクの日常業務は0です。

偉い人は他人に仕事を任せられる、とてもいいことです。

後は裏切られないことを祈りましょう。

さて、話は置いておいて、そんな感じでルーチンワークがないボクはこうやって思い立ったらすぐ動けます。サクッと準備してどうにか説得しに行きましょう。

準備をしていると、ニキータさんが一枚の紙を渡してきます。

「これ、あらかじめ差し上げます」

「なんですか？　これ」

「魔道具技師、ドランさんというのですが、彼のツケの証書です。今まで取引があって、一つ一つの額は小さいのですが溜まって結構な額になっていますので。うまく使ってください」

「ありがたく使わせてもらいます」

ニキータさんから対魔道具技師さんへの最終兵器を受け取って、ボクは男爵領へと旅立ちます。

義兄に一声かけて、明後日までには帰ると告げてから一人ぶらり気軽な旅です。

一応武装はちゃんとしていきます。姫騎士痴女のビキニにボクの身長と同じ長さがある大剣を背負い、腰にはショートソードといういつもの格好です。

治安維持はちゃんとできていると聞いていますので、一人でもおそらく大丈夫だろうと思っていたのですが、町を出て2時間。

「誰か助けてぇぇぇ!!!」

女性の悲鳴が聞こえてきました。

悲鳴の聞こえる方に駆け付けると、女性が男性の一群に囲まれています。

男性達側は正規兵のような、武器防具一式をきっちり着込んでおり、一方女性の方は結構ボロボロで身なりが貧しい印象です。

男性たち側が物々しい雰囲気を出していますが、どちらが悪いかはわかりません。女性側が泥棒で、男性たちが捕まえているのかもしれませんし、女性が身売りされてどうにか逃げようとしているのかもしれません。

ただ、女性一人に男性２０人はちょっと多くないかな、と思いもしますが……

まだ、双方ともこちらに気付いていないようなので、声をかける前にもう少し確認をします。

通常正規の活動をしている場合、軍は所属を示す紋章をどこかにつけています。近隣の貴族の紋章をつけていれば、まあ一応正規軍として考えていいでしょう。判断するにはどこの貴族がどんな紋章を使っているのか覚える必要がありますが、全部覚えるのはとても大変でした。配下の貴族の紋章ぐらいは覚えていないと失礼ですし、敵味方混同しかねないですから実利的にも重要なのです。

さて、問題の男性達の紋章は……　剣の柄に刻まれていますね。獅子をかたどった紋章というと……　あれ？

「前キリル子爵の紋章……？」

「だれだっ!?」

思わず声を出してしまい、相手に気付かれてしまいました。
ボクは大剣を構えます。見間違いでなければ、あれは前キリル子爵の紋章です。
公爵軍が前キリル子爵周辺の者たちは根絶やしにしたと思っていましたが、もしかしたら残っていたのかもしれません。残党だったりすると悪さをすると大変ですし、対応が必要でしょう。

「ボクはマーチ辺境伯アーシェロット。貴殿らが何者か、明らかにされたし」
「マーチ辺境伯だと!?　確かにその銀髪と竜の角と尾は、あの簒奪者……　俺にもやっと運が向いてきたな!!」

ボクが名乗ると、一人のおじさんが、急に興奮し始めました。ロリコンでしょうか。触りたくないですね……

「俺は、キリル子爵にしてマーチ辺境伯の正統な後継者、ユーノだ!!　貴様の首、もらい受ける!!」

推定ロリコンおじさん、自称キリル子爵が剣を振りかぶってボクに襲い掛かってきま

した。
上段からの一撃は、確かに力の乗った、剣に慣れた一撃でした。
ボクは大剣で受け止めます。

「キリル子爵って、死亡したんじゃ……？」
「公爵に裏切られたが、あの程度で死ぬ俺じゃない！　替え玉で逃げ切って、正当に辺境伯を継ぐために隠れていたのさ！　そして、貴様を倒せば俺が辺境伯だ!!」
「いやそうはならんやろ……」
「何がだ！　今の俺の剣技は前辺境伯を上回っている!!　すぐに切り殺してやる!!」

前キリル子爵は意気揚々と明るい未来を語っていますが、これだけ負けて、混乱を起こしてきた彼ではボクを倒しただけでは誰もついてこないでしょう。エミリーが呼び戻されるか、公爵が兼任するか、義兄が引き継ぐか、そのあたりで落ち着くはずです。
そしてなにより……

「ふべっ!!」
「弱いですね、前辺境伯より強いとか過剰主張の極みでしょう」

剣戟のスキマを縫ってボクの拳が相手の顔面に突き刺さりました。

前キリル子爵は決して弱くはありません。男爵級は超えた腕前なのは確かです。

とはいえ、前辺境伯と比べるとどうかと言われると確実に弱いです。

前辺境伯、正式にはエミリーが一瞬引き継いでいるので前々辺境伯なわけですが、いろいろ問題があったとは思いますが強かったのは確かです。攻めて来られて戦ったとき、正攻法で戦えばボクが負けていた可能性は高いと思います。で、前キリル子爵はあの頃のボクですら勝てただろうレベルです。あの後新しい剣技も増やして、アルゥちゃんと一緒にトレーニングしてパワーアップしているボクの足元にも及びません。

ボクを倒せるぐらい強ければ、そもそも公爵にだって負けなかったはずです。義兄は公爵より強く、ボクは義兄より強いわけで、相性を考えても最低限ボクを倒すには公爵級の強さが必要です。

何をどう考えて勝てると思ったかわかりませんが、これなら何回やっても負ける気がしません。

「お、お前ら、助けろ!!」

「「「うおおおおお!!」」」

周りにいた兵士たちが前キリル子爵に加勢します。
２０対１になると確かに数的に劣勢ですが、とはいえそう苦戦する相手でもありません。大剣をブンブン振り回せば、彼らぐらいの腕では隙をついて攻めることもできないでしょう。

「「ぐわあああ!!!」」
「ひぐっ!?」
「たすけっ、ぎゃあああ!!!」

切れ味の鈍い大剣ですが、長さと重さは一級品です。
最初の一撃で３人を吹き飛ばし、切り返しで２人吹き飛ばし、さらにもう一度横に薙いで３人吹き飛ばし……
すぐに全員気絶させることができました。まあ兵士レベルなんてこんなものです。無双状態ですね。
あとは気絶した連中と、前キリル子爵を縄で縛れば、ここ最近、辺境伯領周辺を騒がせてきた前キリル子爵の最期です。

後の捜査はフィオナさんあたりに任せましょう。幸い生け捕りに出来ましたから、潜伏中の情報なども引き出せるでしょう。

まあひとまずは……

「そこの人」

「ひゃい!?」

「近くの村から人を呼んできて。賊を捕まえたって」

「わ、わかりました!!」

絡まれていた女性に頼んで人を呼んでもらいます。この人たちを叩きのめすなら簡単ですが、連れていけませんからね……

女性が駆けていく背中を見ながら、ボクは捕まえた連中を見張り続けるのでした。

8　技術

「助けていただいてありがとうございます。私はドリーと申します、辺境伯様」
「そんなに硬くならなくてもいいですよ、ドリーさん」

叩きのめした連中は、捕まっていた女性、ドリーさんの連れて来てくれた村の人達に預けました。ついでに首都の方へと馬での伝令をしてもらい、受け取りに来るように連絡をしています。

どうせ最後は死刑になるのだからさくっと殺してしまってもよかったでしょうし、ドリーさんが戻ってこなかったら実行していたでしょうが、一応何をしたかなどはいろいろ聞きだした方がいいのもありまして、せっかく生け捕りにしたのでちゃんと尋問をしてもらうことにしました。

そんな、捕縛と移送の手配を一通り終わらせる頃には日も暮れて、暗くなってしまっていました。

事務手続きはムアク男爵領に移動してしていたので、中途半端な場所で野宿をしないですみましたが、とはいえ泊る場所はまだ何も決まってません。

「そう言えばドリーさんは、家に帰るんですか?」
「いえ、父から売られたので、家には帰れないんです」
「あー、ご愁傷さまとしか言えないですね。でも納得していなかったと」
「当たり前です。父が道楽で作った借金をどうして私が返さないといけないんです。父がまず自分を身売りするべきでしょう」

ドリーさんは怒っていますし、そうだとすると身売りとして有効かどうか、かなり怪しいです。

身売りと奴隷化というのは、この国では合法です。当然奴隷だから何でもしていいわけではなくてルールはありますが、色々主人となる人の言うことを聞く必要があります。

そして、身売りができるのは本人だけです。親とか夫とか、そう言う関係ではできないわけです。普通、貧しい家ならば飢えるか飢えないかのギリギリで生きるより、身売りして奴隷になったほうが幸せになれますので、そう言う人たちが奴隷になっていきます。奴隷になれば、最低限主人は食事は与えないといけませんからね。

ですがドリーさんの場合、本人が承諾しないで売られたようです。まあ買った側も落

ち武者もどきですから、実質的に人さらいというかなり違法なことを躊躇なくしていたのでしょう。

「そう言えば、辺境伯様はどのようなご用件だったのでしょうか？」
「人探しですね。魔道具技師のドランさんという方を探しているのですが」
「……」
「どうしました？」
「ドランは、私の父です」

またとんでもない巡り合わせを引いてしまったようです。

ひとまずドリーさんには危なくないように村の中で待機してもらい、ボクは情報収集を始めます。なかなか大ごとになってきています。
ドランさんという人は、ボクの予想では腕は立つけど経済的なセンスが壊滅している魔道具技師、という読みでした。ニキータさんがツケを認める程度には腕が良くて、でも返せなくなっているあたり経済的にはダメダメだろうというところです。
そうすると、給料で釣って勧誘するか、最悪借金を盾に債務奴隷にして連れて帰るか、

と言ったことを考えていました。

この世界、奴隷と一言に行っても三種類あります。

一つは一般奴隷。身売りで売られた奴隷です。三種類の中では一番素性が良く、ですがあまり能力が高くない奴隷です。手に職がある人なら身売りしないで自分で稼ぎますからね。単純作業とか家事とか、そういうことをやってもらうのに向いています。一部は娼館などにも引き取られたりしますが、ああいうところはああいうところで技術が必要ですからね……

一つは債務奴隷です。何らかの理由で借金が返せなくなった人が奴隷になるパターンですね。この奴隷の特徴は、何らかの特殊能力を持っていることが非常に多いということです。何の技術も能力もないのに借金を貸す人はごく少数ですからね。一方で、経済活動に向いていない特徴もあります。返せるだけの技術、能力があってでも返せない訳ですから、まあ推して知るべしです。

最後が犯罪奴隷です。前世なら犯罪者は刑務所に捕まえておきましたが、あれ、すごいお金がかかるわけです。中世に人権なんてないし、お金もかけたくないので、使い捨ての奴隷にされます。当然保護は一番弱いですし、犯罪者ばかりですから使い勝手は全くよくありません。鉱山なんかで使い捨てたりするのが良くある使い方です。

ドランさんという人は二番目の債務奴隷に向いていると思いましたが、場合によって

は犯罪者崩れですから、そうなると何か研究させるには向いていません。
裏で犯罪的なことされても困りますからね。
とはいえドリーさんがボクに嘘をついている可能性もあります。
なので裏付けとして、客観的な意見が必要になります。幸い、ボクは辺境伯ですし、大取物をした後ですから、ムアク男爵にお話を聞いてみることが可能です。

「お久しぶりです、ムアク男爵。突然お騒がせして申し訳ありません」
「いえいえ、最近近くにならず者が現れて困っていたところです。辺境伯に捕まえていただいてこちらも助かっております」
「そういっていただけると助かります。それに関連して一つ聞きたいことがありまして」
「なんでしょうか？」
「前キリル子爵に捕えられていましたドリーさんという方についてお聞きしたく。彼女曰く、勝手に父に売られた、と言っていました。子供だとしても親が勝手に身売りするのは犯罪です。もっともドリーさんが嘘を言っている可能性もありますから、ドリーさんとその父親について教えていただきたく」

男爵は男爵領の代表で、村の人のことはよく知っています。ボクも出身のライン男爵領のことならかなり詳しい自信があります。まあ最近人の流れも多そうですしボクが知っている男爵領じゃなくなっている可能性もありますが……

閑話休題、ドリーさんもドランさんもこの村の人のようですし、まずは男爵に意見を聞くのが一番手っ取り早いわけです。

「私としては、ドリーの言うことが正しいと思っています。彼女はこの村にある農具の修理や、小さな魔道具を売ることで生計を立てていました。村としても助かっていましたし、彼女自身は生計をたてられていたはずです」

「ドランさんの方は？」

「あまりいい男ではありませんな。娘に集っていたのは私も見たことがありますし、借金もあったと聞いております。昔は腕の立つ魔道具技師だったとは聞いておりますが、そういった仕事をしているとはトンと聞きません」

男爵が言うことを聞く限りはドリーが正しそうに思えました。

しかし、なんとなく引っ掛かります。

ボク個人の好みとして、部下がそういうたぐいの人間を使うことまでは否定しません

が、あまり悪人を直属の部下には使いたくありません。
ニキータさんもボクのそういう好みはわかっていますから、てっきり金にはだらしないが腕のいい人だと思い込んでいましたし、ニキータさんはそう分析していると思います。
ですが、男爵から聞いた人物像や、ドリーさんから聞いた人物像は結構違うように思えました。ニキータさんの人選ミスならそれはそれで納得ですが……　もうちょっと情報を集めてみましょう。
今日は男爵の家に泊まらせてもらうことにして、ドランさんのお家へとドリーさんを連れていきます。
ドランさんの家は村のはずれにありました。ぼろい家です。
ひとまずノックをしてみましたが反応がありません。全力でノックすると家が崩れそうです。
中に人の気配がするので、話しかけてみました。

「すいませーん、ドランさんいらっしゃいますか？　娘さんのドリーさんについてお話したくて伺いました」
「俺に娘などおらん!!　帰れ!!」

取り付く島もありません。

「父は、もう私に会いたくないのでしょう」

「そのようですね」

できれば双方の話を聞いてみたいと思いましたが……

このまま粘ると遅くなりそうですしひとまず今日も遅いですし、出直しましょう。

「そういえば、辺境伯様はどうして父を訪ねてきたのですか？」

「最近、辺境伯領内で魔石の鉱山が見つかりましたから、魔道具技師を探しているんですよ。ドランさんが魔道具技師と聞きましたので」

「なるほど……　よろしければ、私を雇いませんか？　私も父に魔道具技術を習っています。父ほどではないですが、お役に立てるかもしれません」

「それもいいかもしれませんね」

如才なく売り込みを掛けに来るドリーさん。魔道具は高いですから、後ろ盾が必要で

しょうし、辺境伯に売り込みに来るのはまあ当然と言ったことでしょう。

まあそれもありかな、と思いつつ、ボクは本日泊まる男爵の家へと向かうのでした。